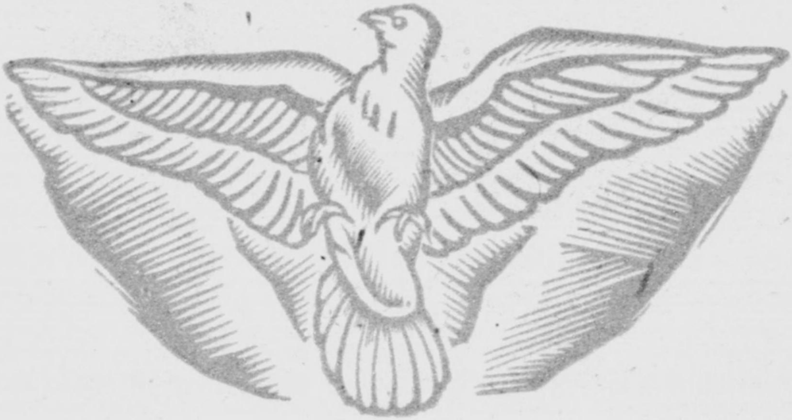


この

第6

付け

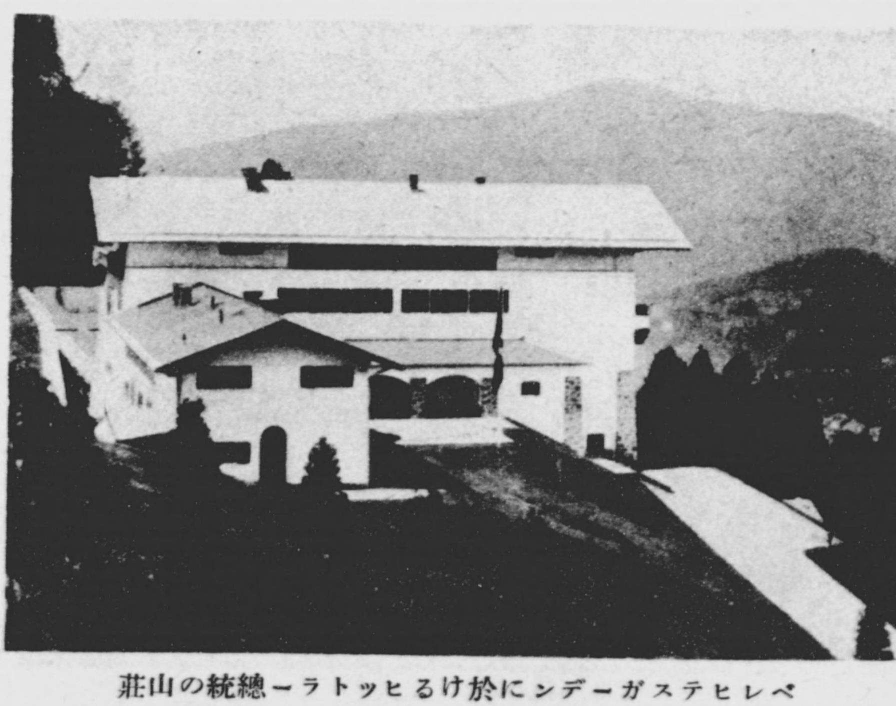
戰ふ獨逸



東京
第一書房

著者の父に贈られたるヒットラー總統自署寫眞





ベルヒテスガーデンに於けるヒットラー總統の山莊

謹んで此書を

祖　父　友枝速水翁

外祖父　日高龜市翁　の靈前に捧ぐ

装幀　東山魁夷

序

大東亞戰爭と歐洲戰爭とは、言ふ迄もなく一つのものである。われわれの敵米英は、同盟國である獨逸、伊太利にとつても、同樣に敵である。又、日獨伊樞軸は單に共同の敵に對して戰ふといふだけでなく、さらにこの戰爭を通じて建設しようとする世界新秩序についても、同じ目的と責任とを持つて居る。かくの如く、新しく世界の歷史を作り變へようといふやうな同盟は、未だ曾つて歷史上にその例を見ないのである。永く人類を毒して來た虛僞と惡德の一切を、この地球上から拂拭せんといふ大理想によつて結ばれた日獨伊三國は、もはや單なる友達といふより、血によつて結ばれた兄弟ともいふべきであつて、全くの一身同體である。我の喜びは彼の喜びであり、彼の悲しみは我の悲しみである。隨つて喜怒哀樂、生死をともにと契つたわれわれとしては、西の歐洲戰爭を徒らに、高見の見物で居ることは絕對に許されない。國民は獨逸の敢鬪を、戰友の戰ひとして注視しなければならぬ。

この意味で、今回友枝宗達君著「戰ふ獨逸」が公刊せられたことは、極めて時宜に適するものとして私は衷心より喜ぶものである。友枝君は歐洲戰爭勃發直前より獨逸に在り、同盟通信社の伯林特派員として縱横に活躍して居る新進氣鋭の士である。同君が伯林に出發せらるゝ少し前、私は獨逸の視察から歸朝したばかりであつたが、同君は私を訪ねて來られて、私の獨逸觀を徵された。私は私の眼に映じたヒットラー總統治下の獨逸の逞しい躍動振りや、日本精神に共通するナチス精神について語り、又、歐洲に必ず一大戰亂の起ることについても確信を以つて語つた。そしてこの動亂直前の歐洲に使して、盟邦獨逸の情勢を日本に傳ふる同君の重責に對して、大いに鼓舞と激勵を送つたのであつた。

伯林に駐在してからの同君の活躍は、私の期待を裏切らなかつたばかりか、素晴らしい業績を示して私を驚かした。戰爭直前、總力を擧げて國防國家の建設に邁進しつゝあつた獨逸の樣子は、政治の面といはず、經濟の面といはず、手にとるやうに同盟通信によつて日本に報ぜられたが、その中に友枝君の努力が加はつて居ることは勿論のことであり、歐洲戰爭勃發以來はひとり戰局の推移について、犀利な觀察を報告して來たばかりでなく、自ら西部戰線、バルカン戰線及び南露の戰跡をも踏破して、その戰爭見聞記を卓拔せる麗筆によつて度々報道した。

本書はこれらのうち、雜誌に登載せられた主なるものが、嚴父東京文理科大學名譽敎授友枝高彥

先生の手によつて纒められたものである。この友枝先生は、私の常に敬慕してやまない同郷の先輩である爲め、その長子である著者とはその學生時代からの知友である。私がその都度親愛の念と關心とを以つて讀んだ同君の數々の通信が、この度嚴父の慈愛によつて上梓され、廣く江湖に讀まれることは、盟邦獨逸の實相と歐洲戰局の實況を國民に知らしむることに役立つことと共に、私にとつては公私重ね重ねの欣びである。

昭和十七年十月

情報局にて

奥村喜和男

目次

大戰勃發の二週間（現地的視角より觀る）……三六

寫眞目次

戰ふ獨逸

大ドイツ國會にヒットラーの獅子吼を聽く

一 大ドイツ國會

ヒットラー總統が何をドイツ國民に語るか？　如何に全世界へ呼びかけるか？　ドイツ國民が、否、全世界が一月三十日（一九三九年）の大ドイツ國會に於けるヒットラー總統の施政方針演説に對して一齊に眼を注いだのも、實にこの興味と關心があつたからなのだ。昨年、ドイツは先づオストマルク（舊オーストリア）を合併し、次にズデーテン地方を編入して、遂に待望の「大ドイツ國」を作りあげた。從つて今度の國會は第一回の「大ドイツ國會」なのである。この日、ベルリンの各新聞は第一面打拔きの大見出しで豫告報道に力を入れ「今夜全國民は、午後八時から必らずラジオの前に坐るべし」などと書立てゝ、開會前既に雲行のたゞならざるを思はせた。

場所はケーニヒスプラッツのクロル歌劇場――この新生ドイツ國會の議場と向ひ合つて、共産黨

放火事件のあつた舊議事堂が寒空に寂しく立つてゐるのは、面白い對照だ。午後八時開會といふのに、もう三時四時頃から歌劇場の前には市民がチラホラ集まり始め、群集を目當ての屋臺店がこゝかしこに店を開き出す。この間を制服姿ものものしい突擊隊員や親衛隊員が、眼を光らせて巡邏してゐる。天氣はいゝが、風は寒い。

二　議場の光景

私は定刻三十分前新聞記者席に腰をおろしたが、もう豫て顏見知りのロイター、アヴアス等の特派員連が、微笑の中にも深い緊張を祕めて腰掛けてゐる。そのうちの一人が「今日はどうせ、君たち日本人には惡い卦は出ないからいゝなア」と笑ひながら話しかける。傍聽席の數は尠いが、歌劇場だけに座席番號が定まつてゐて、坐り心地も日本の議事堂よりは良い。

議場の構造は日本のと殆ど同じい。唯雛段が緩い傾斜になつてゐる點が違ふ。議場正面、議長席の背後に物凄く巨大な鷲とハーケンクロイツの徽章が金色燦然と輝いてゐる。非常に効果的だ。演壇の背面を眞白く塗つてゐるのも、ドイツ的な舞臺効果の狙ひ方である。

議員の出足はなか〳〵早く、定刻十五分前には議席は殆どもう埋め盡されてゐる。それが二三の例外を除いて、殆ど全部褐色（ＳＡ）と黑色（ＳＳ）の制服だからまさに壯觀である。親衛隊總司



大ドイツ國會で獅子吼するヒットラー總統

中央上段議長席・ゲーリング元帥

令ヒンムラー、突撃隊總司令ルッツエ等の錚々たるナチス幹部の顔も見える。だが何と言つても特に眼を惹くのは、今度新しく加はつたオストマルク及びズデーテン地方選出の議員團である。ザイス・インクアルト、コンラート・ヘンライインの兩巨頭を中心に皆嬉しさうな顔をして談笑してゐる。

演壇右側の閣僚席にはリッベントロップ外相、フリック内相、ゲッベルス宣傳相、シヤハト無任所相、フンク經濟相等が居並んでゐるが、日本と違つて氣樂なもの、議員席へ向つて話しかけたり、遠く傍聽席の知人と手で挨拶し合つたりしてゐる。言はば家族會議とでも言ふべき

支那大使陳介が小さくなつて腰掛けてゐる。皆大島大使には盛に挨拶したり話しかけたりするが、陳介には誰も話しかけようとしない。寂しさうな樣子がありありと見える。

面白いのは外交官席である。最前列に我が大島大使が悠然と控へてゐるのに對し、第二列目には

國會の性質から來るのであらう。

三　ヒットラー總統の登壇（國防軍への感謝）

正八時、突如議員が總立となつて「ハイル、ハイル！」と連呼し出した。ヒットラー總統の入場なのだ。右側の入口からゲーリング元帥、ヘス總統代理等の幕僚を從へて歩いて來る、悠々たる歩調。ゲーリング元帥が議長席について開會を宣する。議員團長フリック內相が演壇に進んで議案の說明をする。このやうな議事の進行中、總統は兩手を机上に組み、少し俯き加減にジイーッと眼を据ゑてゐる。深い瞑想に耽つてゐるとしか思はれない。八時五分議案終了、總統は議長に招かれ、厚さ三寸もあらうと思はれる草稿を手に演壇に立つ。五秒……十秒……總統は默したまゝ、ジイーッと上の方を見詰めてゐる。彼によく見受けられる夢みるやうな眼差だ。あたかも天の啓示を待ち受けてゐるかのやう。誰かが咳をした。たつた一つの、しかも極く輕い咳ではあつたが、それが場內に大きく響いた程、その時、緊張と靜肅とが一面を支配してゐた。息の詰まるやうな一瞬「我が國

會議員諸君！」といふさびのある聲が、やがて總統の口から洩れる。先づ今を去る滿六年前、一九三三年組閣當時のことから回顧を始め、

「一九三三年一月三十日、胸に救國の抱負を祕めて、余は初めてウイルヘルム街の首相官邸に入つた。而して六年後、――今や、余は第一回大ドイツ國會に向つて語り得ることとなつた！」

と無量の感慨をこめて語り、其間數多くの尊き犧牲者が鮮血に倒れた過去の鬪爭史を回想して、

「無數の斃られたる死傷者こそは、斯かる鬪爭の生きた證據である」

と絕叫する。續いて、昨年のオストマルク併合、ズデーテン地方編入當時の經緯を詳細に報告して、斯かる無血の勝利をかちえた裏に潛むドイツ國防軍の威力を讚美し、

「我が新裝備のドイツ國防軍が迅速、有效にその威力を發揮するといふ期待は、裏切られずして立派に證明されたのである。斯くして我が新國防軍は、その最初の試驗に輝しい成績を以て及第したのである」

と國防軍の將兵に感謝の辭を贈つた後、更に廣義國防訓練の必要を强調して曰く、

「服從と訓練とが單に軍隊にのみ必要でありそれ以外の國民生活に於いては餘り效用が無いやうに考へる者もあるが、斯かる考へは愚の骨頂である。否、寧ろ反對である。よく訓練され且つ服從に馴れた國民協同體は、民族の生存權を主張し、その主張を貫徹する爲め、國家總力を能率的に動

員することが出來る」

四　ナチス精神と黨への忠誠

論旨進むに從ひ、ヒットラー總統の舌鋒は益ゝ鋭さを加へ、眼は輝き、頬は紅潮して來る。總統は感激せる議員の熱烈な拍手の中に、ナチス精神に對する信仰と黨に對する忠誠の何よりも重要なことを力說して曰く、

「もし彼にして、必要とあれば理想乃至主義の爲めに身命を賭する固い決心さへ持つてゐるならば、たとひ彼に千の缺點あらうとも、それは許されるであらう！」

この一言は、最近兎角噂の種になつてゐる某有力閣僚の爲めに友情深い辯護を爲したものと解釋され、聽衆の胸をピカリと電光の如く打つた。總統は更に語を續ける――

「黨、國の指導的地位に立つ爲めには、單に空虛な學問的資格よりも、その人の人格的資質の方が遙かに重要である。何となれば人を指導するには、抽象的な知識の分量よりも、生來の指導能力、從つて高度の責任感、決斷力、勇氣及び意志力の方が決定的な役割を演ずるからである」

論旨は一轉して進む。

「我がドイツは疑ひもなく、以前から非常な經濟的苦境に立つて來た。然り、その苦境は一九一八

年に於いては、殆ど前途の目算立たざる底のものであつた。當時のドイツ經濟界はこの困難の前に他愛もなく屈服し、他の國々の袖に縋り、揚句の果は振り棄てられて了つたのである。然るに我が國民社會主義は、この宿命への降服を潔しとせず、敢然立つて國民自立の精神作與を叫び續けたの



ゲーリング議長

である。我々の方針は二つある。我々は先づ第一に、我が國民の物心總力を動員して大規模な鬪爭を行ふのだ。第二に、我々はこの鬪爭を完全に勝ち拔くのだ。いや、勝ち拔いて來たのである。……實例を示さう。ドイツ國民は一平方粁の面積中に百三十五人住んでゐる。しかも何の外部的援助、

何の貯藏食糧も無しに！　あらゆる外國から搾取し盡され、天文學的賠償金を負はされ、植民地は全部取上げられたが、しかし、ドイツは默々として、食ひ、着、且つ働いて來た。借問す、世界何處の國に、デモクラシー國に、斯かる鮮かな曲藝をやつてのける國があるだらうか！」

滿場ドーッと來る。我意を得たりといふ氣持だ。ゲーリング議長も血色のいゝ顏をニコ〳〵させながら、大きな手でゆつたりとパチ〳〵拍手を送つてゐる。議長が拍手するなど日本の議會では想像も出來ぬことだが、ゲーリング議長の拍手はなか〳〵愛嬌があつて良い。

五　植民地問題

いよ〳〵油の乘つて來たヒットラー總統は、舌鋒鋭く僞裝デモクラシー諸國に攻擊の矢を向けて、

「全國民九十九パーセントの支持を得てゐる我がナチス政權は、惡辣極まる選擧干渉に依つて漸く生き永らへてゐるかの僞裝デモクラシー諸國と同日に論じ得るであらうか？」

と見得を切り、更にナチス・ドイツの悲壯な覺悟を披瀝して、

「國民社會主義は、內政的にも、外交的にも、『屈服』なる言葉を知らぬ。我々は解決すべき問題を掴み、而してこれを解決せずんば已まぬ覺悟と決心に燃えてゐる。我々は、我がドイツに不足する物質的條件を、勤勞の汗と勞働力の集中とに依つて補はねばならぬのである」

と絶叫する。耳を聾する拍手の嵐。ゲーリング議長も、重要な箇所箇所では深くうなづきながら耳を欹てて聽き入つてゐる。

總統の演說はいよ〳〵佳境にはいる。植民地問題だ。

「ドイツ植民地の强奪は、道德的にこれを見れば不正である。經濟的にこれを見れば狂氣の沙汰である。政治的にこれを見れば、寧ろ無智と言ひたい程卑劣な行爲である。……列强の全部が世界の富を公正に分配する事は如何にして保證され得るか？ 我がドイツのやうに八千萬の人間が賤民にまで押し落され、以前甘い汁を吸つた諸國がその財產に齧りついて居られるなど、眞面目に考へたら我慢の出來ることであらうか！ 次のことは明瞭だ。世界の富を暴力で分配するやうなことがあれば、その富は其の後折に觸れ再び暴力を以つて修正を受けることとならう。これに反して、もし分配が公平に理性に從つて行はれるならば、その公平と理性とは必ずや正義と合目的性を齎すことであらう。……持てる國と持たざる國との差別は決して宿命的なものではない。この世界に於ける所有關係は、實に歷史の流れと共に生じたものなのである。……ドイツが平和時に條約と買收とに依つて獲得した廣大な植民地は、米國大統領ウイルソンが休戰提議の時に與へた保證にも拘らず、諸外國に奪はれて了つたのである」

この時、總統の顏には言ひ知れぬ悲痛な色が浮ぶ。眼は銳く輝き、兩手は昂奮の爲めに震へてゐる

る。場内は、熱に魘されてゐるやうだ。拍手の音さへ起らない。總統の聲は益々熱を帶び、彼は嚙みつくやうな聲で絕叫する。

「然しながらドイツは、軍備增强の爲めに植民地を必要とするのでは斷じてない、全く經濟的負擔を輕くせんが爲めに他ならない。充分なる食糧供給と必要缺くべからざる原料品無くしては國家の經濟的存立は不可能である」

六　國民社會主義と國家經濟

息詰まるやうな緊張のうちに、演說はいよ〳〵經濟問題へと進む。

「現にドイツの經濟政策が直面してゐる壓迫は非常に大きく、資本主義的方法を以つてする如何なる脅迫もこの經濟活動を抑止し得ぬ程である。何故ならば、我がドイツの經濟推進力は、二三の資本家の利潤活動ではなくて、外債に依つて無理强ひに押付けられた國民協同體全部の困苦缺乏であるからだ」

と、大戰以來列國の苛酷な壓迫に依つてドイツの財政、經濟が如何に荊棘の道を辿つたかを詳說する。

「我々は食料品を買ふ必要上、輸出を盛んにしなければならぬ。そしてこの輸出は我々の持たな

い原料品を幾らか要するから、我々はこの原料品を手に入れる爲めに、更に〱輸出を增さなければならない。詰り、斯うである。我がドイツ國民は生きる、卽ち輸出するか、然らずんば死ぬかである。そして余は今、凡ゆる國際的疑惑に對して確言する事が出來る——ドイツ國民はこの事で斷じて死ぬやうな事はせぬ、ドイツ國民は必ずや生き拔くであらうと！　我が黨の首腦は國民社會主義協同體の全力を擧げて、斯かる鬪爭を飽くまで戰ひ拔くであらう。黨、國の首腦に關する限り、凡ゆる事態に對して用意と決心のある事を余はこゝに斷言する」

長い〱拍手、總統は辿り來し苦難の道を回顧しながら、國立銀行改組等の財政策を諄々として說き去り說き來つたが、さて一段と聲を張り上げて曰く、

「國防力の强化といふ點に於いて人力の能ふ限りの事をする。——これこそ、國民社會主義的國家指導の最高課題であると余は信ずる」

舌鋒は更に一轉して、デモクラシー諸國の逆宣傳攻擊に移る。

「我がドイツはこゝ數十年間酷い不正に惱まされ續けて來ながら、少しも他國を害せず、また他國から害されない事を欲して來たのに、我々所謂、全體主義國家に對して勝手放題なデマを捏造し、輿論の間に反感を挑發する事が、或る種民主々義者たちの有難い特權でもあるかのやうに見える。……

我がドイツ國が、嚴然たる獨立國家である限り、斯かる挑戰攻擊に對して敢然と應戰の武器を執る事

を、英米の政治家達から差止められるいはれの無いこと勿論である。……今後我國の新聞通信等宣傳機關を動員して此の種攻撃に反撃を加へること、とりわけドイツ國民に斯かる逆宣傳の事實を知らしめること、これ等の必要な事を余は信ずる者である」

七　ユダヤ主義の絶滅と對敎會問題

演說は更に核心へと進む。總統はユダヤ人問題を舌頭に載せ、うつかりすると聽き取れない程の早口でまくし立てゝ行く。先づユダヤ人の恐るべき害惡を縷々と說明し、

「ユダヤ人問題は解決が早ければ早い程良いことを余は確信する。何となれば、ユダヤ人問題が片付かない限り、歐洲に平和の光は訪れないからである。……余は今日、こゝに再び豫言者として叫ばう。列國を又もや世界戰爭の慘禍へと突き落す陰謀が、歐洲の內外で國際的ユダヤ資本閥の手に依つて成就するやうな事があるならば、その結果は世界のボルシェヴイキ化やユダヤ民族の勝利とならずして、却つて歐洲に於けるユダヤ民族の絶滅となるであらう！……萬國の勞働者よ團結せよ――といふユダヤ的標語に代つて、萬國の創造的國民よ、汝等共同の敵を認識せよ――といふより高いスローガンが勝利を叫ぶであらう！」

と、その斷乎たる決意と信念とを力強く表明する。閣僚席では、ヘス總統代理は椅子を演壇の方

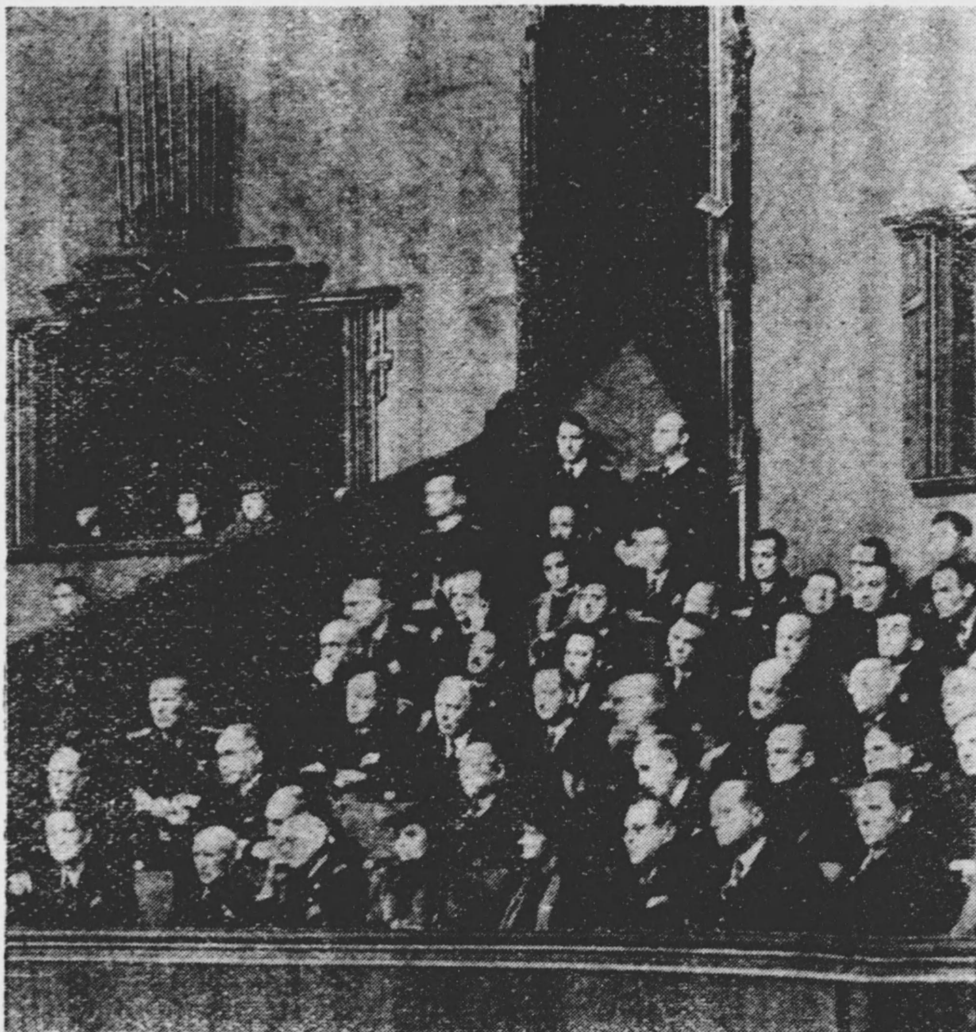
へ向け直してジイーッと聽き入つてゐる。ゲッベルス宣傳相も亦軀を乘出し、兩手を机上で組んで總統を見詰めたまゝだ。リッベントロップ外相はさすがに外交官だけあつて、正面を向いて腕組をしたまゝ動かずに聽いてゐる。

ヒットラー總統は次いで對敎會問題を取上げて曰く、

「我國では今日まで何人も、その宗敎的所屬の爲めに迫害を受けた事は無いし、將來も亦絶對に無いであらう！……もし外國の政治家にして第三國家の宗敎迫害を云々するやうな者があるならば、それは全く鐵面皮の言葉としか思はれない。然し萬一ドイツの敎會が實際に現在の狀態を耐へられないと思ふならば、我が國民社會主義國家はいつでも、佛米諸國のやうに宗敎と國家とを畫然と分離するだけの用意を持つてゐる。……我々は神に奉仕する者としての僧侶は保護するつもりであるが、ドイツ國の政敵としての僧侶は絶滅しなければならぬ」

八　同盟國家に對する認識と感謝

舌鋒いよ〳〵冴えて、論點は外交問題へと移る。總統と親交のある大島大使は、時々大きくうなづきながら熱心に聽き入つてゐたが、こゝに至つて更に軀を前方に乘出し、一語も聽き洩さじと耳を欹てる。支那大使陳介の顏面にも緊張した色が浮ぶ。



外交官傍聽席

前列左端・大島大使　一人おいてアツトリコ伊大使
第二列中央・陳介支那大使　最後列右端・宇佐美參事官

「現在の迫りつつある危機に直面して歐洲及び歐洲以外に友邦を得たことは余の大きな幸福である。イタリアと日本即ちこれである。兩國共にドイツ民族と同樣、その民族的存在の爲に最も激烈な戰ひを續けねばならぬ國々である」

大島大使の顔が緊張する。

「今日の國民社會主義ドイツは我が友ファッショ・イタリアに對し次の大決斷を爲したことを世界に闡明し、全世界の政治家に知らしめるのが寧ろ平和に貢獻する所以であると信ずる。今日のイタリアに對して戰爭が勃發するならば、その動機原因の如何を問はず、ドイツはイタリアの側に立つとの決定これである。我國の現國防軍が近代戰の最高要求に應じ得る戰鬪力を有するのは勿論だが、イタリア軍も亦同樣に優勢である」

大島大使が一人置いて隣席のアットリコ伊大使の方をチラリと見る。アットリコ大使が微笑を以つてこれに報いる。微笑ましい防共風景だ。

「ナチス・ドイツとファッショ・イタリアとは、何人に抗しても平和を擁護し、突發する事件を有效に終了させるだけの實力を有してゐる。だが、これはドイツが戰爭を欲するからではなくして、ただ次の理由に基くものである。

一、ドイツは他民族がその人口と勇氣と能力とに相當する程度に世界貿易に參加せんとする勢力を充分に理解する。

二、ドイツは權利を承認すると共に、これを共同に主張する決心がある。而して脅威的言動に對しては、如何なる事あるも絶對に屈服しないからである」

總統は一寸息を切つて更に續ける。

「日本との關係も亦イタリアと同様である。盲目化した四國の世界のボルシェヴイキ化を斷乎防止せんとの認識及び決斷に基づき、我々はまた日本の味方である。防共協定は今後に於いて、世界平和及び文化の脅威と闘ふ諸列强群の結晶點となるであらう。世界の他端に立つ日本民族は、明かに人類文化の擁護者である。この二年の歳月に日本民族は、如何に多くの輝かしき英雄精神の實例を我々に示したことか！」

大島大使はジイーツと演壇を見詰めたまゝ深い感動の面持である。アットリコ大使が大きくうなづく。意氣銷沈して首をうなだれてゐる陳介大使といゝ對照だ。

「日本の破綻は歐洲其の他の文明國の利益とはならなくて、東亞のボルシェヴイキ化を招來すること確實であらう。このやうな事態を欲する者は、ボルシェヴイキ化を望む國際ユダヤ人位のものである」

九　その他の諸外國に對する外交方針

次いで對英佛關係が爼上に上る。總統は對英佛不戰聲明の意義を闡明し、更に植民地返還要求を繰返した後、遙かに西歐の空を望むやうな眼差で叫んで曰く、

「西歐放送局の中には反獨宣傳に憂身を窶してゐる者もあるが、もしこれを停止しなければ、我方

にも應戰の肚が出來てゐる。此の種放送局乃至一部新聞紙の如きは戰爭の到來を願つてゐるが、余は長期の平和を確信する者である！（ドッと起る拍手の嵐）……今、英獨兩國間に何の利害對立があらうか？　ドイツ人で、殊に國民社會主義者で英帝國に邪魔を企てる者は一人もゐない事を、余はこゝに再び保證する。……英獨兩國民が信賴し得る協力にまで到達することが出來るならば、それは全世界に取つての幸福となることであらう。對佛關係も亦同樣である」

進んでポーランド、ハンガリー、ユーゴースラヴィア諸國との關係に轉じた後、防共協定の强化に觸れて曰く、

「ハンガリーと滿洲國の防共協定參加は、ユダヤ的國際的ボルシェヴイズムの民族脅威に對する世界防共陣の强化と考へられ、洵に慶賀に堪へぬ次第である」

ヒットラー總統の聲は激湍の如く、奔流の如く、また嵐の如く議場を搖ぶつて行く。滿場はたゞ醉つたやうに、陶然としてこれを聽いてゐる。場内は一つの火の塊だ。

「對南米諸國との關係、特に經濟關係が欣ばしい發展をなしてゐるのに反し、對北米關係好轉は、逆宣傳の爲めに行き惱んでゐると言はねばならぬ。ドイツが米國の獨立と自由を脅かすなどとは全くたはごとに過ぎぬ。……ドイツは他の凡ゆる國々のやうに、米國との平和、友好を翼ふものである。米國への干涉が拒否されると同樣、我々は米國が我國に干涉し來ることを斷乎として拒絕する」

噴騰し爆發する熱狂と昂奮のうちに、演說はいよ〳〵終末へと進む。總統は最後に臨んで再び辿り來し鬪爭の跡を回顧し、

「血の犧牲なくしては、我々は遂にドイツ民族の大帝國を打建て得なかつたであらう。けれども我々は、この鬪爭が多くの同志に取つて如何に苦痛多き犧牲であつたかといふ事を決して忘却する者ではない」

と敬虔な態度で述べた後、あたかも祈りを捧げるやうな面持で、

「我々は神に、全能の神に感謝する。我々の同志に對して、この時、この時代に生きる惠みを垂れ給うたことを！」

と語を結ぶ。この時、滿場の議員一齊にスックと起ち上つて總統の方へ手を差伸べ、「ハイル、ハイル！」と力強く連呼する。聲の嵐だ。時に十時二十分――まさに二時間十五分に亙る大獅子吼である。

私は締切時間のことを考へて、直ぐ外へ飛び出した。外はギッシリの人だかり、皆まだ感激の消えやらぬ顏をしてゐる。この寒い夜の戶外で、今まで擴聲器を圍んで立つてゐたのだ。折からの月夜、私は月影を踏んで同盟支局の方角へ走つて行つた。歸途に就く總統を送る歡呼の聲であらう、うしろから「ハイル、ハイル！」といふ叫び聲が怒濤のやうに響いて來た。（昭和一四・二・五）

共產「インターナショナル」ニ對スル協定

（昭和十一年十一月二十五日ベルリンに於て締結）

大日本帝國政府及
獨逸國政府ハ
共產「インターナショナル」（所謂「コミンテルン」）ノ目的ガ其ノ執リ得ル有ラユル手段ニ依ル現存國家ノ破壞暴壓ニ在ルコトヲ認メ
共產「インターナショナル」ノ諸國ノ國內關係ニ對スル干涉ヲ看過スルコトハ其ノ國內ノ安寧及社會ノ福祉ヲ危殆ナラシムルノミナラズ世界平和全般ヲ脅スモノナルコトヲ確信シ
共產主義的破壞ニ對スル防衞ノ爲協力センコトヲ欲シ左ノ通協定セリ

第一條　締約國ハ共產「インターナショナル」ノ活動ニ付相互ニ通報シ、必要ナル防衞措置ニ付協議シ且緊密ナル協力ニ依リ右ノ措置ヲ達成スルコトヲ約ス

第二條　締約國ハ共產「インターナショナル」ノ破壞工作ニ依リテ國內ノ安寧ヲ脅サルル第三國ニ對シ本協定ノ趣旨ニ依ル防衞措置ヲ執リ又ハ本協定ニ參加センコトヲ共同ニ勸誘スベシ

第三條　本協定ハ日本語及獨逸語ノ本文ヲ以テ正文トス本協定ハ署名ノ日ヨリ實施セラルベク

且五年間效力ヲ有ス締約國ハ右期間滿了前適當ノ時期ニ於テ爾後ニ於ケル兩國協力ノ態様ニ付諒解ヲ遂グベシ

共産「インターナショナル」ニ對スル協定ノ附屬議定書

（昭和十一年十一月二十五日ベルリンに於て締結）

本日共産「インターナショナル」ニ對スル協定ニ署名スルニ當リ下名ノ全權委員ハ左ノ通協定セリ

（イ）兩締約國ノ當該官憲ハ共産「インターナショナル」ノ活動ニ關スル情報ノ交換竝ニ共産「インターナショナル」ニ對スル啓發及防衞ノ措置ニ付緊密ニ協力スベシ

（ロ）兩締約國ノ當該官憲ハ國内又ハ國外ニ於テ直接又ハ間接ニ共産「インターナショナル」ノ勤務ニ服シ又ハ其ノ破壞工作ヲ助長スル者ニ對シ現行法ノ範圍內ニ於テ嚴格ナル措置ヲ執ルベシ

（ハ）前記（イ）ニ定メラレタル兩締約國ノ當該官憲ノ協力ヲ容易ナラシムル爲常設委員會設置セラルベシ

共産「インターナショナル」ノ破壞工作防遏ノ爲必要ナル爾餘ノ防衞措置ハ右委員會ニ於テ

考究且協議セラルベシ

文化的協力ニ關スル日本國獨逸國間協定

（昭和十三年十一月二十五日東京に於て締結）

大日本帝國政府及

獨逸國政府ハ

日本文化及獨逸文化ガ一方ハ日本ノ固有ノ精神ヲ、他方ハ獨逸ノ民族的及國民的生活ヲ其ノ眞髓トスルニ鑑ミ日本國及獨逸國ノ文化關係ハ玆ニ其ノ基調ヲ置クベキモノナルコトヲ嚴粛ニ認メ

兩國ノ各種ノ文化關係ヲ深カラシメ且兩國國民ノ相互的智識及理解ヲ增進セシメ以テ既ニ幸ニ兩國ヲ結合スル友好及相互的信頼ノ關係ヲ益鞏固ナラシメンコトヲ欲シ

左ノ通協定セリ

第一條　締約國ハ其ノ文化關係ヲ堅實ナル基礎ノ上ニ樹立スル爲努力スベク相互ニ右ニ付最モ緊密ナル協力ヲ爲スベシ

第二條　締約國ハ前條ノ目的ヲ達成スル爲學術、美術、音樂、文學、映畫、無線放送、靑少年

運動、運動競技等ノ方面ニ於テ兩國ノ文化關係ヲ組織的ニ增進スベシ

第三條　前條ノ規定ノ實施ニ必要ナル細目ハ締約國ノ權限アル官憲間ニ於テ協議決定セラルベシ

第四條　本協定ハ署名ノ日ヨリ之ヲ實施スベク締約國ノ一方ハ十二月ノ豫告ヲ以テ本協定ヲ廢棄スルコトヲ得

日獨伊三國同盟條約

（昭和十五年九月二十七日ベルリンに於て締結）

大日本帝國政府、獨逸國政府及伊太利國政府ハ萬邦ヲシテ各其ノトコロヲ得シムルヲ以テ恒久平和ノ先決要件ナリト認メタルニ依リ大東亞及ビ歐洲ノ地域ニ於テ各其ノ地域ニ於ケル當該民族ノ共存共榮ノ實ヲ擧グルニ足ルベキ新秩序ヲ建設シ且之ヲ維持センコトヲ根本義ト爲シ各地域ニ於テ此ノ趣旨ニ據レル努力ニ付相互ニ提携シ且協力スルコトニ決意セリ、而シテ三國政府ハ更ニ世界到ル所ニ於テ同樣ノ努力ヲ爲サントスル諸國ニ對シ協力ヲ吝マザルモノニシテ斯クシテ世界平和ニ對スル三國終局ノ抱負ヲ實現センコトヲ欲ス、依テ日本國政府、獨逸國政府及伊太利國政府ハ左ノ通協定セリ

第一條　日本國ハ獨逸國及伊太利國ノ歐洲ニ於ケル新秩序建設ニ關シ指導的地位ヲ認メ且之ヲ尊重ス

第二條　獨逸國及伊太利國ハ日本國ノ大東亞ニ於ケル新秩序建設ニ關シ指導的地位ヲ認メ且之ヲ尊重ス

第三條　日本國、獨逸國及伊太利國ハ前記ノ方針ニ基ク努力ニ付相互ニ協力スベキコトヲ約ス更ニ三締約國中何レカノ一國ガ現ニ歐洲戰爭又ハ日支紛爭ニ參入シ居ラザル一國ニ依テ攻擊セラレタルトキハ三國ハ有ラユル政治的、經濟的及軍事的方法ニ依リ相互ニ援助スベキコトヲ約ス

第四條　本條約實施ノ爲各日本國政府、獨逸國政府及伊太利國政府ニ依リ任命セラルベキ委員ヨリ成ル混合專門委員會ハ遲滯ナク開催セラルベキモノトス

第五條　日本國、獨逸國及伊太利國ハ前記諸條項ガ三締約國ノ各ト「ソヴィエト」聯邦トノ間ニ現存スル政治的狀態ニ何等ノ影響ヲモ及ボサザルモノナルコトヲ確認ス

第六條　本條約ハ署名ト同時ニ實施セラルベク、實施ノ日ヨリ十年間有效トス
右期間滿了前適當ナル時期ニ於テ締約國中ノ一國ノ要求ニ基キ締約國ハ本條約ノ更新ニ關シ協議スベシ

大戰勃發の二週間（現地的視角より觀る）

一　獨ソ不可侵條約の締結

八月二十日（昭和十四年）午後十時、ベルリン放送局のアナウンサーは、突如、獨ソ通商協定の締結を報じた。更に追かけて翌二十一日、同時刻の午後十時に、ドイツ政府はやはりラジオを通じて、獨ソ不可侵條約の交渉成立を公表し、リッベントロップ外相が二十三日モスクワへ乘込む旨を報道した。翌朝の各新聞は第一面全段拔きでこの重大ニュースを報道し、「ドイツ外交の世界的轉回」なりと書き立てた。

まさしく、あらゆる意味において、ヒットラー外交のコペルニクス的轉回である。當然の結果として、種々樣々な流說が亂れ飛んだ。或ひは言ふ、この條約の裏に軍事協定ありと。また或ひは言ふ、獨ソ間にポーランド分割の密約ありと。これはイタリアの吹込んだ入智慧だとうがつた放送をする

者もあれば、一方にはまた、これは英佛兩國の毒藥を盛つたお膳立だと些かうがち過ぎた議論を立てる者も出て來るといふ騷ぎ方。しかし、イタリアがイニシアテイヴを取つたといふ說も結局根據がなく、八月十一日からのザルツブルク會談では「相談したいことがあるから……」といふ電請に應じて出かけて來たチアノ伊外相は、ダンチヒ問題卽時解決と獨ソ不可侵條約との承諾を求められてそれに同意を與へたが、內心穩かならざる心境でローマに歸つた――といふのが在ベルリン外國新聞特派員たちの一般的觀測であつた。ザルツブルク會談は、其の後のイタリアの態度をトする上に極めて重要な素因となるものであるが、今回の獨波紛爭に對するイタリアの態度から推しても、そこに獨伊兩國の間に於ける完全な諒解について疑ひがはさまれてゐたやうであつた。單にイタリアのみに止まらない。ヒットラー總統がその著『わが闘爭』以來十數年叫び續けて來た反共排ソ論を一擲し、防共の聯盟日本やスペインに對して激甚な衝動を與へたことは、ドイツを繞る國際關係の色分けに大きな變化を起したのであつた。このドイツの對ソ接近を、ダンチヒ問題の急迫に押されて、ヒットラー總統が軍部の意見に讓步したものであると觀測するものもあるが、とにかく從來政治が軍略より優位にあつたナチス・ドイツにおいても、ダンチヒ問題のために背に腹は代へられなくて打つたヒットラー外交の離れ業といふべきであらう。そこに現實政治の飛躍がある。

この獨ソ不可侵條約を以つて歐洲の危機去り、ヒットラー總統は再び無血の勝利を贏ちえようと

観測する者もあつたが、ポーランドの殆ど盲目的な抗獨熱はかゝる楽觀的見解を許さないものがあつた。かくしてダンチヒ問題は急轉、大詰の幕に入つたのである。街頭には、無數に並べられた砲彈の寫眞に「われ等の準備既に成れり！」と大きく書拔いた宣傳ビラが到る所貼り出され、主要建築物の屋上には防空監視哨の眼が光り出した。ダンチヒからは、英國總領事以下在留英國人が引揚げを開始したといふニユースがはいる。二十四日午後、ヒットラー總統はベルヒテスガーデンの山莊を下つてベルリンに飛來し、ゲーリング元帥及びこの日モスクワから歸來した「凱旋將軍」リッベントロップ外相と鼎座熟議すること五時間――暗雲は低くウイルヘルム街に立罩めた。

二　ポーランド問題の切迫

二十五日になれば、ドイツは既に三十箇師團を東部國境に動員したといふ噂が傳はり、ベルリンとロンドン、パリ、ワルシヤワとの電信電話は斷絶してしまつた。午後一時半、ヘンダーソン英國大使はヒットラー總統に呼ばれ、心持ち蒼白な顏をして愴惶と總統官邸の中へ消えて行つた。いよいよ最後の外交的折衝が試みられるのだと想像された。翌二十六日早朝、ヘンダーソン大使は空路ロンドンへ歸つた。風說によれば、ヒットラー總統はこの日拂曉を期して全軍ポーランドへ進擊すべく命令を出してゐたが、イタリアの態度が煮え切らないで動員狀況が捗々しくなく且つスペインの

向背も怪しくなつて來たので、遂に出動命令を取消すの已むなきに至つたのだといふ。國際電話が再び開通したので同盟ローマ支局を呼出すと、ローマは極めて冷靜であるとの返事であつた。この日には國會を召集して總統が國民激勵の演説をするほか、陸軍總司令フォン・ブラウヒッチュ元帥も亦國防軍に對する演説を試みる豫定であつたのが突然中止されたところから見て、ドイツも態度を幾分緩和して樽俎折衝を續ける雅量を示すに至つたことが觀取された。けれども、ドイツ軍の動員は些かの手も緩めずに續行され、既に五十歳までの豫備兵が召集され、動員兵總數四百萬人と號した。比較的應召兵の尠いベルリン市においてすら、この日午前中郵便局の全機能を擧げて召集令狀の發送に努めたにも拘らず、前後四時間を費したといふのを見ても、その大規模な動員狀況が推察される。動員は主として夜間行はれ、夜、街を通れば、半分軍服半分私服といふいでたちで大きなトランクを提げた應召兵が四十人、五十人と一團になつて行進してゐるのに出會ふ。皆、顏を蒼白く緊張させて默々と歩を運んでゐる。中には一人一人横におかみさんが隨いて歩いてゐる。胸のつまる光景である。この日から飛行機は高度五百米以下を飛ぶやうになつたので、轟々たる爆音は朝から夜中まで私たちの頭上に響き、神經を苛立たせること夥しい。二十七日になると舞臺はロンドンに移つて、ヒットラー案の審議がダウニング街十番で日に夜をついで行はれ、ベルリンでは期待と不安の交錯した氣持の中に時の歩みが刻まれて行く。宣傳通信の實權は本日から宣傳省の手を離

議員を總統官邸に集めて交渉を報告し、國民の緊張と奮起を促す演説を行つたが、非常に昂奮した態度であつたと云はれる。

二十七日は、全く暗中模索の日であつた。それだけに又、私はヒットラー總統提案の內容を窺知したいと思ひ、あらゆる方面にアンテナを張つて情報蒐集に努めた。ヒットラー總統が、ヘンダーソン大使に對して斷乎たる要求を突きつけたと主張するドイツ新聞記者もあつたけれども、私は寧ろ、總統はあくまで平和的妥結の希望を棄てず、かなり妥協的な提案をしたといふUP特派員キッド君の觀測に與みした。

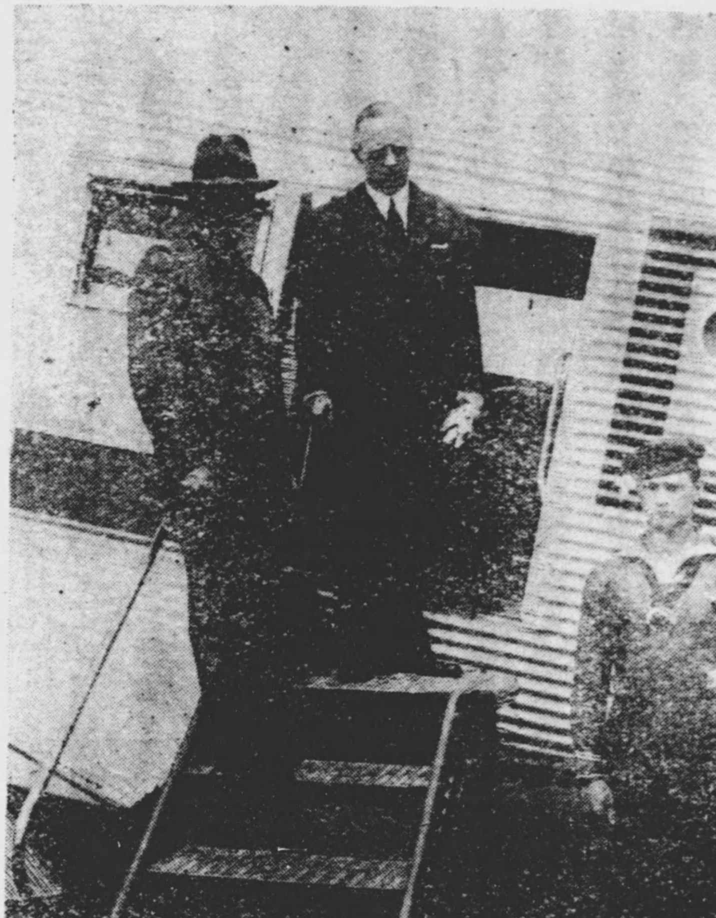
けれども軈て、この謎の糸も次第にほぐれて來るのであつた。先づ二十七日の深更、DNB通信社からの直接電話の受話器を取つた私の耳に、ヒットラー、ダラディエ間往復書簡の內容が傳へられた。なるほどヒットラー總統の辭句は强硬ではあるけれども、私はその言葉の裏に切々たる戰爭回避冀念の聲を聽いた。更にこのことを裏書したのは、翌二十八日夕刻の外務省新聞記者共同會見であつた。この席上シュミット情報部長は、ダンチヒ問題に對するドイツ側の希望並びに要求を開陳したが、それによると、ドイツ政府は一九一八年十一月五日のランシング對獨覺書を對波要求の基礎にするといふのである。即ち、これを註釋的に書けば次のやうになる。

（一）ドイツの稱する「廻廊」とはネッツエ河、ブロンベルグ市以上の地域であつて、ポーゼン地方は含まない。
（二）ドイツは上部シレジア地方に對してはその返還を要求せず、單に在住ドイツ人壓迫の殘虐行爲の停止を要求するに止める。
（三）ポーランドには他の海口を與へる。
（四）以上の要求が滿足されゝば、ドイツは此の際、歐洲全般に關係する問題（舊獨領植民地返還問題を含むか？）を提起することを斷念する。

この（一）を見て誰でも氣が付くやうに、ドイツが「廻廊」と稱したのは、ポーゼン等を含む一九一八年以前の舊獨領全部であつた。それがいつの間にか半分以下に縮小されてゐる。まさに、大きな讓步である。けれども、このドイツの讓步は必ずしも平和的解決を樂觀させる材料とはならなかつた。といふのは、珍しくもこゝまで讓步したドイツの提案をもしも英國が蹴るやうなことがあれば、それこそ面子問題も絡つて來て、否應なしに戰爭にまで行きつく危險性を包藏してゐることである。タイムス其の他英佛の新聞が輸入禁止なのでロンドンやパリのほんたうの空氣を知ることは困難であつたけれども、風の便りに傳はる情報では、英國政府は今度こそ斷乎たる決心を固めて居り、フランス政府またこれに追隨するだらうとのことであつた。そして、このニュースは戰爭回

避の希望を益々稀薄ならしめるに過ぎなかつた。

二十八日午後八時半ヘンダーソン大使がテンペルホーフ飛行場到着、同十時半總統官邸においてヒットラー總統に英國政府の回答を手交した。それはポーランド政府の同意を得て、獨波兩國政府の直接交渉を勸告したものである。この内容



リッベントロップ外相

さへ判つたならば、私たち新聞記者は其の後の情勢判斷にどれだけ助かつたかも知れないが、この回答内容は三十一日午後九時までも誰も知ることができなかつたのである。このために私たちは三日間聾棧敷で、あゝでもないかうでもない――の焦慮に骨身を削らなければならなかつた。私たちだけではない。ドイツ國民全部が何も知ることができずに、戰爭か？　平和か？　の十字街頭を彷徨

してゐたのである。それだけに、流言飛語の跳梁も激しかつた。二十八日にはヒットラー總統に向つて爆彈を投げた者があるといふ所謂「爆彈事件」がどこからともなく傳はり、放送局がニュースの時間にわざ〳〵取消した程であつた。そのほか、國民の戰爭嫌忌感を針小棒大に傳へる反戰デマ、反ナチス祕密結社に關する探偵小說的流言等々、まさに百鬼夜行の態であつた。なるほどナチスは、政權を獲得してからまだ六箇年にしかならない。その意味で、ヒットラー總統初めナチス首腦部には、もつと國內の地盤を固めてから外へ向ひたい氣持はあらう。しかし、巷間流說のいふやうに戰爭が始まれば數箇月でその基礎が搖ぐだらうなどとは、私は斷じて思はない。いかにも反ナチス分子がまだ殘つてゐることは事實である。だが、それ等は現實政治的には全く無力な不平インテリ分子に過ぎない。現實にドイツの國力を構成する勤勞者層、青年層は熱烈なナチス支持者である。またドイツ國民が戰爭を嫌忌してゐることも事實である。しかし、これは九月十日のフランクフルター・ツアイツンク紙社說が書いてゐる通り、いざ戰爭となれば國民的緊張と敵愾心が昂揚して、反戰熱は影を薄くして行くのである。英佛等の諸國と比較せず、單にドイツ國民の反戰熱を誇大に考へることは正當な觀察ではないと信ずる。

三　ヒットラー總統の決意と動員

二十八日も依然として暗中模索だ。事務所にゐても面白いニュースがはいつて來ないのでウイルヘルム廣場へ行つてみても、たゞ總統邸の屋上高く總統旗が飜つてゐることによつて、ヒットラー總統が依然官邸を一歩も出でず祕策を練つてゐることを知るのみで、何の手懸りもない。ヒットラー總統は、自分が戰爭以外の手段でドイツ失地回復を爲し遂げて行くところに絕大な人氣が生じて來てゐることを、誰よりもよく知つてゐる筈である。武力に訴へずに目的を達したいことは山々であらう。けれども、現在の情勢では一步一步と武力解決の結末へ近付いて行つてゐる。ヒットラー總統がこのやうに思ひ切つた態度を取つてゐるのも、彼が英佛起たずとの確信を懷いてゐるからであらう。一度かうと思ひ定めたら、その信念の道を一途に驀進するのがドイツ人の國民性である。ヒットラー總統は最後まで英佛兩國は起たずと信じてゐたし、また兩國を相手としたくなかつたのである。ポーランドに對して軍事行動を開始した九月一日の國會演說に於いても尙、英佛兩國の態度緩和に對する最後の努力を怠らず、英國については「必要とあらば協力さへ希望する」とその眞意を表明したのをみても、いかに英佛兩國を敵に廻したくなかつたかが判る。しかし、英佛は遂に起つた。一九一四年より二十五年後に、歷史は再び繰返されたのである。

二十八日にはチアノ伊外相の訪獨說が某方面から傳へられて私たちを緊張させたが、二十九日になると更に、ムッソリーニ首相が調停に出馬するらしいといふ情報がはいつて來た。ヒットラー總統とムッソリーニ首相とが電話で數回密議を凝らしたとも云はれた。ムッソリーニ出馬說は多分に可能性の多い豫想であるが、この說も結局、桟敷でしびれを切らして誰か千兩役者はお目見得しないかといふ大向ふの懸聲に終つてしまつた。しかし、軍事同盟締結國なるにも拘らず非常に冷靜であるイタリアの態度は、先般のザルツブルク會談の內幕を思ひ合せてみると、なか〳〵に含蓄の深いものがある。

さて二十九日午後七時十五分、ドイツ政府はヘンダーソン大使に英國政府に對する囘答を手交した。この內容も亦、三十一日午後九時のラジオによつて判つたのであるが、それは英國政府の提議を受諾し、三十日中にポーランド政府から全權交涉使が派遣されて來るのを待つ旨の聲明であつた。大喜利の一幕が遂に來たのだ。ドイツの動員は益々擴大されて行く一方であつた。私の知人も續々召集された。皆トランク一箇を提げ、寂しい微笑を殘して默々と兵營への步を運んで行つた。日本のやうな歡送風景の見られないドイツでは、營門內に消えて行く應召兵の後姿が、殊更印象に殘る。

明けて三十日になるとドイツの動員態勢はいよ〳〵強化され、總數四百五十萬乃至五百萬と號された。特科部隊によつては六十歲の應召者まで出してゐる。國防の最高審議機關としては、總統令

を以つて「國防閣僚會議」が設置され、ゲーリング元帥がその議長に任命された。この機關はゲーリング、ヘス等穩和派のみで占めて居り、リッベントロップ、ゲッベルス等の强硬派が加はつてゐないので、一時はいろ〳〵臆說が流布された。この日の午後ポーランドが總動員を發令し、廻廊を封鎖したとの情報がベルリンにはいり、ドイツ側の神經を痛く刺戟した。外務省の新聞記者共同會見に於いても、代辯者(スポークスマン)は遺憾の意を表明し、いかなる事態が發生するかも測り知れぬと附け加へた。ポーランド政府の全權交涉使は遂に姿を見せず、深更十二時ヘンダーソン大使は總統官邸において、リッベントロップ外相に英國政府の回答を手交したが、何等急迫せる事態を緩和し明朗化する性質のものではなかつた。

三十一日午前中もポーランドから何の音沙汰もなく、漸く午後になつてリプスキー波大使がリッベントロップ外相を訪問し、ポーランド政府は獨波直接交涉に關する英國政府の提議を好意を以つて考慮する旨、口頭を以つて告げた。そこでリッベントロップ外相は、リプスキー大使が同外相とドイツの要求提案について審議交涉する權限ありやと質したのに對し、同大使はかゝる權限なしと答へ、更にリッベントロップ外相が、それでは問題の具體的討議に當る資格ありやと質したのに對し、同大使はこれまた否と答へたのであつた。これで、望の綱は完全に截ち切られたのである。ヒットラー總統も遂に、最後の肚をきめるに至つた。ドイツ政府は午後九時、突如ラジオを通じて對

ヒットラー總統提案人民投票區域



ヒトラー總統提案の人民投票區域

一九一八年前の獨領

人民投票區域がポーランドに屬した場合ドイツの獲得する治外法權的交通路

人民投票區域がドイツに屬した場合ポーランドの獲得する治外法權的交通路

波要求十六箇條を公表し、ポーランドの全權交渉使を二日間無駄に待つた旨附け加へた。十六箇條のうち主なるものを示せば次の通りである。

一、ダンチヒ自由市の即時返還

一、廻廊の人民投票による歸屬決定

一、人民投票有資格者は一九一八年當時の居住者とす。投票監視のため英佛伊ソ聯四箇國の國際委員會を設置する

一、人民投票準備期間を一箇年とする

一、グディニア港はポーランド領とする

一、廻廊が人民投票の結果ポーランド領と決定した場合は、ドイツは廻廊を通じ治外法權的交通路を獲得し、またドイツ領と決定の場合は、ポーランドはグディニア港に通ずる治外法權的交通路を獲得する

一、廻廊がドイツに歸屬した場合には、ドイツはポーランドと適當なる範圍において住民交換を行ふ用意を有する

更に追かけて深更、政府は再びラジオを以つて

「本夕刻、ポーランド便衣隊は、上シレジア國境都市グライヴィッツに侵入、放送局の占據を企

圖したが、ドイツ警官隊に撃退され、目下交戰中である。ポーランド便衣隊は、ポーランド正規兵の後援部隊を有すること明かで、ポーランド軍ドイツ侵入の前哨戰とも見られる」と發表し、ドイツ國民の敵愾心を煽り、ドイツの軍事行動が全く自衞反擊であることの事前宣傳工作に努めた。

四 東部戰線への進軍

いよ〳〵明けて九月一日早曉五時四十五分、ドイツ軍はヒットラー總統の命令により、全東部戰線に亙つて進擊を開始、こゝに歐洲戰爭の火蓋は切られたのである。

ヒットラー總統は午前十時大ドイツ國會を召集、遂に干戈に訴へるの已むなきに至つたことを宣言して國民の奮起を促したが、その辭句、態度共に悲壯を極めた。總統は「余は今や再び、余に取つて最も神聖且つ高貴なる軍服をまとふに至つた。余はこれを、勝利の後にあらずんば脫がないであらう。然らずんばたゞ死あるのみ！」と叫び、「余にしてこの戰ひに殪れんか、第一の後繼者は僚友ゲーリングである。ゲーリングにして殪れんか、その後繼者は僚友ヘスである」と自ら前線に赴いて全軍を指揮する決心を示した。更にこの國會の席上、ダンチヒ自由市のドイツ復歸に關するナチス黨ダンチヒ支部長フォルスター氏の宣言が發表された。

今度の戰爭において終始不思議な程冷靜を保つて來たドイツ國民も、さすがにこの日は少し興奮してゐるかに見えた。總統官邸前のウイルヘルム廣場には數千の群衆が集つて、ヒットラー總統を一目でも見んものと犇き合つてゐる。その群衆の最前列にはヒットラー・ユーゲントなどの青年が居並び、一齊に「總統よ、バルコニーへ!」と繰返し繰返し叫んで熱狂してゐるのにひきかへ、うしろの方には老人連が集り、まだ腦裏に殘る世界大戰の慘苦を思ひ出してか、沈痛な顏に涙を浮べてゐる者さへあつた。面白いコントラストだ。市街の要所要所には高射砲高角砲が据ゑ付けられ、警戒の眼が鋭く光る。私が自動車に乘つて市中の景況を見る傍ら撮影して廻つてゐると、ウンター・デン・リンデンの近くで、いきなりゲシュタッポ(祕密警察)の自動車に追跡されて停車を命ぜられた。私は新聞記者の證明書を見せて百方辯明した擧句漸く釋放されたが、これを見てもいかにドイツ人の神經が尖つてゐるかが判つた。この日の夜から嚴重な燈火管制が實施されて、ベルリン全市が全くの暗黑と化してしまつた。更に外國ラジオ聽取禁止令が發布され、外國ラジオのニュースを撒布した者は死刑を以つて罰せられることになつた。

なほこの日の夕刻、ヘンダーソン英大使及びクーロンドル佛大使は相携へてリッベントロップ外相を訪問し、同内容の通牒を手交した。その内容は、ドイツ軍のポーランド領よりの撤退を要求し、もしこの要求が容れられなければ、兩國は直ちにポーランドに對する條約上の義務を果さなければ

ならない――といふのであつた。けれども、ドイツはこの抗議を默殺して進擊に進擊を續け、翌二日には早くも廻廊のグラウデンツ附近で東西兩部の連絡が成つてしまつた。また二日午後にはソ聯軍事使節が新任大使と共に來伯し、ドイツの戰線突破工作は益々强化擴大されて行つた。一方平和戰線側でも、英國は一日既に總動員令を發し、フランスは一日遲れて二日總動員體制にはいつた。事態かくなつた以上、道は一路戰爭に至るだけである。最後の切札としてムッソリーニ伊首相が二日、交戰各國に對して休戰並びに五箇國平和會議を提議したが、遂に失敗に終つたのも已むを得ない。

三日午前九時、ヘンダーソン英大使はドイツ外務省に出頭して、二時間期限付の最後通牒を提出した。同十一時半頃、私は或る早耳筋からの電話で、十一時十五分チエンバレン英首相がラジオを通じて國民に「英國はドイツと戰時狀態に入つた」旨宣したといふ情報を受取つた。英國が起つた以上、フランスも同一動作を執るに違ひない。歐洲を、否世界を流血の慘から救はうといふあらゆる戰爭回避工作は畫餠に歸して、マルス神の掲げる楯のみ九月の秋の陽に煌々と輝いてゐるのを見るのだ。私はこの世界史的瞬間におけるベルリンの景況を探らうと思つて、自動車で市内を乘廻した。市中はいつものやうに靜かである。市民の話し合つてゐる話題の中心はポーランドの戰局だ。一般のドイツ人は、まだ何にも知らないのであつた。（昭和一四・九・一六）

戰時ドイツ宣傳戰批判

一　現代宣傳戰の相貌

開戰の當初、英軍飛行機がドイツ上空へ飛んで來たと思つたら、豈圖らんや、爆彈の代りに反戰ビラをバラ撒いて行つた。西部戰線でも、鉛の彈丸の代りに「紙の彈丸」——宣傳ビラが飛び交つてゐる。こゝに、今次大戰の特徴がある。前回の世界大戰で、武力の大量行使は報復に次ぐに報復を以てする結果を惹き起すに過ぎないといふことを、身に染みて體驗した歐洲各國は、今度は自重してなかく武力のイニシアティヴを取らうとしない。武力以外の手段で敵を屈服させる爲めに全智嚢を絞つてゐる。即ち、敵の後方攪亂、第三國引入れ等の宣傳、外交工作に憂身を窶してゐるのだ。こゝに於いて、宣傳、思想戰といふ魔像が大きくクローズ・アップされる。言はば「武器なき戰ひ」乃至「姿なき戰ひ」と呼べるであらう。殊に、ヒットラー政權打倒を以つて戰爭窮極の目的と

呼號する英國に取つては、宣傳戰に依る後方攪亂こそ、戰略第一號に來るものでなければならぬ。ドイツ國民をしてナチス政權から離反せしめて、ドイツの自己崩潰を待たうといふのが、英佛側の肚であり、作戰である。宣傳力に依つて人氣を盛り上げ、政權を獲得したナチ黨は、また外部からの宣傳工作に依つて壞滅させ得ると信じてゐるのであらう。一方ナチ政權としては、英佛のこの手をマヂノ線以上に恐れる。宣傳の威力を知り過ぎる程知り拔いてゐるナチ黨が、敵方の宣傳に拮抗し、これを擊破するために全力を傾注することは、從つてまた當然のことである。蛇の道はへびが知つてゐる。

ドイツは第一次世界大戰に於いて、戰鬪では勝つたが、肝心の宣傳戰に負けて遂に一敗地に塗れたといふ餘りにも苦い經驗を持つてゐる。英國宣傳の機密室、諜報機關には新聞王ノースクリッフ氏以下錚々たる專門家が居並んで、其の力まさに百萬のドイツ軍に優ると言はれ、さすが剛愎なカイゼルをして「余は戰鬪に於いて敗れたのではない、ドイツが一つのタイムスを有しなかつたからだ」との嘆聲を發せしめた。この惱みが骨髓に徹してゐるドイツは、今回こそはこの轍を踏むまいとして、世界大戰に於ける對敵宣傳戰の敗因を分析研究し、萬全の對策樹立に腐心してゐる。一九一四年の過誤を繰返さないこと――これこそ、現在ヒットラー總統初めドイツ指導者たちが口を開けば必ず言ひ、且つ小心翼々として努めてゐるところのものである。殊に當の相手は、ヒットラー



ドイツ新聞長官ディートリッヒ氏

總統でさへその著『わが闘爭』の中で「宣傳の天才」と感嘆した英國でその老猾なること端倪すべからざるものがあると來ては、ドイツたるもの、神經質にならざるを得まい。斯くして、宣傳謀略が死活的重要性をもつて登場する。

一體、戰時の宣傳なるものは

（一）先づ自國民に正義と勝利の信念を植ゑつけ

（二）敵國に對する敵愾心を煽り

（三）　また第三國の輿論を自國に有利なやうに誘ふやうにし

（四）　更に敵國內の民心を攪亂してその內部崩潰を起させる

ことを以て第一義とする。このうちで（一）と（二）は對內宣傳であり、（三）と（四）とは對外宣傳に屬する。けれども、木を割るやうにヘツキリと分類できないこと勿論である。殊に輓近の歐洲情勢のやうに複雜怪奇な樣相を呈して來ると宣傳戰の相貌も從つて多樣性を呈して來る。例を引かうか。ドイツは今般ソヴィエトと聯携して、政治的には相當ものを言はせてゐるが、思想的には全く痛し痒しの態である。政治的に結べば思想的にも赤色勢力が侵入して來ることは、フランスの先例にもある通り當然の成行である。これは、ドイツに取つて大いに困る。そこで、私が消息通から仄聞したところに依ると、ドイツ政府は今回言論機關に對して、對外的には親ソ的ヂェスチュアも良いが、對內的には露骨な親ソ論まかりならぬ——といふ嚴重な訓令を發したといふ。そして、ドイツのアンチコミンテルン組織の反共宣傳活動も、最近國家祕密警察（ゲシユタツポ）援助の下に俄然活潑さを加へて來たやうである。「一日の懈怠も許されない」と當局の一人が私に語つた。宣傳機密室の內幕は、覗けば底なし井戸のやうに深い。

二　ドイツを繞る國際宣傳戰（一）

何と言つても華やかなのは、交戰各國の對外宣傳戰である。國際的舞臺に於ける宣傳戰である。殊に今回の歐洲大戰では前哨戰として、いな基本的作戰として宣傳戰が前面に押し出されてゐる結果、各國が虛々實々の祕術を盡して戰ふ有樣は、まことに小說以上に興味を唆るものがある。その好適例は、例のアセニア號爆沈事件である。英佛兩國が參戰した九月三日、英國商船アセニア號が英國近海で突如沈沒したが、英國は間髮を容れず、これはドイツ潛水艦の無警告擊沈なりと宣傳に努め、就中米國方面に對して最も熱心な放送を行つた。ドイツも遲ればせながらその翌日否定の聲明を發して、アセニア號は英國潛水艦に爆沈されたのであると反噬し、これは全くチャーチル英海相の祕密指令に依るものだと英國政府の罪を鳴らした。それからは双方とも執拗に一上一下、賣り言葉に買ひ言葉、激しい鎬ぜりあひを繰返して倦むところがなかつた。露と尾花の啻ひ合ひである。何しろ前回の世界大戰でルシタニア號無警告擊沈が、米國參戰のきつかけとなつた先例があるだけに、英國はこの絕好のチャンスを捉へて米國引入れを策せんとし、一方ドイツは前車の轍を踏んではかなはんと、血相變へて寃罪主張に大童である。今ドイツ新聞の筆陣は、殆どチャーチル海相攻擊に集中されたかの感がある。このゲッベルス演出全ドイツ新聞出演の探偵劇「アセニア號事件」は、チャーチル海相一人を赤づらにして幕が進んでゐる。しかるに事件後一箇月半以上經つた十月二十一日、ドイツ新聞は一齊にトップ全段拔きで、米國國務省發表のアセニア號事件白書と稱する

ものを掲載した。ドイツ側が鬼の首でも取つたやうに狂喜したこの白書は、グスタフ・アンダーソンといふ米國人のアセニア號乘客が證言したもので、アセニア號はチャーチル英海相の策謀に依つて自爆した上、その證據湮滅の爲め、更に英國驅逐艦三隻に依つて砲火擊沈されたものであるといふ驚くべき事實を暴露してゐるのである。まさに、事實は小說よりも奇なりだ。しかも、この證人アンダーソンなる者が絕對に信用の置ける人間であるといふ前書を付けることを、ドイツ新聞は忘れてゐなかつた。私は現在ベルリンに於いて、このやうなニユースを唯ドイツ新聞から得るほかに途が無いのであるから、充分な確信をもつて言ひ切ることはできないけれども、私が蒐集し得た限りの材料に依つて第三國の新聞記者として判斷するところでは、アセニア號爆沈はどうも英國の打つた大芝居としか思はれない。しかし、犯人がどちら側であらうと、この事件を素早く對策宣傳に利用して積極的攻勢に出た英國の宣傳振りは、いつもながら水際立つた切れ味で、先づ緒戰に於いては英國が勝利を制したと言ひ得るであらう。

このアセニア號事件に限らず、ドイツの宣傳方法は一體に受身であり、消極的である。しよつぱなから被告の態度である。寧ろいぢらしい位だ。無理もない。前回の世界大戰に於いて、ドイツはそのいはゆる「非人道的行爲」を全世界に誇大宣傳され、世界的憎惡の的となつた苦い經驗を嘗めてゐる。この煮湯を呑まされた體驗は、必然的にドイツをして「非人道的行爲」に對して神經過敏

ならしめる、小心翼々たらしめる、ひたすら「否定」のみへと走らせる。積極的に自己の立場を主張することよりも、英國側の種々樣々な逆宣傳を否定し反擊することに忙殺されるやうになる。宣傳省の新聞記者共同會見なぞ殆ど「ナイン」(否)の連續でお開きになることが多いが、各新聞は每週「戰時流言飛語集」を掲載し、一々番號を打つて英佛側のデマ・ニュースを報道する。無味乾燥なドイツ新聞の紙面では、この欄が小說を讀むやうに面白く、現下宣傳戰を彩る一つの御愛嬌である。

ドイツでは現在、新聞でもラジオでも、英國情報省を「噓吐き省」と呼び、マクミラン情報相やチャーチル海相を「噓吐き大臣」としか言はない。ラジオでアナウンサーが聲高らかに「英國噓吐き省は本日聲明を發し……」といふ風にニュースを讀み上げるのは餘り柄のいい圖ではないが、しかし、英佛側の逆宣傳は奇想天外、天馬空を行くの概があり、ドイツ人が「噓吐き省」と言つてくやしがるのも無理はない。例へば、九月十八日英佛系の通信社は一齊に「プラハ、ピルゼン、ブリユン等の各都市に革命的暴動勃發、舊チェコ領内各地に波及!」といふニュースを飛ばし、更に追ツかけて二十四日「英佛側の爆擊機大編隊がフリードリヒスハーフェンを前後二時間に亙つて猛爆し、ツェッペリン飛行船製作所の一部は遂に作業不能に陷つた」といふ報道を全世界に向つてバラ撒いた。フリードリヒスハーフェン空爆が眞赤な噓であることは、私のよく知つてゐる外人記者の實地調査に依つて立證されたが、日本の新聞が大々的に掲載し、各新聞とも專門家の談話まで取

つて書立ててゐるところを見ると、今更ながら英佛側宣傳の威力に驚嘆せざるを得ない。

「舊チエコ領内暴動事件」の方は、私自身がその根も葉も無いことを實地に知ることができた。九月二十二日の夜ドイツ宣傳省から突然電話が掛つて來て、明早朝プラハへ案内したいからその用意をしてくれ――と言ふ。朝早くアンハルター驛へ行つてみると、AP、UP等々外國新聞特派員が集つてゐる。中立國記者團に實地檢分をさせようといふ譯なのだ。プラハではハーハ大統領初め獨チエコ双方の要路者に會つて實狀を聽き、且つ「市街戰が行はれた」といふ保護國内各都市を巡歴したが、何處も極めて平穩、寧ろ呆氣ない位であつた。舊チエコ領を覆つてゐる現在の空氣は「諦め」であるやうに觀ぜられた。兎に角ロイターやアヴアスも飛んだ迷惑を人に掛けるものである。

デマ宣傳といへば、例のニッカーボッカー氏（インターニユース・サーヴイス社歐洲總局長）のニユース創作など、まさしく名匠の俤がある。九月中旬のこと、ニッカーボッカー氏は「ゲーリング、ヘス、リッベントロップ、ゲッベルス、ヒンムラー等ナチスの首腦がドイツの敗戰を見越して、外國の銀行に他人名儀で莫大な金額を預金した」といふニユースを發表した。これは敢へてニッカーボッカー氏に限らず、英佛側ニユースの實に巧妙な技術であり、奥儀であるが、そのデマ・ニユースの中に、眞實に近い、いかにも尤もらしいポイントを若干織りまぜて、人をなるほどと納得させる手を使ふのである。しかも、大雜把な内容でなく、事こまかい數字などを丹念に並べて、



戦場へ！　戦場へ！　進軍はすれど

右はポーランド兵　左はチエンバレン首相

（ドイツ・アングリフ紙から）

人に「あんな詳細なニュースなら、まさか、でたらめではあるまい」といふ感じを起させるのである。今度のニュースに於いても、ニ

ッカーボッカー氏は次のやうな手法を用ひてゐる。

（一）ヒットラー總統だけは預金しないこととし、總統だけはかね〲金錢に淡泊であるといふ眞實――世間の常識――に結び付いてゐる。

（二）預金の金額等に關して細かい數字を擧げ、いかにも綿密な調査をしたやうな感じを與へてゐる。

このやうに巧緻な藝術品だけに、その傳播力と影響力は素晴しいものだつたらしい。これにはドイツ政府もホト〲弱つて、ゲッベルス宣傳相は九月二十一日夜われ〲外人記者團を招き、その事實無根なることを言明した。唯このニユースには、惜しくも一つの穴があつた。ゲッベルス宣傳相が他人名儀で日本銀行に預金してゐるといふポイントだ。日本銀行は個人の預金を受付けないといふことに氣付かなかつたのは、慥かにニッカーボッカー氏千慮の一失であつた。

三　ドイツを繞る國際宣傳戰（二）

さて、現在氣の毒なのはゲッベルス宣傳相である。戰時ドイツの宣傳戰總帥として、世界輿論の眞唯中で奮闘すべき筈の彼も、ドイツ外交政策大轉回後は内外から兎角の風評を立てられ、暫くは餘り表面にも立たず鳴りを鎭めてゐた。先頃私が某ナチ黨有力者に「このやうな時局に、宣傳相が

少しおとなし過ぎるではないか」と言つてやつたら、彼は「宣傳相が表面にでしやばらないでゐる時こそ、最も實質的な仕事をしてゐる時なのだ」と辯解したが、それにしても、ドイツの死活が宣傳戰の成績如何に懸ること極めて大きい現在、宣傳の總元締が言はゞ猿をきめこんでゐることは、いかにも物足りない感じを起させる。ところが去る十月二十三日夜、彼は突如ラジオを通じてチャーチル英海相糾彈の演說を行つた。

「前回の世界大戰に於いては、チャーチル氏の獨り舞臺であつたからこそ、あれだけの宣傳効果を擧げることができたのである。今度は事情が違ふ。チャーチル氏の相手として、私がこゝに立つてゐる！」と大見得を切り、「チャーチル氏、サアロを開かれよ！　サア白狀せられよ！」と疊みかけて詰寄つた時は、さすがに彼獨特の凄味に妖氣さへ漂ひ、嘗てナチ黨の闘爭時代に舌戰また舌戰、遂に首都ベルリンを我が手に收めた當時の武者振りを偲ばせた。

けれども目下、事實上ドイツ宣傳陣の總元締として宣傳戰線に三軍を叱咤してゐるのは、實にディートリッヒ新聞長官である。今年四十二歲の働き盛り、ヒットラー總統の厚い信任を受けて三面六臂の活躍振りを見せてゐる。ヒットラーの在るところ必ずディートリッヒありで、ヒンムラー親衞隊總司令と共に常に總統の側近に居て相談相手となつてゐる。ヒットラー總統の胸中を最もよく知つてゐる一人であらう。それについてこんなエピソードがある。去る十月六日ヒットラー總統がドイツ

國會を召集して和平提唱演説を行つた時のこと——私は正午開會といふのでユックリ構へてゐると、午前十時半頃、宣傳省から同盟支局に電話が掛つて來て、十一時までに議場クロル・オーパーへ來て貰ひたいと言ふ。早速驅けつけてみると、ディートリッヒ長官が我々外國記者團に總統演説の梗概を豫め説明するといふのである。彼は激烈な調子で演説を始めた。この日の總統のほんものの演説は、いつもと違つて極めて微温的なものであり、その態度も神妙でおとなしかつたにも拘らず、ディートリッヒ長官の小型演説は手を振り眉を張つての大熱辯で、どちらが眞打だか判らないやうな觀を呈した。いかにも青年ディートリッヒらしい微笑ましい情景である。



焦土ポーランドに立つチエンバレン英首相
「我英國の救援入用の國は他にありませんか」

が、これは、常々ヒットラー總統に接近し、その腹中を隈なく知り拔いてゐる者にして初めて出來ることであつて、代辯者としてこれある哉の感が深い。

この若い新聞長官采配の下に、直接われ〳〵外國記者團と接觸し、對外宣傳媒介の役割を務めてゐるのは、宣傳省外國新聞部及び外務省情報部である。外務省情報部長シュミット氏は年齒僅かに二十八、リッベントロップ外相直參の新銳である。以前リッベントロップ外交事務所にゐたのを引拔かれて外相の祕書となり、更に異數の拔擢で情報部長の重任に坐つたのである。彼はリッベントロップ外相の最も信任する智囊であつて、リッベントロップの意中を知ること、當のリッベントロップ以上だと言ふ人もある位だ。それだけに、新聞記者共同會見の席上に於ける應答振りも極めて自信タップリで、まるで自分が大臣であるかのやうな熱辯を振ふことが屢々ある。リッベントロップ對シュミットの關係は、ヒットラー對ディートリッヒの關係と共に二大名コンビと言ふべく、ドイツの宣傳機構に潤澤な滑油を點ずるものである。スポークスマンたる者まさに斯くありたいと思ふが、けれどもこれは、ドイツのやうに外交の全く一元化された獨裁國家にして初めて可能なことであらう。宣傳省外國新聞部長ベーマー氏は『世界新聞提要』といふ大著もある新聞學の權威、まだ三十代の若手である。

我々ベルリン駐在外國記者の日課は、一日二回、宣傳省と外務省の共同會見に出席してこの兩ス

ポークスマンと質疑應答することである。いつも五十名以上の外人記者が參集してなか〳〵賑やかだ。宣傳省の會見には外務省情報部のスタッフ、外務省の會見には宣傳省外國新聞部のスタッフが同席するので、殆ど似たりよつたりとも言へるが、またそれぞれに特徴があるから面白い。宣傳省の會見は禁煙であり、ちよつと儀禮的の顏合せといふ感じがするが、外務省のそれは紫烟濛々たる中で活潑な討論が行はれ、私たちが實質的な收穫を得て、取材上有益なのはこの時間である。この共同會見で、現在主として話題に上るのは、潛水艦に依る貿易封鎖戰である。この問題には國際公法理論が絡つて來るので、なか〳〵複雜であり、それだけにまた色々な疑點が生じる。各國記者ともそれ〴〵一かどの國際法學者になり濟まして論じ合つて居り、私も國際法の書物を繙いて、大學時代の復習をやつてゐるやうな次第である。ドイツ側でもその「騎士的」な潛水艦戰を證據立てるために、既に數人の潛水艦長を共同會見の席上へ呼んで來て說明に當らせた程だ。

しかし、何と言つても、今回の歐洲大動亂で宣傳戰の中心をなしてゐるものは、戰爭責任論と中立國引込戰である。この兩者は密接な相關關係を有するものであつて、交戰各國は戰爭の責任を敵國に押しつけることに依つて、自國の立場を有利にし、中立國を洞ケ峠から下らせようとしてゐるのである。中でも、前回の世界大戰で戰爭の全責任をなすりつけられて、二十年間「ヴェルサイユの屈辱」に惱み苦んだドイツは、今度こそ綺麗な顏をしたいと躍起になつて英佛彈劾に努めてゐる。



ゲッベルス宣傳相

九月九日のゲーリング元帥演說、同十九日のヒットラー總統ダンチヒ演說、十月六日の國會演說、同二十四日のリッベントロップ外相ダンチヒ演說等々、皆然りである。去る八月三十一日の深更、ドイツ政府がラジオを通じて、ポーランド便衣隊の獨領グライヴィッツ放送局襲擊を發表し、翌早朝軍事行動を起したのなど、この問題に對する愼重な用意であると言へよう。また獨英佛三國政府は九月初旬相前後して白書を公表したが、これは要するに、開戰の責任が敵國側に存することを、歷史的記述で立證しようと試みたものに他ならない。ドイツと英佛兩國のが異つた事實を主張してゐることはまだ判るが、英佛兩國のが、既に喰ひ違つてゐるのはどうした譯であ

らうか？『第二世界大戰史』を書く後世史家の苦勞の程も察せられる。

ドイツは中立國を味方に引入れよう、引入れない迄もせめて好意的中立に留まらせて置かう――と必死になつてゐるだけに、英佛側の逆宣傳が中立國を攪き亂すことを極度に恐れてゐる。けれどもこの點に於いては、私はどうも英佛側に軍配を擧げねばならぬやうに思ふ。そもそも宣傳は、人間の本能に訴へ、直接感情を煽り立てるのが一番效果的であるのに、ドイツの宣傳方法は、どうも人間の感情に訴へるところが尠い。それは嘗てのドイツ外相ストレーゼマン氏も自ら認めてゐるやうに、ドイツ人程他國人の心理を解することの不得手な者は無いからである。即ち、ドイツ人は他國人の立場になつて物を考へ、その心理に訴へるやうな客觀的宣傳ニユースを作ることが極めて不得意なのである。ドイツの宣傳は一體に理窟が多い。例へば英國を攻擊するにしても「英國人の祖先は海賊だ！」といふやうな標題で紀元何世紀からか說き起す歷史論をやつたり「英國人はインドに對して何を爲したか？」とか「四十年前のボーア戰爭では、英國は二萬六千三百七十人の婦女子を殺戮した！」とか常識的な材料しか使はず、英國宣傳のやうに突飛なトピックを見付けるといふことが尠い。ドイツ宣傳陣に一人のマクミラン、一人のニッカーボッカー無きが我々中立國觀戰武官（？）には物足りない感じを起させる。

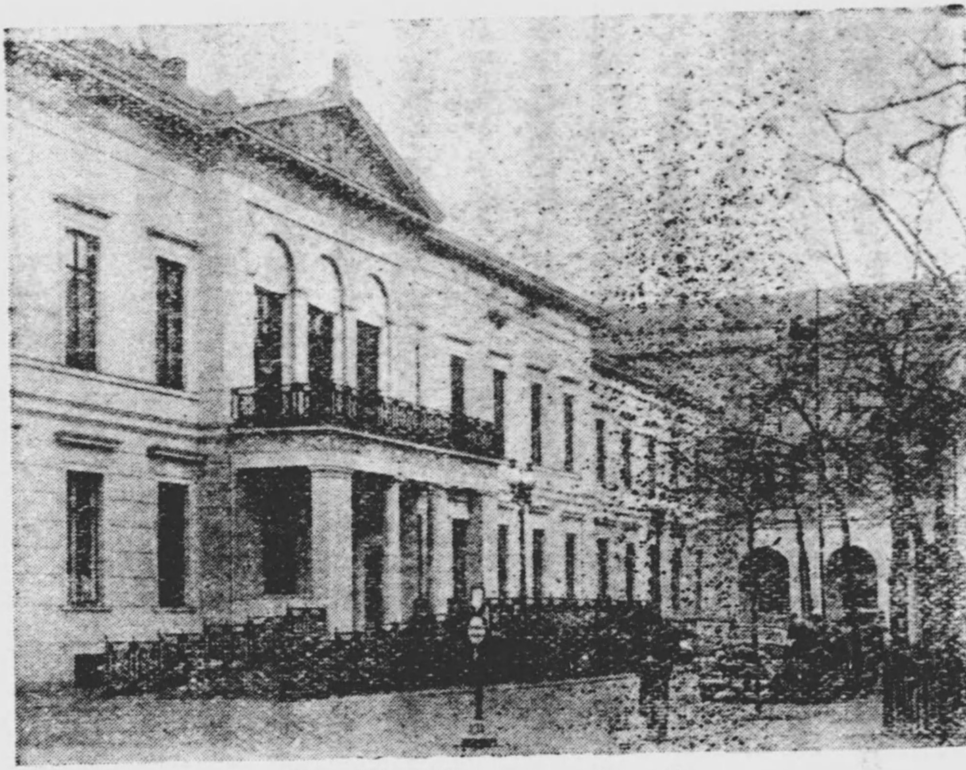
たゞ新聞通信檢閱の點では、ドイツは英佛兩國よりも妥當な態度を取つてゐる。これは第一次世

界大戰の失敗に懲りて、今同は多量のドイツ側ニュースを早く中立國に頒布したいためであらう。英國では英佛語以外の電報を受付けなかつたり、又は著しい制限を課したりしてゐるやうであるが、ドイツでは、新聞電報は日本語のローマ字綴りでも何でもお構ひないのである。檢閲もロンドンでは、日本語擔當がかの『源氏物語』飜譯者アーサー・ウェーリー氏一人であるやうだが、ベルリンでは、日本語のできるドイツ人が多いから、相當のスタッフを擁してゐるらしい。今次大戰勃發前ベルリンから東京まで一時間乃至二時間掛つた新聞電報が、現在檢閲の時間も入れて三時間乃至五時間で屆くやうであるから、私たち新聞記者もさうひどい不便は感じてゐない。またナチ黨機關紙フエルキッシャー・ベオーバハターが十月二十一日紙上の論說に於いて、極めて自由な態度で國際情勢を論じ、中立國の空氣がドイツに不利なことまで隱さずに書いたのは、ドイツ政府の通信報道統制が、今同は餘程オツトリしてゐることを物語るものである。

四　ドイツの國內宣傳

ナチス・ドイツはその國情からして、對外宣傳と同時に、對內宣傳にも大きな努力を差向けなければならない立場にある。獨裁政權はデモクラシー政府と違つて、國內統一の確保に絕えざる注意を拂ふ必要がある。元來ナチ黨は、その組織的な宣傳力を有效に活用して地盤を擴め、國民的人氣

を沸き立たせて遂に政權を獲得したのであるから、國內宣傳にかけては既に試驗濟であり、先づ相當な成績を擧げるものと見なければならない。しかし、今回は單に國內だけの問題ではなく、ソヴィエト聯邦との提携に依つて赤色勢力の浸潤が豫想される上に、英佛等敵方からの猛烈な國內切崩し工作が働きかけて來る。チエンバレン政府も「ヒットラー政權を倒す迄は戈を收めない」と宣言してゐるからには、ナチ政權と民衆との離間工作にあらゆる手段を盡すことであらう。ドイツ政府ではこれに對抗するため、ゲシユタッポの警察力を背景にして國內宣傳に努め、あらゆる機關を動員して國民各層に呼掛けてゐる。ヒットラー總統はその著『わが鬪爭』の中で、ドイツが世界大戰に敗れたのは、ユダヤ的ジャーナリズムの敗戰主義に依る國內自壞工作のせゐであると主張してゐるが、實際、當時のドイツ有力新聞社長は殆ど全部反戰的傾向のユダヤ人であつた。これに反し今日は新聞統制が完全に行はれて居り、新聞社に對する政府の統制力も宣傳省に一元化されてゐる。卽ち、ディートリッヒ新聞長官號令の下に、內國新聞部長フリッチエ氏が睨みを利かせてゐるのだ。政府の發表物は總て半官通信社DNB（デー・エヌ・ベー）を通じて公表するが、各新聞社はそれに註釋を付けることさへ許されてゐないやうである。例へば、「リッベントロップ外相は二十七日モスクワへ赴くこととなつた」とDNBが發表すれば、各新聞ともこれを一語一句違はず掲載し、それが何の目的を有するか、どういふ政治的意義を持つてゐるか――等の註釋は一切加へない。また標題もDNBの付けたもの



ドイツ宣傳省

をそのまゝ踏襲してゐる場合が多い。

従軍記者は、日本のやうに各社競爭で功名を競ふといふやうなことは無く、國防軍總司令部及び宣傳省の嚴重な監督の下に、特定された者だけが、戰況報道に當つてゐる。就中、特に編制された『宣傳中隊(Propaganda-kompanie)』は完全に軍の一部として行動するのであつて、各記者の從軍記を一度全部軍司令部報道班に集め、それを記者の所屬に關係なく、司令部の選擇で各新聞社に割當ててゐる。だから、フェルキッシャー・ベオーバハター紙特派員の手記がロカール・アンツァイガー紙に載るといふやうな、日本では想像もできない制度である譯だ。故に、日本のやうに華々しい

報道戰が演ぜられるといふこともなく、從つて「〇〇少尉軍刀を揮つて敵陣に躍り込み……」といふやうな手に汗を握らせる從軍記も表はれる由がない。第一日本と非常に異る點は、少數の例外を除いては部隊長とか兵士とかの個人名を決して記錄しないことである。唯我々は、某部隊が某地點より某々地點に進出したといふことを知り得るのみである。從つて日本の戰況記事乃至從軍記のやうに、讀者に身近な親しみを感じさせ、生々しい興奮を起させるやうなことの無いのも亦已むを得ない。かのフリッチュ將軍戰死の時の如きも、極めて事務的な筆致で報道され、この偉大なる悲劇の主人公の死を弔ふには餘りにも淋しい取扱ひ方であつた。

さて、ドイツ新聞は去る八月以來、如何なる筆陣を布いて政府の國內宣傳活動を助けて來たか？今、こゝに振り返つて見ることとしよう。先づ七月から八月に掛けて戰雲慌しく動き、英佛兩國の對波保障、英佛ソ會談等々平和戰線の對獨牽制工作が進捗するのを見るや、ドイツ新聞は猛然として「對獨包圍陣」攻擊を吠え出した。ドイツは第一次世界大戰に於いて英佛側の對獨包圍陣の網に追ひつめられ、遂に悲慘な末路を辿らねばならなかつた。この怨み骨髓に徹してゐるドイツ國民は、「對獨包圍陣」といふ言葉に對しては、急速な反應を呈して鬪志を燃え立たせるのである。ゲッベルスはこの機微をよく摑んでゐる。彼は先づ國內宣傳に依つて民心の昂揚を待つ作戰を選んだ。これを第一期とする。次いで八月中旬から下旬に掛けてポーランドの形勢が惡化の一途を辿るや、今度

は河岸を變へて、ポーランド内ドイツ人に對するポーランド人の殘虐行爲の攻擊を開始した。これは國内消費と共に輸出宣傳を兼ねて、最も激烈に、最も執拗に行はれた。殊に、九月いよ〳〵戰爭が勃發すると共に、ドイツ各紙は、虐殺されたドイツ人の悲慘見るに堪へない寫眞を每日每日繰返し掲載し、國民の對波敵愾心を煽り立てた。これを第二期と呼ばう。英佛兩國も遂に戈を執つて起ち、國際低氣壓の中心西へ移るや、宣傳戰は第三期——和平求婚期に入る。ドイツ政府は極力、英佛兩國に對しては敵意の無いことを力說し、西部戰線で戰ふことの無意味なことを强調した。ヒットラー總統、ゲーリング元帥等が代る代る和平の手を英國に對して差し伸べた、和平攻勢だ。けれども、許婚者ポーランドを殺されたばかりの英國は、容易にその求婚の手を握らうとしない。ドイツはこのやうに平和を熱望してゐる、繰返し和平の提言をした、しかるに英國はこれに見向きもしない、英國こそ戰爭の挑發者だ、責任者だ、ドイツは唯その侵略を防ぐため起つたに過ぎない——これが現在、即ち第四期に行はれてゐるドイツの言分である。この宣傳が相當効果を收めてゐるといふことは、大多數のドイツ人が實際このやうに信じ切つて居り、十一月十二日チェンバレン英首相がその下院演說でハツキリとドイツの和平提議を拒絕するまでは、英國さへ悔い改めてくれるならば平和が再び到來する——と信じてゐたドイツ人が尠くないのでも判る。我々第三者に取つてはまさに驚くべき事實だ。

以上は新聞宣傳の戰況であるが、私たちは今次宣傳戰の特異なる相貌としてラジオを見逃してはならない。宣傳當局はこの新鋭武器を最大限度有效に活用すべく努力してゐる。ドイツ放送局では朝の七時から夜半十二時に至るまで七回に亙つて時事ニユースを速報してゐるが、その用語はドイツ語、ポーランド語、英語、フランス語、イタリア語、ウクライナ語、セルビア語、スロヴアキア語、リトワニア語、ハンガリー語及びルーマニア語の十一箇國語に及んでゐる。しかも重大ニユースのある時は、遠慮なく他の放送を中斷して刻々に速報するし、また、新聞でなく特にラジオを以つて重大ニユースを公表することが尠くない。獨ソ通商協定は八月二十日午後十時、獨ソ不可侵條約は翌二十一日午後十時、何れも先づラジオを以つて發表した。どういふものか、午後十時のニユースの時間に重大ニユースを公表することが多い。故に、私たち新聞記者は毎日單に新聞やDNB配給のニユースを讀むだけでなく、早朝から深更までラジオを聽き逃さないやうに注意してゐなければならない。今までも既に何回ラジオを聽いて直ちに至急報を飛ばしたことがあるか判らない。眼で新聞を讀みながら、耳でラジオを聽いてゐなければならない私たちの仕事は、一日中神經の休まる時がない。

ラジオに依る宣傳戰は、國內戰よりも國際戰に於いて華々しい。英佛側のラジオ宣傳がなか〳〵偉力を發揮するので、ドイツ最高國防會議は九月一日ラジオ聽取禁止令を公布し、外國ラジオに依

るニュースを撒布した者は極刑を以つて處斷することにした。ところが、斯かるドイツ側の防衛措置にも拘らず、十月十日、突如として奇々怪々なる事件が起つた。その日午前九時、ドイツ放送局臨時特別ニュースとして「英佛內閣總辭職、英帝御退位、西部戰線に於いて十日間の休戰成立」といふことが發表された。私などはどうしても信ずることが出來なかつたが、私のよく知つてゐる陸軍參謀本部付高級將校やナチ黨本部の幹部黨員等から電話が掛つて來て、このニュースはあくまで眞實だと頑强に主張する有樣、ジーメンス工場などでは全員集合し、高價なシャンペンを拔いて祝杯を擧げたといふから、これはもう喜劇を通り越してゐる。八千萬のドイツ人に數時間、平和の糠喜びをさせたこの怪放送事件が、如何なる祕密組織に依つて行はれたか、如何なるからくりの下に行はれたか、未だもつて判明しない。この怪事件の直後、犯人が一網打盡檢擧されたといふ噂がパッと立つたが、これもどうやらデマ・ニュースらしい。何れにしても恐しいラジオの魔力ではある。

五　今後の宣傳戰は？

今次歐洲大戰の性格が著しく知性的である結果、宣傳戰略が軍略に先行して進んでゐる感がある。敢へて電擊作戰を執らず、宣傳戰の制覇から有利な戰略的地位を獲得しようと努めてゐる。故に、遠く大西洋の彼方に在つてキャスティング・ヴォートを握つてゐる米國を繞つてヴェルダン的激戰

が展開されるであらう。米國を味方に引入れようとする英佛兩國、米國を中立の姿勢に留め置かうとするドイツ――この兩者の爭覇戰は、ホワイト・ハウスに照準を置いて十字砲火が白熱化しよう。そして、この米國引込戰は、必然的に戰爭責任論を根氣よく蒸返し、執拗な攻防戰を展開することであらう。

更に、今度の西部戰線は、マヂノ、ジークフリード兩要塞線が互ひに鐵壁をなして相對峙してゐるため、自ら戰線が膠着して活潑に動かないであらうから、どうしても双方とも行動圈の廣い貿易封鎖戰に主力を注ぐに違ひない。從つて、海戰法を繞る學術的宣傳戰が火花を散らすであらうし、また、大規模な空襲でも行はれるやうになれば、その慘虐な被害に關するデマ・ニユースの氾濫と、それへの反擊宣傳が豫想される。斯くして戰火は益々擴まり、戰局が多元的複雜性を增して來ると、交戰各國とも背に腹は替へられなくなり、現在はまだ大國の品格を保つてゐる各國も、次第に惡性宣傳に狂奔するやうになるであらう。この時、冷靜に各國の宣傳內容を判斷し、國際情勢に對する正鵠な認識を失はない聰明さが、私たちに強く要求されるのである。私たちは、宣傳、逆宣傳いり亂れて百鬼夜行する現下の國際政局に於いて、常に客觀的な洞察力を働かす用意がなければならぬ。戰雲空に黑きドイツより、遙かにこの言葉を故國の同胞諸君へ捧げたい。(昭和一四・一一・二二)

戰時ドイツの經濟統制（主として消費部面について）

ナチスの戰時經濟統制は、現在主として國民生活の消費部面に於いて現はれてゐるが、その根本觀念は分配の公平である。第一次世界大戰當時、軍需產業資本家が莫大な利潤をあげた一面、中產階級以下の一般國民が塗炭の苦しみを嘗め、遂に悲慘な內部崩壞に導いたことを、常々悲憤慷慨して國民に訴へ宣傳して來たナチスとしては、またいやしくも社會主義を標榜するナチスとしては、この際、分配の不公平による人心の動搖を極力恐れるのである。故に戰時に於ける富の偏在、即ち跋行的な軍需景氣の發生を防止する爲、あらゆる手段を講じてゐる。

實例を一つ示さう、ドイツ國防閣僚會議（最高國防審議機關）が九月四日公布した戰時經濟令の第十八條第三項は次のやうに規定してゐる。

「殘業夜業及び休日勞働には特別手當を支給すべからず」

これは殷賑產業景氣の發生防止には役立つけれども、また一方、勞働時間延長で日に夜を繼いで

身體を酷使してゐる勞働者の間に不滿を釀成する危險がある。國民の人氣の上に立つナチス政權は、輿論に對しては愼重な注意を怠らない。宣傳省自らメガホンを取つて、またはドイツ勤勞戰線を通じて全國の勤勞者に呼び掛け、國民の犧牲的奉仕が要求されねばならぬ理由を淳々と說いてゐる。この戰時經濟令にも次のやうな前文が付いてゐる。

「我が祖國の國境保全の爲めにはドイツ國民各自の最高の犧牲を要す、兵士は武器を執り、生命を捧げて祖國を擁護す、斯かる偉大なる犧牲に對して、銃後の國民各自がその全力全手段を國家國民に捧げ、斯くして秩序ある經濟生活の繼續を保證するは國民各自の義務なること明白なり、從つて國民各自は其の生活及び生計に於て、必要なる制限に耐へざるべからず、依て國防閣僚會議は法律の效力を以て次の如く公布す」

以上のやうな精神の下に發布されただけに、この戰時經濟令はなか〳〵峻嚴で、國民生活必需の原料品或ひは生產品を損傷したり退藏したりした者のうち、罪狀重い者は死刑を以つて處斷されることが規定されてゐる。

ドイツ政府は對波開戰の一箇月以上も前、即ち七月末から自動車ガソリン統制（一日五リットルの割當）を實施してゐたが、危機いよ〳〵切迫した八月二十八日、生活必需品に對する切符購買制を布いて、本格的な戰時經濟體制に入つた。この制度は更に二種類に區分することができる。

（一）購買證書制　これは日用必需品中、肉類及び肉製品、脂肪油類、卵、ミルク及びミルク製品、砂糖、珈琲、紅茶或ひは珈琲代用品、ジャム、莢豆類、米、マカロニー其他の食料品、石炭、石鹼（但し洗濯石鹼に限る、化粧石鹼は二歲以下の幼兒及び病人のほかは絕對に入手できない）等の購買に當つて提示すべき證書であつて、所持人の姓名住所職業等を記入した切符の周圍に刷りこんである品目番號札を、その都度切取つて使用するやうになつてゐる。このうち米は、十月一ぱい位でなくなるといふ噂が專らで、私たちは、そのうちに在留日本人が刺身やすき燒をパンで食べなければならぬやうになるだらうなどと話し合つてゐる。また九月二十五日から方法を變更して、各品目毎に引換券が支給され、且つ數量の制限も一層强化されることとなつた。

（二）購買許可證制　これは、前記購買證書に含まれてゐる品目以外の生活必需品、就中纖維製品及び皮革製品につき、申請に應じて當局から交付される引換券である。この制度の採用と共に、國民に對し、衣服等について所有數の限度が定められた。例へば、洋服三着、オーヴアー一着、ワイシヤツ三枚、靴二足、靴下六足――これが限度である。自己の所有數が公定限度以下なることを當局に證言した場合にのみ、その不足數を補充する意味で購買許可證が交付される。政府は、このやうに購買力が制限されるのは、決して物資不足の爲ではなくて、全購買者に對して長期に亙り分配の公平を確保する爲であると、大童になつて國民說得に努めてゐる。このやうに、開戰前から既に

戰時非常措置を採つてゐるのは、全く前の世界大戰の苦い體驗に懲りてゐるからであつて、また實際、この點では相當の實績を收めることができると思ふ。

これ等の購買許可證などは、ベルリンでいふと區役所などで交付されるのであるが、交付所の前は押すな押すなの盛況である。許可證を首尾よく手に入れるには、先づ半日は潰す覺悟をしなければならない。從つて足が重くなる、私たち新聞記者のやうに特別忙しい者は、先づ諦めるほかに仕方がない。これを見ても、この許可證交付制度は、人を億劫がらせるといふ精神的効果だけでも、購買力制限の爲めには、相當な偉力を發揮してゐると言へるであらう。

戰爭に附隨する最も大きな經濟的危險は、悪性インフレーションと物價騰貴である。ドイツ政府が八月以來相當巨額の紙幣を發行したことは、八月二十三日の流通紙幣總額が補助貨幣も含めて百八億八千九百萬マークであつたのに對し、同三十一日には百三十二億三百萬マークに達したのを見ても判る。これによつて起るインフレーションを防止する爲、政府は九月四日發令の前記戰時經濟令によつて思ひ切つた增稅を斷行し、年收二千四百マーク以上の所得者に對しては、從來の所得稅の五十パーセントを戰時附加稅として徵集することになつた。

公債依存を一定限度に止めて一擧に大增稅を敢行したことは、現下喫緊の國庫需要を充すためとはいへ、兎に角、ドイツ財政當局が悪性インフレ防止に確固たる決心を有することが判る。更に政

府の打つた一手は既に述べた物價騰貴防止の爲めに極めて大きな役割を演じてゐる。けれども、政府がいくら騰貴抑制に躍起となつても、もと〳〵原料が不足では、いつかは騰貴線へ向はざるを得ない。しかも公定價格が釘付けにされてゐる場合、たとひ價格はその儘でも、品質は必然的に下向線を辿る、品質低下の犧牲に於いて物價騰貴を防止するのが、ナチス物價政策の祕密であり、最後の奥の手であるのだ。此の間の微妙な操作と調整をナチス經濟司令部がどこまで破綻を來さずにやつて行くか——そこにナチス物價政策に於ける興味深き課題がある。その解答は、これを時に待たう。（昭和一四・九・二一）

戰時經濟統制の斷面（ドイツ資本家を打診する）

一　重工業者とのインタヴユー

ドルトムント、ボッフム、エッセン、ドゥイスブルク等々の大工業都市が連つてゐるルール地方は、ドイツ重工業の中心である、心臓部である。こゝを打診すれば、全ドイツ重工業界の鼓動を聽くことができると言へよう。

私は、戰時ドイツ重工業界の景況を探るため、ボッフムを中心に數日間、多數の重工業資本家とのインタヴューを行つた。鐵鋼界の大立物フリッツ・テイッセン氏既にスイスに追はれ、最近はまた、鐵鋼王と呼ばれる某氏の身邊にも兎角の噂が立つてゐる時、重工業資本家にとつては、全く「物言へば脣寒し」である。從つて、私も彼等の口から直接獲物を得ようとは、初めから大して期待しなかつた。たゞ、社長室で、或ひはまたレストランで、これ等ドイツ重工業界の首腦と親しく話し

合つてゐるうちに、何かしら言葉の裏に潜んでゐるものを感得することができるのではないか——といふ、言はば極めて輕い氣持でインタヴューを試みたのであつた。

ところが、豫想に反して、彼等はかなり率直に私の質問に答へてくれた、面白かつた。たゞ、その際の約束で、こゝにはたゞ限られた範圍を極く概念的にしか報告できず、且つ、人の名前を一々記載することができないのは、私の深く遺憾とするところである。

二　經濟統制の彈力性

質問の第一項は、

「戰時下ドイツに於いて、現在どれ位經濟統制が强化され、深化されてゐるか？　どの程度の彈力性がなほ與へられてゐるか？」

といふ問題であつた。これに對する解答は極めて面白かつた。皆、口を揃へてかう言ふのである——

「兎角、人はドイツの經濟と言へば、一にも統制、二にも統制で、動きのとれないやうな統制が强行されてをり、企業經營に彈力性が與へられてゐないやうに想像しがちだけれども、それは全く行過ぎた考へ方である。勿論、政府の統制が嚴重なことは事實だ。企業經營の大綱に關しては、先づ政府の指令に從はねばならない。しかし、それ以外は、私たちは全く、企業家としての手腕を自由

に揮つてゐるのだ。私たちは企業の當事者なのだ。この企業を經營して行くのは私たち企業家自身であつて、決して、政府でもなければ、また黨でもない。當局も亦、私たちの企業心に對して正當な理解を持ち、企業家に自由手腕を揮はせることが、その國の生産活動を活潑にし、能率を高め、結局國家の利益を殖す所以だといふことをよく認識してゐる。これこそ、ドイツ重工業躍進の重要原因である。どうか、統制に關して、行過ぎた評價をしないやうにしていたゞきたい。」

この主張は、私が更に「企業經營者は、製品の輸出振向けに關し、政府當局から何等か特別の指圖乃至强制を受けてゐるか?」と質したのに對しても、同樣な內容を以つて繰返されたのである。ボッフム合同鑄鋼會社の某重役など、卓を叩いて「企業經營の獨立性」を强調してゐた。この點、私は無條件に承服することができなかつたので、ベルリンに歸つた後、日本各商社の支店長に意見を叩いてみたところ「彼等の言葉の中にも、かなりの眞實が含まれてゐる。ドイツでは、人々の想像以上に企業經營の彈力性が與へられてゐるやうだ」といふ觀察が支配的であつた。

儲けさすことも儲けさすが、しかし、その利潤を遠慮なく取上げてしまふことにも、ドイツ政府は極めて勇敢である。政府だけではない。黨がまた「獻金」奉加帳を突きつける。これは殊に戰爭以來强度を加へて來たらしい。日本の新聞では、ティッセン氏逃避の原因を、戰爭遂行に關するヒットラー總統との意見の扞格に求めてゐるやうであるが、私の仄聞するところでは、意見の扞格と

もそもの眞因が潜んでゐたといふことである。

しかし、それかといつて、ドイツの資本家たちがこのナチスのやり方に全然不滿であるかといふと、必ずしもさうではないのである。或る大製鐵會社の社長は、共にワインの杯を傾けながら私に語つた――

「私たちは、丁度郵便配達のやうなものですよ。鞄に押しこんだ企業所得を、そつくりそのまゝ政府や黨に屆けるだけの役目です。しかし、兎に角、企業家として相當自由に手腕を揮ひ、一應帳簿尻に利潤が出て、我々の企業心を滿足させることができるのですから、先づ諦めがつきますよ。企業經營そのものを小姑式につゝき廻されてはやり切れませんが、現在のやうなやり方なら、ドイツ民族全體のために奉仕するといふ氣持で、まア我慢して行けるといふものです。」

彼の胸間には、ナチスの黨員章が、電燈の光を受けてキラ〳〵光つてゐた。

實際、ドイツの資本家は、よく忍耐して活動してゐるやうである。日本では、何かといふと直ぐに資本家階級の「時局認識」が問題となるが、こちらでは、既に認識の問題を通り越して、その猶豫なき實踐が要求されてゐるのである。それ程、國家の運命が、なま〳〵しい切迫感を以つて、彼等の頭上にのしかゝつてゐるのである。メッサーシュミット機に最優秀の折紙がつけられゝば、た

だにメッサーシュミット會社のみではなく、ハインケル、ドルニエ、フォッケ・ウルフ等々の各會社が、自己の面子を犠牲にして、メッサーシュミット機の分擔製作に從事する――これなども、超非常時の重壓下に於てのみ可能な實踐であらう。

三　今次大戰に於けるドイツの强味

次に、私が知りたいと思つたことは、彼等の戰爭觀である。今次大戰の見通しである。

彼等は、口を揃へて言ふ――

「我々は勿論、長期戰の覺悟はしてゐる。しかし、是非とも今年中に終らせたい、否、終らせねばならぬ！」

そして、彼等がこれまた異口同音に主張するドイツの强味――第一次世界大戰に比しての强味は、要約すれば次の二つになる。

（一）　食糧・原料品等の統制が、極めて高度な計畫性を持つてゐること。

技術家出身の某氏は言つた――「前回の大戰は食糧切符を以つて終つたけれど、今回の戰爭は、食糧切符を以つて始まつた。これを見ても、政府當局が、今次の戰爭に際して、いかに愼重な計畫を立てて萬全を期してゐるかが判る。勿論、前回の切符制度のやうに、實際に缺乏しての擧句なら

いけないけれども、今回は、食糧・原料品あらゆる方面に相當量の貯藏があることは確實である。だから、今度の切符制度は、ヒットラーの確乎たる決心と準備とを示すものと見て良いであらう。」

（二）ドイツの裏ロが、東南北の三方に亙つて開かれてゐること。

この三方面からの原料物資の輸入こそ、ドイツに活力素を補給し、その國防經濟力を增强するものだ——と彼等は說くのである。就中、世界の大原料國ソヴィエト聯邦から食糧や工業原料品を受けることができるのは、ドイツにとつて非常な好條件であると言ふから、私は次のやうに切りこんでみた——

「しかし、ソヴィエト聯邦は、一體どの程度ドイツに供給する餘力を持つてゐるでせうか？ また、果して初めの約束を確實に履行する誠意があるでせうか？ 更に、たとひソヴィエー聯邦が輸出に廻せるだけの物資を持ち、且つ、これをドイツに供給する誠意を示すとしても、ソヴィエト聯邦は果して、それを充分に履行するだけの輸送能力を持つてゐるものでせうか？」

この私の質問に對して明確な答辯を與へてくれた人は一人もゐなかつた。何れも言葉を濁して、「供給並びに輸送狀態は、逐次改善されつゝあるやうだ」と答へたのみであつたが、私もあまり追及するのは遠慮したのであつた。

たゞ、非常に興味深く感じたのは、彼等の抱懷するソ聯觀である。大抵の人は、ソヴィエト聯邦

に對して、あまり好感を示さなかつた。一體に不安と恐怖心とを懐いてゐるやうに見受けられた。それは、前大戰後に於ける共產黨の跳梁を痛切に體驗しただけに、その時の反感がまだなま〳〵しく胸裡に殘つてゐるためであらう。

四　動員と銃後施設

重工業、殊に軍需工業からの應召率は、概して尠いやうである。例をボッフム一市に取つてみても、百パーセント平和產業と稱するアイクホッフ鐵工所は、約二十パーセントの應召者を出してゐるが、軍需工業のボッフム合同鑄鋼會社（全ドイツ國模範工場、職工約二萬三千）及びボッフム製鐵會社（ウェストファーレン州模範工場）はズット尠く、雙方共僅かに八パーセント內外である。これを、ヒットラー靑年團幹部の應召率九十五パーセントと比較する時、軍需工業がいかに保護されてゐるかが判る。應召勞働者の尠い上に、熟練勞働者の引拔きは法律的に不可能なやうに規制されてゐるから、現在重工業工場では、人的要素に於いては先づ不安なき運營を續けてゐるやうである。

應召勞働者の家族保護も、ドイツ一流の統制と組織力とで行はれてゐる。大體、出征前給料の八十パーセントあれば、家族が困らずに生活して行けるといふ目算を立て、政府が給料の三十パーセ

ントと家賃とを引受ける。そのほかに、子供一人當り二十五マークを支給する。これで平均すると大體原給の六十パーセントといふ數字になるさうである。會社の支給額はおよそ二十パーセント、〆めて八十パーセントになるといふ勘定である。

各會社とも、銃後施設にはそれぐ細心の考慮を拂つてゐるらしく、私は到る處で、種々樣々な資料をお土產に貰つたのであつた。それ等をこゝに一々詳述することは避けるが、要するに、私が資料を通觀して得た印象は、銃後施設が徒らに感傷的なものでなく、あくまでも理想的に、合理的に經營されてゐるといふことである。これは、日本なども大いに參考にして良い點だと思ふ。

五　日本との經濟的協力

さて、最後に私が提起したのは、私たち日本人にとつて最も關心の深い重要問題——「ドイツは現在、日本に對して重工業製品を輸出する餘力を持つてゐるか？」といふ質問であつた。勿論、この問題にとつてはその前提條件が重要であつて、將來、戰爭の武力行爲が積極的に大進展を見せれば、この問題は既に考慮の餘地がなくなるのである。けれども、戰爭が現在のやうな「怠業狀態」を續けてゐる限り、ドイツ重工業は、なほ相當の輸出能力を持つてゐるものと觀るのが妥當な觀察であらう。これは、ドイツの食糧補給及び外貨獲得等の諸問題と睨み合せて考へれば、自ら理解が

行くことである。たゞ、輸送路の問題が最も難關と見られる。これは、私がこの旅行からベルリンに歸つて來て、目下、滯獨中の鮎川義介氏の意見を叩いた時にも、大體同様な觀察をしてをられることを知り得たのである。

ナチ黨と密接な關係にある某有力者は、私に向つて力強く語つた——

「政府當局も、また我々企業當事者も、日本との經濟的協力は熱心に希望してゐるのである。交換條件次第では、自國品の軍需品生産能力を幾分犧牲にしても、日本へ重工業製品を輸出して差支へない位に考へてゐる。たゞ、我々が對日貿易について些か不安を感じるのは、日本の內閣更迭が頻繁で、外交政策が一貫性を缺いてゐるやうに見える點である。英米への依存度が餘りにも强いやうに思はれる點である。この不安さへ除去されたならば、我々は對日貿易のために、相當の犧牲を拂ふに吝かでないつもりだ。現在、ドイツが日本に求めるところは極めて大きい。從つてまた、ドイツも日本に對して、相當なサーヴィスをする用意を持つてゐる。これは、決して私一個の考へではないと信じる。ドイツ産業界の總意と言つて良いと思ふ。どうか、我々のこの見解と希望とを、日本の朝野に傳へていたゞきたい。」（昭和一五、一、一五）

二千のドイツ勤勞者と共に　（歡喜力行團の船に便乘して）

一　一人の外人記者として

ドイツ勞働前線本部新聞局から、歡喜力行團旗船ロベルト・ライ號のノルウェー航海に招待されて行つた一週間の船上生活――その行屆いた厚遇と、温い友情の發露とは、私を寧ろ當惑させる程であつた。歡喜力行團では、豫てからその外國旅行に、外國新聞記者がドイツ勤勞者と同額の費用を拂つて參加する許可を與へて來たが、今回、私には特に最初に參加する日本新聞記者として、全く無料で乗船の便宜をはかり、特別の厚意を示してくれたのである。

六月七日ハンブルク港を出發して、同十三日解散するまで恰度一週間の航海旅行は、私に貴重な體驗を極めて豐富に供給した。日本觀光局の招待に應じて、遲くも來春、歡喜力行團の船が日本を訪れることになつてゐる現在、同團の勤勞者旅行を日本に紹介することは、決して無意義なことで

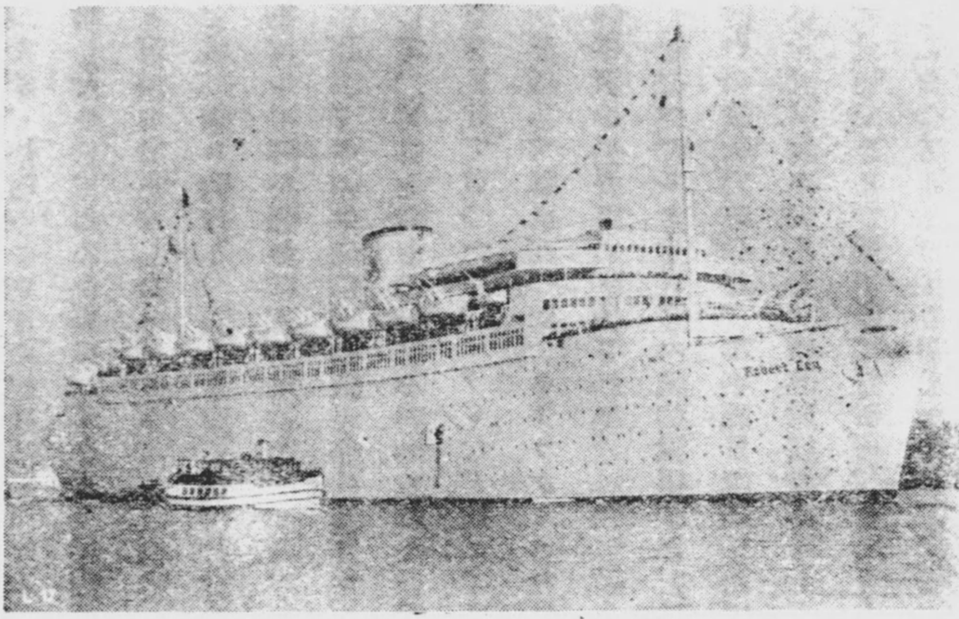
はないと信じる。先づ歡喜力行團の組織概觀から、旅日記へと筆を進めて行くことにしよう。

二　歡喜力行團とは

歡喜力行團（NS-Gemeinschaft "Kraft durch Freude"）はドイツ勞働前線（Die Deutsche Arbeitsfront）の外郭團體であつて、勞働前線總司令ロベルト・ライ氏が總裁として統率してゐる。

　ドイツ勞働前線は、資本家、勞働者を打つて一丸として生産事業に總動員し、一大民族協同體として、國家總力發揮に協力させようとする目的をもつて創設されたものであるが、歡喜力行團は、更に、單に賃銀の引上やその他勞働條件の改善が勞働力を高める唯一の方法ではなく、勤勞者をして、その最高生産能力を發揮させるためには、彼等に勞働及び生活に對する喜びと樂しみとを與へなければならぬ——といふ認識から創設されたのである。

　この目的を達するために、約七つの部局が置かれてゐるが、休暇旅行局では、勞働に疲れた勤勞者たちに休暇を與へて旅行させ、新たな活氣を吹き込み、且つその情操を豊かにし、知識を増させることに努力してゐる。六隻の所屬汽船を使つて毎月數回行ふ外國旅行——ノルウェー航海や、イタリア地中海方面航海——は、即ちこの休暇旅行中の最大行事なのである。毎月僅少な金額を積立



ロベルト・ライ號

てることに依つて（例へば、ノルウェー旅行一週間の費用は五十九マーク）豪華な外國旅行ができるのであるから、全ドイツの勤勞者たちがこの旅行を待望し、憧憬することは非常なもの、言はゞ日本の伊勢詣みたいなもので、幸運に惠まれて抽籤にはいり、たとへ三日貴族とはいへ、豪華版旅行を樂しんで職場に歸つた勤勞者たちは、皆で記念會をつくり、時時會合しては、この一生一代の思ひ出に耽るといふ、まことにその滿足の程も察せられる。先づ、ナチス政府の社會政策中、最も成功してゐる事業の一つであると言へよう。

三　ロベルト・ライ號の設備と構造

六月七日の午後八時までに乘船せよとの通知であ

つたが、川村ハンブルク總領事に市中を案内して貰つたり、總領事官邸で防共協定强化問題などを論じたりしてゐるうちに、スツカリ時間が經つてしまひ、總領事の自動車を借りて埠頭に驅付けると輕快な卵色をしたロベルト・ライ號は、幸ひまだその豪壯な船體を岸壁に橫たへてゐる。大急ぎで船に乘り込むと、間もなく勇壯な行進曲のうちに、ロベルト・ライ號は岸壁を離れ、夕靄立罩めるエルベ河を靜かに下り始めた。

Bデッキの中央に、七室より成るヒットラー總統專用の室があるが、私は唯一人の外國人乘客として、特にその中の一室を與へられた。簡素ではあるが、快適な作りである。ヒットラー總統の寢室を見せて貰つたが、ベッドなど極めて愼ましいもので、その生活の質素なことを、案內のボーイが感激して私に語つた。スーツケースを船室に置くと、早速船長にインタヴューを申し込み、最上部甲板の船長室に案內される。

船長ファルケンバッハ氏の說明するところに依れば、このロベルト・ライ號は歡喜力行團船隊六隻中の旗船であつて、本年三月就航したばかりの新造船。排水量は二萬七千二百八十八トン、時速は十五ノットである。收容船客數は千七百五十名、船員數は四百四十名、〆めて二千二百名に上る大世帶である。船室數は五百一、そのうち夫婦用の室が二百あり、その他は大體五人一室といふことになつてゐる。乘客用船室の全部が海に面して居り、一室も陰氣な室のないのがこの船の御自慢

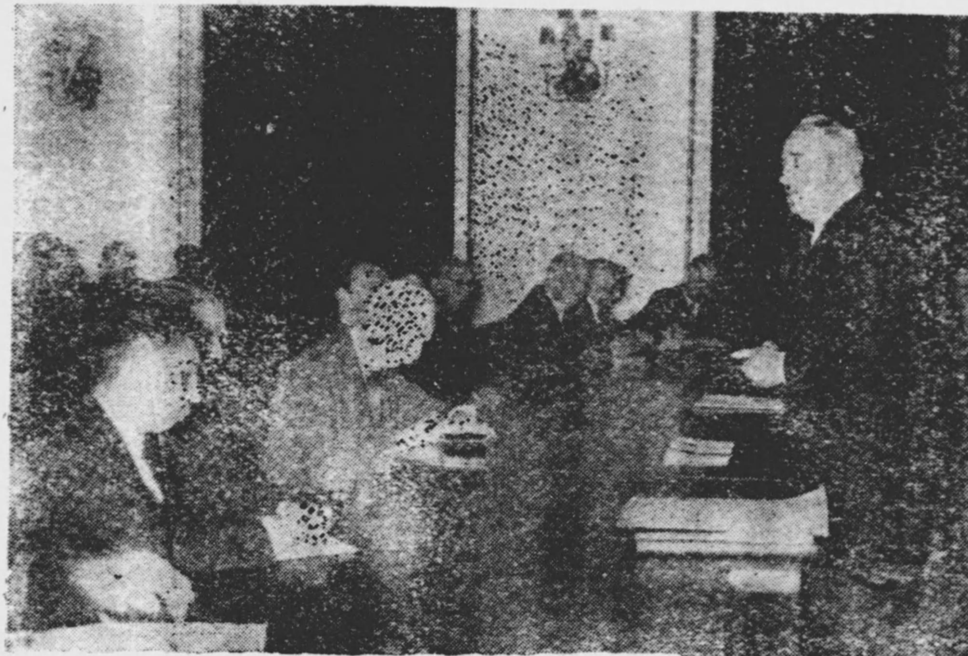
だ。その他、完備せる體育場あり、最新設備の大プールがある、演劇用舞臺のついた大廣間あり、さすがにドイツが誇るだけの豪壯華麗さを具へてゐる。

この航海の一人當り運賃は五十九マークといふことになつてゐるが、普通の商船なら尠くとも百五十マークはかゝること、四月初旬ヒットラー總統が乘船して、勞働者たちと一緒に三日間の航海を試みた時、總統が柔い羽蒲團を却けて、皆のと同じい粗末な毛布にくるまつて寢たこと、五月下旬ドイツ義勇軍のスペインからの歸還輸送に當つたことなど、いろ〳〵興味深い話をしてくれた。

四 歡喜に滿ちた勤勞者

第二日目（六月八日）の午前三時頃に、かの有名なヘルゴラント島の附近を通過した筈であるが、その頃は白河夜船、六時二十分の起床奏樂で眼が覺めた時は、もう渺茫たる北海の洋上、見えるものはたゞ波ばかりである。天氣は上々。

七時半、食事を知らせる喇叭の音が船內高く響き渡る。指定の食卓について相客同士「ハイル・ヒットラー！」と朝の挨拶をし合ふ。私のテーブルには、夫婦三組と若い勞働者一人。食事の間の會話で、私はこの航海が平常のそれと異り、ボッフム市（エッセンの近くにある工業都市）のアイクホッフ鐵工所の借切旅行であることを知つた。アイクホッフ鐵工所は職員・職工およそ千二百人



ロペルト・ライ氏外國記者團に語る（左端は著者）

を有し、日本にも製品の販路を持つ大工場であるが、今年は創業以來七十五周年に相當するので、社長アイクホッフ氏がその記念のため、職員・職工の殆ど全員をこのノルウェー航海に招待したのである。しかも妻帶者には同伴を許したので、總數は千七百名に及んでゐる。汽車、汽船等の旅費全部をアイクホッフ氏が持つほか、一人當り三十五マークの小遣錢を渡してある。それだけぢやない。この一週間の旅行中、工場は殆ど閉鎖したも同樣であるから、一週間の生產額がマイナスされるわけである、だから、この旅行のためにアイクホッフ氏が負擔する金額は、實に驚くべきほど莫大なものである。

例令、餘計な利潤を出しても、どうせ國庫に納めなければならぬから、寧ろ勞働者に振舞つて喜

ばせた方が得であるなどいふ皮肉な觀察をするものがないとも限らぬが、兎に角、このアイクホッフ氏の擧には、日本の資本家には眞似のできない肚の太いところがある。職工たちが皆これを非常に德として「どうだい、俺たちの社長は豪いだらう。これこそ、ナチスの國民社會主義といふものなのだ！」と私に誇らかに語つたものである。不斷菜葉服で油にまみれて働いてゐる人たちが、豪華な汽船に乘り込み、深々と身體の埋まる安樂椅子に腰掛け、酒を飲み、踊りを樂しむのである。その喜びの程も察せられるではないか。聞けば、この樂しい旅行を機緣として咲き出るロマンスの花も尠くないとか。

五　船上生活の一日

食事が終れば、皆思ひ〳〵に散歩をしたり、甲板の寢椅子に横になつたり、アコーディオンに合はせて輪舞をやつたり……。

午前十時から「散歩デツキの百粁行進」が始まる。百粁行進とは、さても大きく吹掛けたものだが、これは面白い故事來歷がある。今を去る四年前、或る歡喜力行團船の乘客たちが、荒波のためにスツカリ醉つてしまつて、吐くの何のと大騷ぎ。その時、機轉のある一船客が發議して、七百人の船客一同手を組み、フラ〳〵千鳥足で船の廊下を行進した。ところが靈驗いやちこ、だん〳〵船



アコーディオンに合せて合唱（左より五人目著者）

酔を忘れて來て、たうとう一同元氣を回復してしまつた。その後この百粁行進が、歡喜力行團船の由緒ある傳統になつたのである。音樂隊を先頭に一同手に手を組んで、一周二百五十米の散歩デッキをグル〳〵廻り、その間に時々ダンスをはさむ——音樂國民にふさはしい行事である。

十二時から晝食。料理は餘り結構とはいへないが、料理のまづいのは、何もこの船に限つたことではなく、ドイツ一般のことであるから諦めがつく。食後スカゲラック海戰の跡を通る頃から、船がそろ〳〵搖れ出して來た。

何しろ、航海は生れて初めてといふ人が大部分を占めてゐるこの船のこととて、忽ち船酔者續出、船内到るところに小間物店が賑かに開店される。すると、Aデッキの掲示場に大きな紙が麗々しく

こんな船醉は誰にも與へられるものではない。神に感謝し、喜び勇んで我慢せよ！」これなどは、いかにもドイツ式で面白い。僕が醉はないで平氣な顔をしてゐるのを見て、皆が驚いてゐるから、「自分たち日本人は元來海の子と呼ばれて海國民である上に、こちらへ來る道中、一箇月以上も荒波の試煉を受けて來たから、少し位の波は屁とも思はないのだ」とちよつぴり威張つてやつた。

三時半のお茶を濟ます頃から、右舷の方、ノルウェーの陸地が幽かに見えて來る。思ひなしか、肌に觸れる風もヒヤリとして涼しい。七時半夕食の喇叭が鳴る。さすがに出席者が尠い。何しろ白夜（夜の太陽）で有名なノルウェーに近付いたこととて、日の暮れるのが遲く、九時半漸く日沒、今更に緯度の高いところに來てゐることを感じる。

夕食後は二つの大廣間で、ダンス、ビールの泡と煙草の烟。私も多くの勞働者諸君に混つてビールを飮み、いろ／＼世間話をしたりする。二千人のドイツ人に混るタツタ一人の異國人、しかも日本人といふので珍しいのか、方々のテーブルから招待されて、愛嬌の「公平な分配」になか／＼人知れぬ苦勞がいる。

十一時四十五分音樂終了、十二時就寢である。これで船上生活一日のプログラムは終はる。

六　ノルウェーのフィヨルド入り

第三日目（六月九日）。起きて船室の窓から外を覗くと、船はもうハンダンガー・フィヨルドの中にはいつてゐる。フィヨルドとはノルウェー特有の地貌であるが、日本語に譯せば「狹江」とか「狹灣」とかいふべきものであらう。帶のやうに細長くノルウェー國内深く切れ込んで居り、その地形は複雜多岐を極めてゐる。

ドイツでは爲替管理のため外貨を手に入れることが困難であるところから、歡喜力行團でも外國に上陸することなしに勤勞者を旅行させねばならぬ。それにはこのノルウェーのフィヨルドなどはもつてこいで、自國船でよその國の心臟部まではいつて行くことができる。「船舶内は領土の延長と認める」といふ國際公法の原則を、最も巧妙に、最も有効に利用したものといはねばならぬ。

フィヨルドの兩岸は鋭い壁をなしてゐるところが多く、高いところなど海上からいきなり千三百メートルもそゝり立つてゐる。このあたりにもう溫い季節は廻つて來てゐるが、少し高いところには、まだ殘雪が深く山襞に喰ひ入つてゐる。斷崖には無數の瀑布が懸つてゐて、數百メートル落下して直接海に入り、さかんな飛沫をあげてゐる光景は實に壯觀である。少し傾斜の緩かな山麓には、緑濃い牧場がひろがり、山羊や羊の遊んでゐるさまが、船上から覗く双眼鏡のレンズに映る。

綠の中に點綴された白堊の家、その門口では子供等が船に向つて手を振り、手巾を振つてゐる。船からも手を振り、手巾を振る。見て美しい情景だ。

午後、大廣間でアイクホッフ鐵工所の作業實況映畫を觀る。中に出て來る職工諸君の顏には一々見覺えがある。皆、この船で私と毎日一緒に食事し、一緒に甲板を散歩してゐるその同じ人たちなのだ。工場では汗みどろでハンマーを振つてゐるその人が、今はこの豪華船で安樂椅子に凭れてゐる。私は兩方を見較べて見て、今更のやうに、その人たちの大きな喜びをひしひしと身近に感じた。こゝにドイツ社會政策の一斷面がある。この船では、社長一家が職工と同じ船室に寢泊りし、一緒にデッキ・ゴルフを樂しみ、嬉々としてお互ひに朋輩のやうに話し合つてゐる。これなど、ナチスの自慢する「民族協同體理念」の一つの卑近な表はれであらう。

七　日獨交驩のひととき

さんさんたる陽光を浴びながら、上部甲板の寢椅子に寢轉んで、多數の勞働者たちと、いろいろな問題について論じ合ふ。私に對する質問の多くは「支那事變はいつ片附く見込か?」「日本は英國に對してどういふ態度を執るつもりか?」などといふ支那事變に關するものである。私は豫てこのことあるを想像し、ベルリンを發つ時から、その答辯材料を用意してゐたので、大體日本を誤解

させない程度の返答はしたつもりである。

今こゝで注意して置きたいことは、特別の教養あるドイツ人は兎も角、普通一般のドイツ人は、ナチス現在のドイツ民族優秀性强調の影響を受けて、時に異民族、殊に有色人種を輕んずる氣配が見えることもあるが、吾々日本人に對する認識と厚意とは一般に深くなつて來てゐることである。

甲論乙駁、話が酣な時、ヒットラー青年團員が二人、ちよつと自分たちの室に來てくれと誘ひに來た。隨いて行つてみると、最下部甲板にヒットラー青年團用の一區劃があり、その中の集會室に男子團員二十名、女子團員十八名が集まつて小音樂會を開いてゐるところなのである。歡喜力行團の船には每航海、各地のヒットラー青年團の男女團員が招待されて、音樂その他を船內でやること になつてゐるのである。

さて私が室內にはいると、團長が、「實は、今日は盟邦の友人であるあなたを我々の音樂會に招待して、我々の故鄕の歌を聽いていたゞきたいと思つてお呼びしたのです」といふ。私はその好意を感謝し、彼等の演奏に深く耳を傾けたが、それが終はると、團長に向つて「今度は私の方からお禮として、日本の踊をお目にかけたい」と申入れた。先づ最初に、どこからか探して來て貰つた棒を腰にして、劍舞「川中島」をやり、次に鹿兒島小原節を踊つた。これで私たちの心は全く打融けてしまひ、彼等は私にドイツ國歌やナチス黨歌「ホルスト・ヴェッセル」を敎へ、私は彼等に日



歡喜力行團（右方に道具をもてるはライ氏）

本國歌を敎へて、極めて愉快な何時間かを過した。この會合が機緣で、私はこの一團の靑年たちとスツカリ仲良しになり、毎日一緖に甲板で遊んだだけでなく、三回ほど全員をお茶に招待して交驩した。

この夜、ヒットラー靑年團員は大廣間で船客慰安會を催したが、合奏、合唱、舞踊、寸劇、落語と盛澤山なプログラムであつた。これ等餘興の進行は、すべて音樂で合圖されるのであるが、このほか、船上生活のあらゆる行事が音樂で指揮され、進行してゆくのである。音樂を愛する國民は幸福だ。

八　ベルゲン港に入る

第四日目（六月十日）。いゝ天氣だ！　今日

はノルウェー最大のソーニャ・フィヨルドを通る。入口から一番の奧まで、驚くなかれ實に百八十七キロといふ長いしごきのやうな狹江である。北緯六十一度に位してゐるだけに、聳え立つ海拔千八百メートルの連山の頂部には、物凄く大きな氷河が懸つてゐる。壯大な景觀だ。途中で、これも歡喜力行團の汽船デア・ドイッチェ號と擦れちがふ。船客一同甲板の欄から身體を乘り出し、ラウドスピーカーの號令に合せて「ジーク・ハイル！（萬歲）」を三唱し、「グーテ・ライゼ！（御機嫌よう）」を絕叫する。かういふ場合にも、一々號令に合せてするところなど、どこまでもドイツ式だ。

夕方八時ベルゲン港にはいる。ベルゲンは人口十萬を有し、首府オスロに次ぐ大都會、ノルウェー唯一の不凍港である。海岸から背後の丘へだら〳〵のぼりになつた美しい港町だ。

夕食後、ヒットラー青年團員四十名と葡萄酒を飮みながら「日獨民謠の夕」を催す。ドイツの民謠には一體に明朗輕快なリズムのものが多いのに比して、日本民謠のメロディーはおしなべて哀愁沈痛の氣を含んでゐる。だから、一緒に浮々した氣持にならうといふ時など、歌曲の選定に困つてしまふ。私は「佐渡おけさ」「小原節」等の俚謠、民謠から「嗚呼玉杯」「荒城の月」「二人は若い」「こゝは御國を何百里」「愛國行進曲」「日の丸行進曲」等々、更に詩吟に至るまで、あらゆるヴァラエティを加へて歌つてみた。これは、どんな日本の歌がドイツ人のお氣に召すかを見たか

つたからである。

私たちが日本の歌曲を外國人に紹介する時、最も日本的だと思はれる歌をいくら張切つて歌つても、彼等外國人にはピンと來ないで、私たち日本人の單なる自己陶醉に終つてしまふことがある。私たちは、外國人の耳にはいり易く、しかも純日本的な歌を選擇しなければならぬ。けれども、これが最も困難な問題で、私などベルリン在住の日本人聲樂家から相談を受けて、いつも頭を惱ますことなのである。

さて、日本民謠のうち「佐渡おけさ」が喜ばれるのは、これはもう絶對不動である。殊に歌詞の間に挾む囃子(これはハンガリアの歌にもあるさうだが)が、彼等に面白く響くらしい。一高寮歌「嗚呼玉杯」も人氣がある。昨冬私が多數の外國人とバイエルン地方を旅行した時、日本の歌をうたふことを所望され、何氣なく私の母校の歌「嗚呼玉杯」を歌つて聽かせたのであるが、これが非常の人氣を博して、また歌つてくれとせがまれたものである。ところが、今度もまたこの歌が大層喜ばれ、熱心なのになると、私に何度も歌はせて自らその音譜を書付けるやうな始末である。要するに、泰西風の作曲法の中に日本的な或るものを含んでゐるからであらうと思ふ。それから詩吟なども、その良さと味とは、勿論、外國人に充分な理解ができる筈はないが、しかし、その中に含まれる眞劍な氣魄と精神とは、言葉の障碍物を超越して彼等の胸に訴へるものがあるらしい。これは

今度だけでなく、以前ベルリンの或る社交クラブでやつた時も、また新聞記者の東プロイセン旅行の際ヒットラー青年團員に聞かせた時も、共に喜ばれたのであつた。

九　日獨人の娯樂の相異

ヒットラー青年團員等と別れて大廣間に來ると、今夜は假裝舞踏會といふので、老若男女二千のドイツ人が、キヤッ〳〵はしやいでゐる。元來、ドイツ人は餘り行儀の良い方ではないが、この船の乘客はその生活程度からいつて、殊に行儀が良くないのも、まア當然といへよう。私は踊ることに餘り氣が進まなかつたので、獨り甲板の欄に凭れて、眞黑な海面を眺めてゐた。大廣間から洩れて來る嬌聲や音樂のリズムが、浪の音に混つて幽かに耳を搖する。私は考へた。ドイツ人は生活を享樂することを一つの權利と考へてゐるやうにすら見える。彼等は寧ろ本能的と呼びたい位に生活を享樂する。けれども、彼等の生活享樂法は、それだけにまた極めて安直である。彼等は最も經濟的に生活を享樂する途を知つてゐる。無理もない。世界大戰で完全に叩きのめされたドイツ國民は、凡そあらゆる艱苦を忍び、缺乏に耐へなければならなかつた。しかも、彼等は同時に生活を或る程度享樂しなければ承知できなかつたのである。彼等はかくして、安直に、能率的に生活を享樂する方法を覺えた。

ところが、我が祖國日本は一體どうであらう？ 跛行的な軍需景氣によつて、花柳界等はすさまじい殷賑振りを示してゐるといふ。これは、日本人が經濟的に生活を享樂する方法を知らないためではなからうか？ 日本人が、澤山金をかけなければ、生活を享樂できないと思ひ謬つてゐるせゐではなからうか？ 日本では今、長期戰に耐へ得る國力を培養するため、國民生活の緊縮、乃至簡易化が强く要求されてゐる。それには、このドイツ國民のやうに、もつと生活を健實に、安直に享樂する方法を學ぶことが必要だと思ふ。ドイツ人には缺點も色々あらうが、この點においては、多くの學ぶべきものを持つて


歡喜力行團（船中の競技）

ゐる。

私は急に積極的な意欲を身内に感じた。私は、思ふ存分踊りたくなつて來た。ネクタイの歪みを直すと、私は煌々たる大廣間の方へ、大股に歩んで行つた。

一〇 乘員とすつかり融合

第五日目（六月十一日）は日曜で、午前九時からヒットラー青年團員の音樂による嚴肅な朝のお勤めがある。天氣がよいので上部甲板の寢椅子に足を投げ出して、青年團の娘さんたちと雜談に耽る。昨年既に日獨兩國の男子青年團交換があつたから、今度はひとつ女子青年團交換をやつたら有意義だらうなどといふ話が出る。たゞ、女子の場合は男子の場合と違ひ、殊に日本側において代表派遣にいろ〳〵な難點を生じて來ると思ふ。しかし、あらゆる困難を排除して、この女子青年團交換は實現したいものである。殊に、西洋の女といふと米國あたりのお轉婆娘を想像する日本の若い女の人たちに、健實なドイツ娘を見せることは、種々な點で良い影響が多いと思ふ。

今日の午前でノルウェーの山影も視界から遠ざかり、船は再び北海の碧波を蹴立てて、南へ南へと走る。フィヨルドの中では船の周圍に一ぱい飛び廻つてゐた鷗も、今はもう、二つ三つと算へる位しかゐない。そろ〳〵船客一同の間に、別れを惜しむ情が出て來る。

私は船客全部と全く遠慮のない間柄になつて、お互ひに「俺」「貴樣」で話し合ひ、皆は私を呼ぶのに「トモエダ」では發音しにくいとみえて「トミー」または通信社の名のまゝ「ドウメイ」と呼び慣はしたが、船中たゞ一人の日本人が餘程珍しいと見えて、私は一日中サインをせがまれ、記念撮影に引張り廻される。もと〳〵この旅行では、ドイツ人の生活の中にスツポリ飛込むつもりで出掛けて來たのだから、交際のためとあれば、サインで手が疲れる位のことは厭はないが、かう朝から晩までサイン〳〵と追ひ廻されると、日本の警視廳でなくてもサインの弊害を感じて來る。

午後四時半から、スポーツデッキで船內オリンピック大會が開催される。ドイツ人が躊躇せず競走に參加し、明朗に振舞ふのはいつもながら羨しい。

運動會も終り、夕食も濟み、最後の舞踏會も閉ぢ、船はいよ〳〵ハンブルクに近付いて行く。異國人とはいへ、かうして一週間も同じ船內で兄弟のやうにつきあつてみると、人種と國境を越えた友情が湧き出て來る。私の胸にも、一沫の哀愁が漂ふ。私はドイツに來てから、今夜初めて旅愁を感じた！

二　東亞の風雲急を聽く

第六日目（六月十二日）。朝早く眼を覺ませば、船はもうエルベの河中を走つてゐる。坦々たる兩

岸の風景が、ノルウェーのフィヨルドとは凡そ對蹠的な印象を與へる。そろ〳〵、あちこちに工場の煙突が見えて來る。再び、潑剌たる活動の世界へ歸つて來たのだ。

午前十一時ハンブルク港の岸壁に到着。船客一同はそれ〴〵市内見物に出掛けて行つたが、私は早速川村總領事を訪ひ、今井副領事と三人、町のビヤホールへ行つて痛飮する。一週間振りに使ふ日本語――懷しい。それから日本料理屋へ行つて食べた日本食、殊に味噌汁のおいしいことおいしいこと。そこで壽司をしこたま買ひこんで、ロベルト・ライ號に歸り、ヒットラー青年團員たちとさゝやかな「日本の夕」を催す。青年連がうろ覺えの「君が代」を合唱してくれる。

翌十三日は、いよ〳〵下船、解散の日だ。早朝、船内に賣りに來た新聞を買ふと、一面のトップに朱のアンダーライン入りで「天津の事態急迫す！」と出てゐる。私の思ひは、風雲急なる東亞の天地に馳せた。私は甲板の椅子に腰掛け、その新聞を手に持つたまゝ、深い感慨に耽らずには居られなかつた。

今、自分はかうしてドイツ人たちと睦じく交驩してゐる。けれども、それは、利害の衝突しない範圍に於いての話なのだ。相互の利害において關係は微妙となり深刻を加へて來る。近頃、日獨兩國間では、防共協定强化問題が行惱んでゐる噂があるのはどうしたことか。問題はこれを大局より察し、高所より觀なければならぬ。現在東亞の事態、歐洲の形勢、共に急迫してゐるこの際、日獨

兩國の關係は將來どう進んで行くことであらうか？　否、どう進まなければならぬであらうか？

固より國際間の利害問題は甘い妥協を許さないのであるが、凡ては國家の大目的から考へられねばならぬ。防共樞軸の强化が我が國策である限り、その目的達成のためには、相互の最も固いタイアップを要することいふまでもない。しかし、それはどうして可能であるか。

日本國民は、十分明瞭にその嚮ふところを認識して飽くまで鞏固な意志をもつて、邁進すべきであらう。

私があれを思ひ、これを思ひ、果しなく深い青空を茫然と見やつてゐる時、突然、私の肩を强く叩くものがある。

ハツと我れに歸ると、そこには、私がこの航海中最も親しく交つた一人の青年が、別れの挨拶をするために立つてゐた。

私はスツクと立上り、逞しい青年の手を兩手で力一ぱい握りしめ、惡夢を拂ひのけるやうにして叫んだ――

「さやうなら！　では、また會はうぜ！」（昭和一四、六、一五）

ナチスドイツの娘子軍

——ヒットラー・ユーゲント「美と信念」部について——

一　ドイツ娘子軍

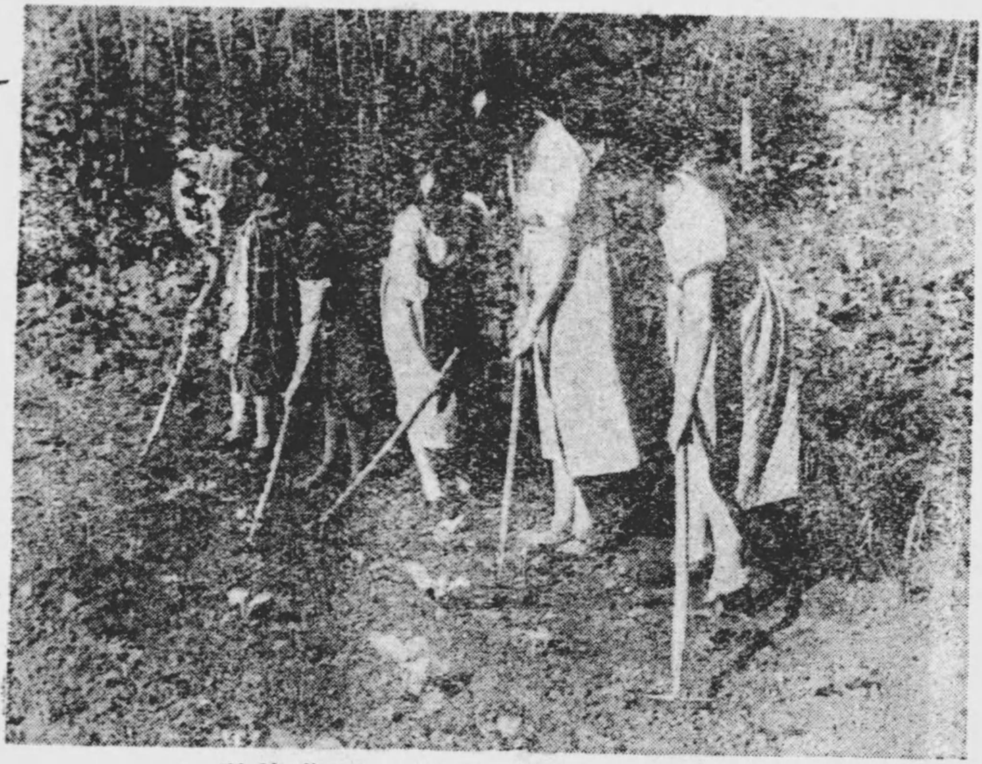
ドイツは今、國を擧げて戰つてゐる。完全な國家總力戰だ。銃後に於いても、あらゆる組織、あらゆる團體が動員され、それぐ\の任務を熱心に遂行してゐる。その中でも、ヒットラー・ユーゲントは一際目立つて華々しい活躍をしてゐる。殊に、收穫補助に、家事手傳に、赤十字に、衞生施設に、兒童保護園に、また衞戍病院慰問に大童の奮鬪をしてゐるのは、ヒットラー・ユーゲント中の一組織、ドイツ女子青年團「美と信念」部である。夢多かるべき二十歲前後の娘たちが、祖國の危急に敢然と起ち上つて、銃後陣の第一線で軍隊式の規律をもつて活動してゐる。まさしく、銃後の娘子軍と呼んでいゝ働きぶりだ。非常時に當つてこれだけ活躍するドイツ娘子軍が、平常どのやうに組織立てられ、訓練を受けてゐるか——その實體を解剖して見ることにしよう。

二　「美と信念」部の組織

一口にヒットラー・ユーゲントと呼ぶけれども、この中には男子青年團のほかにドイツ女子青年團（Bund deutscher Mädel 略稱 BDM（ベーデーエム））があり、ユッタ・リユディガー女史が團長として統率してゐる。このドイツ女子青年團は更に三部に分たれ、十歳から十四歳までの少女部（Jungmädel 略稱 JM（ヨットエム））、十四歳から十七歳までの女子青年團（狹義のBDM（ベーデーエム））、更に十七歳から二十一歳までの「美と信念」部（BDM.-Werk "Glaube und Schönheit"）がそれぞれ年齡別に組織されてゐる



負傷歸還兵の慰問に努める「美と信念」部員



「美と信念」部員の園藝練習

る。滿十七歲になつた少女はすべて、ヒットラー總統の誕生日、四月二十日を期して「美と信念」部に入部することになつてゐる。最初の一年間は義務制であり、其後は同部中に留まるなり、或はまたナチ黨の婦人部にはいるなり、當人の自由意思といふことになつてゐる。現在クレメンティーネ・ツー・カステル女史が部長として、五十萬以上の部員を指揮してゐる。

そもそもこの「美と信念」部は一九三八年一月十九日、ドイツ青年統監バルドゥール・フォン・シーラッハ氏の命令によつて創設された組織であつて、十七歲から二十一歲までの女子を啓發し、叡智を磨かしめ、明朗な健康美を育くんで行くことを目的と

する。その教育方針の根本が、民族社會主義的世界觀の徹底にあること勿論である。「美と信念」部といふ名稱は、この組織の標語をそのまゝ名稱に取りいれたものである。このうち信念といふ言葉については、ドイツ女子青年團長リュデイガー女史の次のやうな言葉が明瞭に説明してゐる。

「我々は祖國ドイツ及びヒットラー總統を無條件に信頼し更に將來この信念をその子供の魂に植ゑつけるやうな娘をつくりあげたい。かくしてこそ民族社會主義、從つて祖國ドイツは永久に榮えるであらう。」

シーラッハ統監は「男子には力を、女子には美を！」と叫んだが、しかし、この美といふ言葉は、ナチス・ドイツにとつては新しい特殊の意義內容をもつてゐる。カソリック的影響の强かつた中世以來、人間の精神と肉體とを區分して考へ、精神は高貴にして善美なもの、肉體はこれに反して醜惡なものと考へられる傾向が强かつたが、民族社會主義では、古代ゲルマン人の思想に復歸してこの兩者を、統一綜合の觀念においてのみ考へる。從つて、從來のやうに內的美と外的美とを區別して考へるやうなことはせず、美を一つのヨリ高い統一概念に於いてのみ把握する。天與の精神的及び肉體的素質を完全な調和にまで發展させる――これがナチス・ドイツの觀念に於いては最高の美であつて、脂粉による虛飾の美しさなどは問題にしないのである。精神と肉體とが調和をとつて發達し、精神の美しさが外部に滲み出てゐるやうなのが、ナチス・ドイツ理想の美なのである。すな

はち健康といふことが日本以上に美の重要な要素となつてゐるのである。病的美などといふものは、このナチス・ドイツでは、人々の認識の外にあるのだ。シーラッハ統監曰く、「精神と肉體のうるはしい綜合こそ、我々の所期する美である」と。

三　「美と信念」部と職業

「美と信念」部の教育要綱で少女部や女子青年部のそれと異る點は、後者二つが協同生活に適應するための教育に重點を置いてゐるのに對して、前者はその部員として協同生活に結びついて個性を充分に伸展發揮させることを教育目標としてゐる點である。すなはち「美と信念」部に於ける教育と訓練は、各人の個性や傾向を尊重し、それ等がすく〳〵と素直に伸びる可能性を與へることに努めてゐる。從つて努めて束縛を避け、娘たちをできるだけ自由に自己規律させるやうにしむけてゐる。そしてその娘が主婦の生活にはいつても、或はまた職業戰線に立つても、與へられた人生の課題を正しく解いて行けるやうな教養を與へようとする。部員は大部分結婚適齡期の娘であるが、單に花嫁教育などに局限することなく、一般的な職業教育を與へて、社會教育機關としての役割を果すことに努めてゐる。

「美と信念」部の職業教育は、毎年二月から四月にかけて行はれる「勤勞オリンピック」――全國



停車場で避難民列車への食糧配給に活躍

職業競技大會に於いて最高潮に達する。ヒットラー・ユーゲントとドイツ勤勞戰線との共同主催にかゝるこの競技大會には、勿論、少女部や女子靑年部からも參加するが、年齢の關係から「美と信念」部員が大部分を占めることは當然である。

この大會の全國優勝者にはヒットラー總統が握手してその勝利を祝福することになつてゐるので、いやしくも、何かの職業をもつ部員は、日頃鍛へた全技能を傾けて覇權を競ひ、この榮譽にあづからうと努力するのである。これが、どれだけ部員の緊張を促し、その技能を向上させるか判らない。まさに、「美と信念」部年中行事中に於ける最大のものと言つてよからう。

四　「美と信念」部の信條四ヶ條

「美と信念」部がその指導方針として掲げてゐるものは次の四ヶ條である。

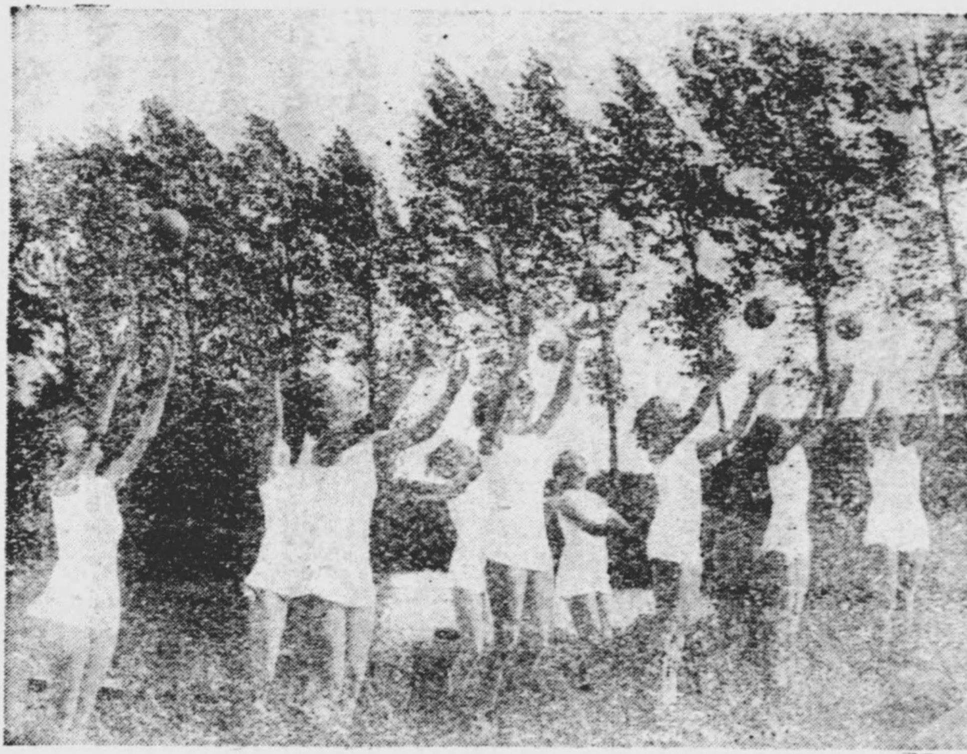
（一）部員が四ヶ年の課程終了後、更に體育的訓練を續行することを自發的に希望する位にまで肉體的に訓練すること。

（二）民族を强くするためには各人が健康であることが絕對に必要である事實を認識し、この認識を適當な體育及び健全な生活方法によつて實現すること。

（三）個性の明瞭にあらはれた趣味多き生活をおくるといふ文化的課題の究明に努め、將來住宅・衣服その他日常生活を趣味的に構成する準備をすること。

（四）各人の性向・資質及び特殊の興味に應じ、それ〴〵の協同研究會（Arbeitsgemeinschaft）に於いて修養する機會を與へること。

これをもつてみても、いかに女子の體位向上を重視してゐるかゞ判る。これは、「女子青年もまた男子青年と同じ方針によつて敎育しなければならぬ。女子の場合に於いても、敎育の重點は先づ體育に置かれる。體育的訓練を終つてのち、心的なもの、精神的な價値に眼を向けさせるのが至當であらう」といふヒットラー總統の指導精神に則つてゐるのである。從つて女子青年團の訓練のほ



「美と信念」部夏期合宿における體育訓練

とんど三分の二は體育にあてられ、最も重要な教育課目として組織的な體育訓練が熱心に實行されてゐるのである。シーラッハ統監の言を聽かう。

「民族社會主義的な運動場でスポーツをする女子、すなはちナチス・スポーツ教師によつて指導される女子は、とりもなほさず、おのづからナチス世界觀的にも教育されてゐることになるのである。」

そこで「美と信念」部は、部員が何か一つ趣味に合つたスポーツ協同研究會を選擇し、一週に一回はこれに出席することを要請する。スポーツ協同研究會にはいろ〱な種類のスポーツが包含されてゐる。例へば、陸上競技・水泳・庭球・漕艇・馬術・

スキー・スケート等々……けれども、體育の中心となり主柱となつてゐるのは、何と言つても體操である。體操と言つても無味乾燥なそれではなく、様々な樂器の伴奏で行ふ音樂舞踊である。この中には國民舞踊乃至鄕土舞踊を加味したものも含まれてゐるが、ドイツの娘たちはこの舞踊體操を心から樂しんでやつて居り、これは單に體育だけでなく情操敎育にも裨益するところが多いと言はれてゐる。簡素な輕裝でみづ〳〵しい綠の芝生の上に立ち、陽光を惜みなく浴びながら音樂に合せて跳ね、飛び、走る彼女等は、身體を健康にするにとゞまらず、精神をも自然に明朗淸純ならしめて行く。そしてここにこそ、第二の國民を產み育くむ健康なドイツ母性の用意がなされるのである。

このやうに「美と信念」部では、スポーツを奬勵して部員の體位向上をはかるに極めて熱心であるが、これは我々にとつて示唆多き問題を含んでゐる。一般に、女學生は校門を出た後はいろいろな條件に制約されてスポーツを行ふ機會が少くなり、運動不足になることが多い。なかんづく職業戰線に立つ場合には、この傾向が顯著である。學校時代の鮮かな血色とはち切れるやうな健康が次第に衰へて行く。これは特に日本に於いて著しい。けれども、民族の健康問題を考へる者にとつて、これは看過できない重大問題である。この憂慮すべき傾向を防止するため、ナチス・ドイツでは「美と信念」部員の體育に對して特別の關心を寄せ、精力的にスポーツを奬勵してゐる。例へばタイピストやデパートの店員にしても、勤務時間から解放された後は直ぐ女子青年團の制服を著

て運動場にあらはれ、皆で朗かに樂しくスポーツに汗を流したり、集團舞踊に興じたりするのである。新鮮な空氣と日光とは、彼女等を職場の溷濁した空氣から救ひ、明日の生活に對する希望を與へる。……このやうにして「美と信念」部員は、學校を卒業した後も同樣にスポーツを樂しむことができ、次に來るべき貴い使命――健全な母性としての準備をすゝめるのである。こゝに、「美と信念」部體育の特徴が存する。

五　ナチス・ドイツの女性觀と母性尊重

ナチスは民族社會主義を旗印として掲げてゐるだけに、民族の將來といふことについては絕大の關心をもつてゐる。そして一民族の輝かしい將來は、健全な次代國民にバトンをリレーすることに懸つてゐると考へる。健全な次代國民を育てるのは母性の任務である。こゝにおいて母性の健康といふことは、最高度の價値をもつて要求されるのである。「美と信念」部員は大部分結婚適齡期にあるのだから、この健全な母性たるべき用意が最も熱心に行はれなければならない。女性が自らの健康增進に努力することは、單に彼女自身の利益といふにとゞまらず、また實に、民族協同體に奉仕する所以であるとされてゐる。このやうな理由から、「美と信念」部では、いろ〳〵な方面から健全な母性たるべき準備敎育を與へてゐる。ドイツ青年指導部から發行されるパンフレット類の中に



婦人團總裁ショルツ・クリンク女史の視閲

もそのやうな種類のものが多く、殊に民族の血統に關する解說書が多い。結婚前の純潔といふこともこの觀點から聲高く叫ばれて居り、大戰後の混亂時代以來いさゝか緩んだかに見えた貞操觀念も、最近ではかなり引締つて來てゐるかに見える。

ナチス・ドイツ的世界觀に於いては、男女同權などといふ思想は排斥し、女は女らしく、更に母性としての價値を磨くところに、その最高の權利が存するのだと說くのであ

る。シーラッハ統監は言ふ。

「我々はもはや男女同權論の時代には住んでゐない。なぜならば、わが民族社會主義國家に於いては、男女とも同權をもつべきではなくして、おの〳〵その本質及び天性に相應した獨自の權利をもつべきだからである。靑年は男としての權利を、娘たちは女としての、更に母としての權利をもつべきである。」

更にシーラッハ統監の女性觀を聽かう。

「ドイツ娘はドイツ民族の中に立ち、創造し、かつ將來わが民族の母性となり得るやう自己を錬磨しなければならぬ。なぜならば、ドイツ民族の將來を擔ふ男子は、女らしい女、そして人生のあらゆる犧牲と艱苦とをその夫と共に鬪ひ拔くべく、充分な信念と勇氣とをもつてゐる妻を必要とするからである。」

私たちはこれを裏書する意見をドイツ女子靑年團長リュデイガー女史の言に汲みとることができる。曰く、

「我々は、將來誇りをもつて人生の鬪士にとつてその一生の伴侶となるやうな娘を育てあげて行きたいと思ふ。ロマンティックな夢に溺れ、畫を描いたり歌つたり踊つたりしかできないやうな娘をつくりあげようとは欲しない。我々は實に、逞しく現實の上に立ち、自己の理想實現に向つて全

力を傾注し、喜んでその犧牲となるやうな娘をつくりあげようと欲するのである。青年は政治的兵士に、そして娘たちは、その政治的兵士にとつて最もよき僚友たるべき强く勇敢なる女に敎育されなければならない。」

六 「美と信念」部の戰時態勢

すべてを規整統一化してしまふことに特殊の才能をもつてゐるドイツ人は、その青年運動の組織と機能に於いても、完全な制服化に成功してゐる。嘗ての「制服の處女」は、世界から隔離された陰欝な學園に於いて妖しき桃色の夢に憂悶する娘の姿であつた。しかし、今や「制服の處女」は、嵐荒れ狂ふ街頭に於いて逞しき信念の旗を掲げつゝ鬪ふ娘たちの姿である。嘗ては惱みがあつた。今では、强さと朗かさが支配してゐる。

わたくしは歐洲戰爭の勃發する直前、女子靑年團本部の招待を受けて、ベルリン近郊の「美と信念」部夏期休暇合宿を訪問した。そして部員と同じ日課に從つて行動し、同じ食事をとり、また「塾の夕（Heimabend）」にも參加して、つぶさにその生活振りを體驗した。女學生あり、タイピストあり、工場勤務者あり、デパートの店員あり、種々雜多なメンバーでありながら、朝から晩まで嚴格なプログラムに從つて規律正しく生活し、全く一つの渾然たる有機體をなしてゐるのを見て、わ

たくしは非常に心を打たれた。土に親しむといふ意味で、茶園の勞働も重要な日課の一つとなつてゐる。

「塾の夕」は討論をしたり合唱をしたり多彩なプログラムに從つて進行するのであるが、その夜は皆、初めてヒットラー總統を見た時の印象について語り合つた。少女らしい憧憬と感激をもつて、眼を輝かしながらヒットラー總統について物語るのを聽く時、わたくしは現ドイツの若い世代にしみわたつてゐるヒットラー崇拜の念が相當根强いものであるのを感じた。また若干の時間をさいて、指導者がその日の時事ニュースにナチス的註釋を加へつゝ部員に說明するのであるが、その徹底したナチス世界觀教育には驚くほかはなかつた。

このナチス的に敎育された「美と信念」部は、ドイツの戰時情勢が緊迫するにつれ、ドイツ娘子軍の前衛部隊として、銃後施設の第一線でます〳〵目覺しい奮鬪を續けることであらう。興亞大業のため艱難の道を步むわが日本にもまた、このやうに强固な統一組織が欲しいものである。

戰火渦巻くドイツより遙かに祖國の空を望んで、このことを翹望する極めて切なるものがある。

（昭和一四、一〇、五）

試煉の中のドイツ大學

一　國家總力戰と大學

軍鼓の音は、學の殿堂をも容赦なく搖がす。若い教授や學生の大多數は出征して行つた。しかし、それにも拘らず、ドイツ諸大學の空氣は割合に平靜である。これは一體、何に依るのであらうか？筆者はそれを二つのポイントから觀察したい。一つはナチス政權下に於ける大學の特殊生態である。いま一つは、今次歐洲大戰の帯びる特異な性格である。

一九三三年初頭ナチス黨が政權を獲得して以來、焚書、ユダヤ人教授追放等々、假借なき「肅清工作」の强行は、ドイツの大學をかなり根本的な面に於いて變質させてしまつた。言はば學問と教育機關の戰時體制化が既に早くから着々行はれてゐたやうなものである。大學教育の「國策化」と學生の「愛國心昂揚」とは、戰爭前から完全な統制下に押し進められた。或る意味では、既に充分飽

和點に達してゐたかの觀があつた。それだけに今度の場合、湧き起るやうな熱狂的愛國心の爆發は、先づその起る餘地が無かつたと言ひ得るのである。

さて、從來の戰爭を强力的だとするならば、今回の大戰は智能的であるところにその特異な性格がある。百パーセントの意味に於ける國家總力戰として、燻ぶるやうに戰火が這ひ擴がつて行く。地味な、けれどもヨリ深刻な戰爭形態である。このことは、また直ちに大學の戰時風景に反映してゐる。嘗て愛國哲人フィヒテが大學の壇上から獅子吼したやうな、また、幾萬幾十萬の學生が西部戰線の野を鮮血で染めたやうな、そんなヒロイックな情景は、今日では全然見られない。在るものはたゞ國家總力戰に於ける一つの割當てられた任務を忠實に果し行く大學の姿である。

二　學術の尊重

開戰當初、英佛兩國をいよ〳〵敵に廻さなければならないと知つたドイツは、さすがに些かあわてたかたちであつた。ベルリンほか四ケ所の大學を殘してあとは全部閉鎖してしまひ、ミネルヴァの神も今や全くマルスの神の膝下にひざまづいたかのやうに見えた。けれども、ドイツ側の和平攻勢がいよ〳〵無効に終つて長期戰必至となるや、ドイツ政府もこゝに一時の興奮より醒めて、長期戰に對應する物心總動員體制の完備に全力を傾注し出した。この時、新たな眼を以つて見直された

のが、實に學術であり、また、その研究育成機關たる大學である。

國家總力戰を遂行する基礎を爲すものは國家の實力である。しかも學術の貧困なる所に、優勢な實力の培養されるわけがない。殊に武器や軍用器材の改良發明が何よりも強く翹望されてゐる今日、自然科學の分野に於ける實力培養こそ、先づ喫緊の急務とされなければならぬ——かう考へたドイツ政府は、今度は熱心に學術の保護育成のため力を入れ出して來たのである。

この新方針を明確に宣明したのがルスト文相のミュンヘン演說である。

ルスト文相は去る十二月四日、ミュンヘン工業大學に於いて一場の演說を試み、全ドイツの大學並びに學生に向つて呼掛けた。曰く、

「國防及び經濟の領域に於ける多大なる需要、例へば醫者、技術者に對する需要は、敎育期間を能ふ限り短縮することを要求する。そのために今後は、學年を三學期制とする。また情勢の推移と共に、現在開講してゐる五大學以外の大學も、追々開校して行くことゝなるであらう。我々の前進する合言葉は、學術の尊重である。」

この演說の三日後、十二月七日、政府は布告を發して、來る一月八日より全ドイツの大學・專門學校を再び開校する旨、公表したのである。

三　戰時大學の特別施設

現在、ドイツの人的資源で一番不足してゐるのは、醫者と工業技術者である。戰爭が最も端的に要求する職業分野だからである。政府もこの問題については一方ならず頭を惱ました結果、學生の應召兵に暫時休暇を與へて大學の講義乃至實習に出席させ、試驗が終つたら直ぐまた原隊に歸らせる――といふ方法を執ることに決したのである。その結果は壯觀である。動亂勃發以來幽靈屋敷のやうに淋しかつた大學の敎室は、忽ち陸海空軍の制服で埋められ、一風變つた戰時風景が描き出されたのである。更に、從前の二學期制（Semester）を廢して三學期制（Trimester）を採用したから、例へば六學期を要する學科を今までは三ケ年かゝつたのをこれからは二ケ年で終了し得ることとなつたのである。かくして應召學生に對しても、その學業を中斷することなく、短期間に課程を終了し得る途が開かれたわけである。また理工科系統の大學附屬研究所に對しては、政府から精神的並びに財政的援助が豐富に與へられ、醫科方面の學生に對しても、いろ〳〵特別の給費制度等が整備されつゝある。

このやうに自然科學の部内は、國家總力戰態勢のために却つてその地位を強化したかの感があるが、一方精神科學の方面はどうであらうか？　この方は、自然科學のやうに惠まれた狀態にはない

けれども、しかし、あながち逆境にあるとも言へない。といふのは、既に長期戰を覺悟した政府は、文化を貧困ならしめることは國家百年の大計に背き、民族永遠の興隆を齎らす所以でない——といふことを反省する冷靜さを取戻して居り、從つて、精神科學の方面に對しても相當の理解を示してゐるからである。教授たちの間にも、案外足をしつかり大地につけて思索研究してゐる者が尠くなく、殊に、ベルリン大學の碩學シュプランガー教授の如き、別に時局に阿ねるところもなく、悠揚として思索し講義してゐる樣子は、まだ〳〵ドイツにもいゝ學者らしい學者が殘つてゐる——といふ感じを抱かせる。

四　ドイツ學生の學術精神

現在ドイツの大學生は、大部分ヒットラー青年團及び勤勞奉仕隊の訓練を經て來てゐるから、大體に於いて素直に民族社會主義を信奉してゐる者が多い。大學内に於ける民族社會主義ドイツ學生聯盟（NSD-Studentenband）の横斷的組織はかなり緻密に行渡つて居り、その學内運動も相當活潑である。學生聯盟は開戰と同時に機關紙「運動（Die Bewegung）」上に於てその態度を闡明し、國策への協力を宣言したが、これはこの團體の性質から考へて、當然過ぎる程當然である。

大學生は大體に於いて、社會民主黨時代からの生殘りインテリのやうな戰爭嫌惡感は持つて居ら

す、たゞ一つの運命としてこれを甘受し、ヒットラー總統の命ずるまゝに從つて行かうといふ氣持――かういふ感情が支配的であるやうに見える。そして戰爭に對する熱情を掻立てる代りに、燈火管制の暗い電燈の下で、幾分なりとも研究を續けて行かう……と考へてゐるやうである。一見退嬰的に見えるが、ドイツの學問、學術精神は、これに依つて保持され命脈を繋いで行くに違ひない。ベルリン大學のホッペ總長も筆者に對して「學生は戰前よりも、能率的によく勉强してゐるやうだ」と語つた。

戰爭は、學の聖燈を激しくゆすぶる。しかし、たとひどんなに試煉の嵐は荒狂はうとも、ドイツの逞しい學術精神は、遂にその聖火を護りおほせることであらう。（昭和一五、一、八）

ローゼンベルグ會見記

世界史的大轉換の第一年たる一九四〇年を送つてその第二年を迎へた三日、記者はベルリン市中央部マルガーテン通り十七番地のナチス黨外交部にローゼンベルグ氏を訪問した。ナチス・ドイツの最高理論指導者として時めくアルフレッド・ローゼンベルグ氏は、最近書齋の机に向ふことは少く、或はパリに、或はミュンヘンに、東奔西走、歐洲新秩序建設のために超人的活動をつゞけてゐる。從つて記者の會見申込みもその承諾を危ぶまれたが、特に盟邦日本の有力新聞のためといふので、貴重な時間を割いてくれたのである。記者は黨外交部極東係長に導かれて護衞の親衞隊、突擊隊員が詰めてゐる中を通り拔け、二階の書齋に入ると澁い茶色の背廣に落着いた鼠色のネクタイをつけたローゼンベルグ氏は、上機嫌に微笑みながら記者の手を堅く握りしめる。キビ〳〵した態度はどこまでも革命家的だ。書物や書類や原稿用紙等が堆く積まれてゐる大きい机を中にして、ローゼンベルグ氏と向ひ合つて坐つた記者が、

「ドイツが對英戰爭に勝利を占めた場合には、植民地問題が當然重要な課題として登場して來ると思ふが、ドイツの戰後に於ける植民地政策に關する意見を御伺ひしたい。」

先づ質問の火蓋を切ると、ローゼンベルグ氏は速記するために傍に控へてゐる女祕書の手許をヂッと見つめた後、口を開く。

ローゼンベルグ「未だドイツが對英戰爭遂行の途上にあつて、植民地問題が現實の政治面に現はれて來てゐない今日、殘念ながら具體的なことをいふことは出來ない。しかし私見だけを述べれば、ドイツはアフリカ大陸等に再び植民地を獲得した場合、飽くまで植民地原住民の生存權尊重といふ建前で進んで行くであらう。卽ち植民地原住民の社會的傳統を尊重し、之をドイツ式に改革するやうなことは出來る限り避けて行きたい。それがその土地及び住民を健全に發達させて行く最良の方法であると信じる。」

友枝「歐洲は歐洲人へ、アメリカはアメリカ人へ、東亞は東亞人へといふスローガンが、世界新秩序建設の指導原理として叫ばれてゐるが、それならば、之を更に推し進めてアフリカはアフリカ人の手へといふことは出來ないか。」

ローゼンベルグ「それは全然問題が違ふ。アフリカ土人は歷史的に見て又民族的に見て獨立して自主的に統治する能力が缺けてゐる。從つてアフリカ大陸は他の高度文明國の植民地として、原料

供給國としてのみ立つて行くべき運命にある。我々はこれを指導し開發して行かねばならぬ。」

友枝「一つの民族にその生活圏としてどの程度の範圍を要求することが出來るか。」

ローゼンベルグ「生活圏を或る特定の地域に固定的に區切ることは間違つてゐる。生活圏は或る民族のその時の力に應じて伸縮する性質のものである。民族の發展力に從つて生活圏が擴大されるといふ意味では生活圏に狹い限界はないが、しかし、また一民族の膨脹力に限度があるといふ現實的段階では、生活圏は自ら或る範圍に限定されるといふことが出來る。」

友枝「貴著『廿世紀の神話』その他を見ても解る通り、貴下は古くから印度問題を研究してをられるが、將來英國の敗戰に依つて大英帝國が自潰作用を起して行く場合、インドはどのやうな道を辿つて行くであらうか。」

ローゼンベルグ「インド人は元來優秀な民族であり、曾ては輝かしい文明の華を開いたことがある。けれどもやがて人種の混合が行はれたため、その花も遂にしぼんで了つた。民族の純血性を喪失したことこそインドを衰退せしめた最大の原因である。これは將來にも禍根として殘るであらう。インドが英國の羈絆を脱して獨立して行けるかどうか、それは一にかゝつてインド人の更生力如何にある、我々は勿論それを希望するが、インド自身が解決し清算しなければならぬ色々な内部的問題があると思ふ。他力本願ではなく民族自身の力が肝要である。」

論ずべき話題は盡きなかつたが、外には訪客が多數詰めかけて待つてゐる。記者は質問を打切るに當り、ローゼンベルグ氏の趣味生活に就いて訊ねた。

「自分は音樂が好きで特にベートーヴェンのシンフォニーを聞くのが樂しみだ。その他ギリシャ時代の建築彫刻など古典的なものに趣味を持つてゐる。」



ローゼンベルグ氏

趣味を語るローゼンベルグ氏の顔には、政治を論ずる時の鋭さは影を潜めて、世慣れた苦勞人の面影が現はれる。半時間以上の會見を謝し辭去する記者に對し差し出した手は温かつた。

（昭和一六、一、三）

西部戰線三百粁（これがジークフリート線だ）

一　國境異變

十一月十一日、ドイツ外務省の外國記者團共同會見は俄然、オランダ問題で沸騰した。シュミット情報部長を中心に、獨蘭國境緊張說に關する質疑應答が白熱化したのだ。支局に歸ると、一本の訓電が待つてゐた。「獨軍オランダ國內侵入說アリ警戒セヨ」——といふのだ。直ぐ日本大使館に電話をかけて、オランダ入國の査證につき問合せると、今日から急に制限が峻嚴となつて、殆ど査證を得る望みは無いと言ふ。これはいよ〳〵怪しい。しかし、宣傳省に掛合つても、恐らく證明書はくれないだらう。もう、危險を冒して出掛けるほかは無い。果して行けるかどうか判らないが、兎に角、つかまるのを覺悟で行ける所まで行つて見よう。

斯う決心すると、私は方々飛び廻つて漸く一枚の國境行切符を手に入れ、旅裝もそこ〳〵にベル

リン・ツオー驛を出發した。十二日午後一時五十五分。雨空だ。

十一月十二日（日曜）曇、小雨

前途に目算の無い旅行だ。どうなるか判らない。車窓から眺める重く垂れ下つた雲が佗しい。私の乘つてゐる急行は、ハノーヴァーあたりから殆ど各驛で軍用列車を追越す。皆、西へ西へと向つてゐる。驛に停車すると、兵隊は大聲に軍歌を合唱し、なか〳〵元氣である。殊に壯觀なのは、ドイツ軍が世界に誇る新鋭機械化部隊の西部移動で、裝甲砲車、通信車、傳書鳩車等を初めとして炊爨車に至るまで機械化の精を盡し、十數輛の連結車がいくつもいくつも長蛇の如く馳つてゐる。火野葦平氏がゐたら、「機械と兵隊」といふ戰爭小說を物することであらう。

食堂車で紅顏の一中尉と向ひ合つて坐つたので、試みに、

「一體ドイツは、ほんたうにオランダへ攻め入るつもりでせうか？」

と聞いて見ると、

「それは全くヒットラー總統の胸三寸にあることで、我々の覗ひ知るところではありません。唯我々ドイツ人は、やるべき時には徹底的にやり拔く國民性であることを、知つていたゞきたい。今も、家內にさう言つて永の別れをして來たところですよ。」

と昂然と言ひ切つたが、新婚一週間目だといふ彼は、さすがに愛妻のことを思ひ出してか、眼を閉ぢて煙草の烟を胸深く吸込んだ。

北歐の秋空は早く暮れやすく、五時といふのにもうあたりは眞暗だ。車室の中には、螢の光のやうな遮蔽燈が唯一つ。時々機關車の煙突が吐き出す火の粉が花火のやうに明るい。

國境方面のダイヤが混亂してゐるのか、汽車の進行狀態が段々不規則になつて來る。少し行つては止まり、少し進んではまた止まる。荒野の中で長く停車してゐたりする。午後九時頃、眞暗な停車場らしい所に止まる。車掌が來て、こゝで皆降りるのだと言ふ。聞けば、こゝが國境驛ベントハイムなのだ。二時間の延着である。ホームや改札口には、多數の憲兵や國境警察隊員が警戒の眼を鋭く光らせてゐるが、幸ひ簡單な取調べを受けただけでホテルに入ることが出來た。荷物を室に置くと早速帳場に降りて來て、そこにゐる主人や娘に話し掛ける。世間話にことよせて何氣なく色々のことを聞いてゐたが、こいつ胡散臭いと睨んだか、二人とも段々返事を曖昧にするやうになつて來た。スパイ扱ひにされてはかなはないから、いゝ加減で切上げて室に歸る。電文を書上げてベルリン支局に電話を掛け、東京への打電を依賴した後、表へ出る。

何といふ暗さだ。脣の上の暗夜である上、完全な燈火管制なので、廣袤天地の間、光一すぢすら無い。こんな暗さが一體この世の中にあるのかと思ふ位だ。

人口三千の小さい町、その眞中にカフェーが一軒ある。ドアを排して中へはいると、兵隊と土地の娘で滿員である。賑やかな音樂に合せて踊り狂つてゐる。ドイツ人は自國の軍備と戰闘力に充分の自信を持つてゐるから、こんな國境の町に於いてすら、何の不安も感ぜず落著いて生活を樂しんでゐるのであらう。けれども、この兵隊たちもあすは戰場へ向はねばならぬ身かも知れないのだ。カフェーを出てホテルに歸る途すがら、私はいつの間にか、日本ではやつた流行歌「國境の町」を口吟んでゐた。

二　祕密警察の監視

十一月十三日（月曜）曇後晴

ドイツが難攻不落の鐵壁と呼號する「西の壁」ジークフリート要塞線は、このベントハイム附近まで延びて來てゐるので、私は國境に沿つて南へ下つて行きたいと思ひ、ホテルから自動車を注文させたところ、タッタ一臺しかないタクシーが生憎故障で動けないと言ふ。ほんたうの故障か、それとも體のいゝ敬遠なのか知らぬが、兎に角、自動車がなければ仕方がない、汽車に乗つて南方百粁に在る國境の小村エルテンへ向ふ。エルテンはドイツ領が最も深くオランダ領に喰入つてゐる部分の尖端に位する重要戰略據點である。アムステルダムまで僅か九十粁足らずだ。

汽車が東方ミュンスター市へ向ふ途中、車窓から要塞線の一部が見えるが、この方面は對外宣傳のためもあつてか、人に見せるやうに造つてあるので、格別興味を惹くやうな所も無い。ミュンスターは古いカトリックの牙城で、落著いた感じのする大學町であるが、今は町全體が灰綠色の軍服で埋まつてゐて昔の俤は更に無い。軍都だ。ミュンスターから更に南下してエッセンの北部を通ると、この邊はさすがドイツの心臟部とも言ふべき重工業の中心地だけに、防空施設が水も漏らさぬ程行屆いてゐるのが車窓からでも判る。こゝは、ドイツがその科學的設備の偉力を誇る西部防空地帶の最後に屬するのである。市の周圍には、大きな櫓を組んで高射砲を据付けてあつたり、又は、土を大きく盛り上げて高角砲陣地を築いてゐる。聽音機係の兵隊は一刻も耳を離せないが、他の兵隊はかなり退屈らしく、汽車の中から手を振れば、向ふも喜んで手を振つて答へる。胸に挿した花を拔取つて車窓から投げる女學生もゐる。どうせ屆きはしないのだが、兵隊もこれを受止める眞似をして笑ひ興じてゐる。微笑ましい情景だ。

陽が西へ傾き始める頃汽車は私の目的地へ段々近附いて行つたが、私の坐つてゐる車室に車掌だとか列車常勤の戰時看護婦等が用も無いのに話に來たり、覗きに來たりする。さては警戒してるな！とは思つたが、私はその時は格別氣にも留めずにゐた。エルテンの一つ手前の驛エンメリッヒに著くと、汽車はこゝで止まつて、これより先へは自動車で行くよりほかに途が無いといふ。仕方なく

下車すると、ホームにゲシュタッポ（國家祕密警察）が頑張つてゐて、乘客を一人一人檢査してゐる。私も觀念してその前まで行くと、丁度その時、ゲシュタッポが他へ注意を向けてゐて、その横に少し隙が出來た。私はこれ幸ひと彼の横を素早くすり拔けて改札口へ驅け降りると、改札係も默つて切符を受取つてくれた。しめた！　とばかり驛の構內を驅け拔けて道路へ出て、自動車屋の方向へ大急ぎで步いて行つてると、ものゝ百米も來た頃だらう。背後から「止まれ！」と呼止められた。振り向くと、ゲシュタッポが自轉車に乘つて追掛けて來てゐたのだ。萬事休す！

彼は私の旅券を取り上げて、警察屯所まで同行を求めた。仕方なく彼に隨いて行くと、途中で、さつきの車掌や看護婦が步いて來るのに出會ふ。さてはこの連中が密告したナ！　と氣が付くと、思はずむか〳〵と腹が立つて來て、すれ違ふ時默つて睨み付けてやると、向ふでもばつの惡さうな顏をしてゐた。しかし、私はそれ以外、極めて冷靜であり得た。といふのは自分はスパイでも何でもなく、然かも疚しいところが無い。それに新聞記者に取つては、つかまつたといふその事が、既に一つのニュースになる、この先どんな風になるだらうか？　といふ興味が湧いて來たからである。

三　盟邦記者への厚意

薄暗い屯所では、先づ私の旅行目的を訊問された。私はここぞとばかり、「現在、世界中にドイ

ッに關する逆宣傳が氾濫してゐる。今度のオランダ侵入説等もその一つだ。自分は、ドイツと友好關係にある中立國の新聞記者として眞相を調査し、正確な事實を報道してデマ・ニュースを粉碎するのは、自分の爲すべき義務だと信じる。殊に、君は胸に黨員章を付けてゐる。君はドイツ人の中でも、特に選拔された祕密警察で働いてゐる生粹のドイツ人だ。君の胸にもしほんたうの愛國心が在るならば、單に自分を釋放するだけでなく、寧ろ援助してくれるのこそ職務に忠實な所以ではあるまいか！　しかも、今や、一刻の躊躇も許されない。自分は直ぐにも實地調査に赴かなければならない。どうか、枉げて行くことを許していたゞきたい」と必死になつて縷々說き立てた。彼は暫く腕組をして考へてゐたが、「宜しい、友邦日本の記者として、今回は特別の取計ひをして上げよう。その代り、君の行動は完全に警察の監督下に置かれるものと承知されたい」と言つて、漸く釋放してくれることゝなつた。私は一生懸命だ。私はなほも喰下つて、「さう分つてくれたなら、この上更に力を藉していたゞきたい。こゝは未知の土地で、町の樣子もよく判らない。どうかエルテンまでの自動車を斡旋していたゞきたい」と賴み込んだ。ゲシュタッポの斡旋だから自動車も直ぐに來て、私はホッとした氣持で國境への道を急いだのであつた。約七粁で獨蘭國境に達し、自動車は國境線に沿つて走る。ゆるやかに流れてゐる一つの小川、それが國境だ。小川の向ふで羊がのどかに草を喰つてゐるのが、直ぐ目と鼻の間に見える。陽はもう沈んでゐるが、夕燒空の雲の色が川

面に映じて、薄く金泥を掃いたやうだ。靜かである。意外なほど穩かである。ゲシュタッポの嚴重な警戒から、國境線に相當緊張した空氣を豫想してゐた私は、寧ろ輕い失望を感じた位である。

エルテンに着いて早速警察に出頭すると、軍用宿舍に泊ることを指定される。小高い丘の上だ。あてがはれた室で荷物を整理してゐると、またゲシュタッポがはいつて來て、根掘り葉掘り審問される。ドイツ語の會話練習のつもりで、快く一々返答する。半時間位の後、「今夜は外出を禁止する」と言殘して出て行く。

夕食をとるため食堂へ降りて行くと、將校や下士官等が大勢食卓についてゐる。軍人はどこの國でも、やる事話す事が簡明直截で氣持が良い。直ぐに皆と友だちになつてしまつた。今夜は私が酒を振舞つて、大いに談じ合ふことにする。ドイツの軍人は特に酒に强い。たてつゞけに飮んでは談論風發だ。一人の威勢のいい少尉が、「日本はずるい」と言つて私に喰つてかゝつて來る。「日本はなぜ今、極東で英國と戰はないのか？ なぜ香港を取らないのか？ なぜ新嘉坡を攻めないのか？自分たちは、日本が今極東で英國と戰つて、英國を背後から脅してくれることを期待してゐるのだ。日本の側面援助を待つてゐるのだ。日本はドイツと協力して英國を挾み擊ちにする氣はないのか？」と疊みかけて來る。「そんな得手勝手な議論はない」と私が强く反駁する。皆、口を揃へて、「なぜ日本は早くソヴィエート聯邦と不可侵條約を結ばないのか？」と集中射擊を浴せて來る。……議論

に疲れると、お互ひに自國の民謠を歌ひ合ふ。ドイツの軍歌を合唱する。しかし、たとひどんなに醉つてゐても、どんなに騷いでゐてもラヂオのニュース放送が始まると、急にシーンとして謹聽するのには感心した。それほど時局が重大なのだ。

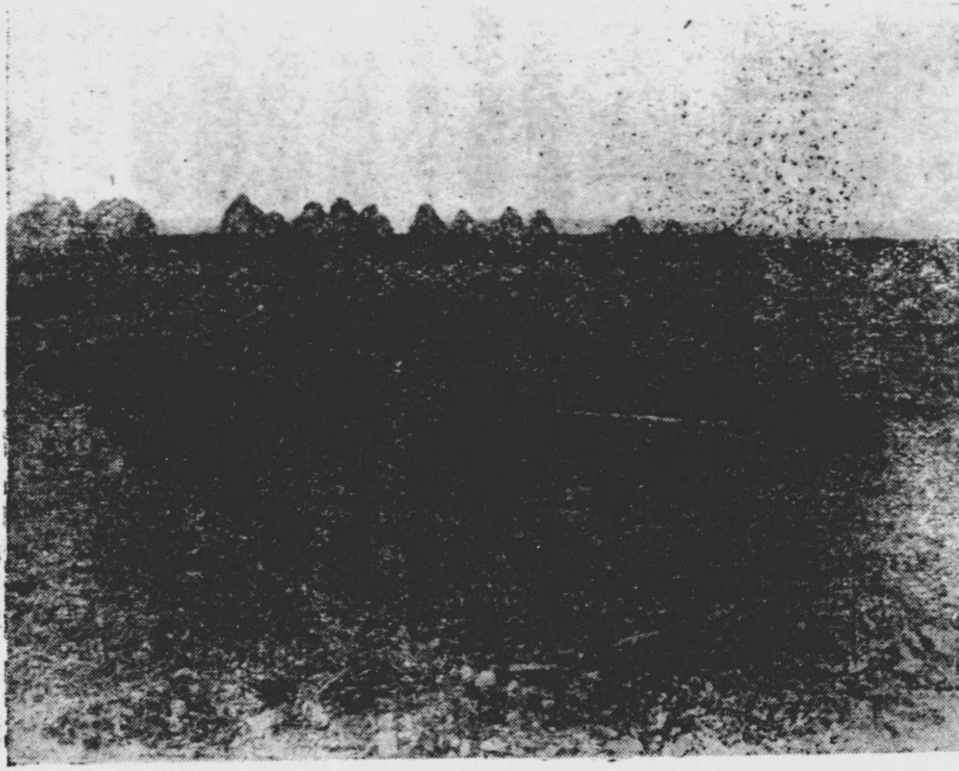
私は今夜、特に軍の好意で軍用電話を使用させて貰ひ、東京へ打電することが出來た。側で兵隊が聽いてゐるのだが、日本語だから皆目判らない。しみ〴〵日本語の有難味を感じる。

四　軍隊內の社會政策

十一月十四日（火曜）晴後曇

朝起きて窓のカーテンを引くと、西南の方にライン河が洋々と流れてゐるのが見える。薄陽は射してゐるが、霧が相當に深い。西部國境は現在雨と霧の季節であり、從つて西部戰線でも活潑な軍事行動が出來ない――といふことをベルリンで聞いてゐたが、實地に觀てなるほどとよく理解することが出來た。南の方はもつと霧が多くて天候が惡いといふから、西部戰線の膠着してゐるのも無理はない。

朝食の際、兵隊が「この日本人に卵を五つ御馳走しろ」と給仕に命じる。私はそんなに澤山食べられないから、二つだけ食べると、「我々は澤山卵を持つてゐるのだから、五つ位食べてくれ」と



擬裝砲陣

皆がさかんに勸める。これは必ずしも宣傳だけではない。軍の兵站部は食料品切符制度の埒外に在るので、豐富に食料品を入手することが出來るのである。肉類も豐富で、私きのふの夕食に出されたビフテキなど、私には戰爭勃發以來初めて味ふ豪華なものであつた。前回の世界大戰末期に於いては、軍隊內兵卒の不滿爆發から遂に全國的革命が起つたので、今回はその轍を踏むまいと、軍當局は兵隊を倦ませないために一生懸命である。食糧も充分に支給するし、且つ上は大將から下は一兵卒に至るまで、全部同一の食事である。また長く塹壕內に留め置くと兵隊の氣持が欝積するといふので、絕えず交替に休暇を與へて歸休させてゐる。

しかし、何しろ二百萬人以上の大世帶なので、歸休兵の數もまた途方もなく多い。そこで現在西部戰線方面では、「歸休兵列車」なるものを特別に仕立てゝ、歸休兵を故鄕に送り屆けるのに大童である。ところが面白いことに、軍隊內の給養が良いものだから、自分の家へ折角歸つても、めしがまづく感じられ、また直ぐ兵營へ歸りたがる兵隊が多いといふ。軍隊內の「社會政策」こそ、ドイツに於いて刻下最も興味深い研究題目であらう。

昨夜の大酒宴のお蔭で軍人たちとスッカリ打融けた友だちになつてしまひ、皆いろ〳〵親切に世話を燒いてくれる。一航空大尉が私を獨蘭國境まで案內して實地檢分をさせてくれるといふので、軍の自動車で宿舍を出發する。國境の稅關で案內の大尉がオランダ官憲に事情を說明すると、「そんなデマが世界に流布されることは、オランダに取つても大きな不利益だ。どうか詳細に調査していたゞきたい」といふ返事、私は查證無しに特にオランダ領內にはいることを許された。しかし、オランダ領內には何の異狀も無い。步哨が退屈さうな顏をしてボンヤリ立つてゐる。鐵兜に晚秋の陽光がやはらかい。

兩國稅關の前にトラックが列をなして並らんでゐる。或る車には、鷄卵が山と積んである。他の車には、鷄がキューキュー詰込まれてゐる。皆、オランダからドイツに輸入される食料品なのだ。またこの道路の横には、獨蘭連絡の鐵路があり、長い長い貨物列車がさかんに西へ向つて走る。側

にゐる税關吏に聞くと、その貨車にはドイツの石炭が滿載してあるさうだ。オランダ領內に「突入」してゐるのは、軍隊ではなくて石炭なのである。そして活潑な物々交換が行はれてゐるのだ。私が、「獨軍のオランダ侵入說は全然事實無根であることを確認した」旨證言すると、「一刻も早く打電する必要があるなら、直ちに軍用電話を御用立てする、その他どんな便宜でも計らふから」と、今度はドイツ側から催促する始末……ドイツが如何に世界輿論を氣にかけてゐるかよく判るやうな氣がした。私はこゝで、國境の情況を寫眞に撮つて置きたいと思つたが、ベルリンを出發する時、今度の旅行は、どうせつかまるに違ひないから、寫眞機など持つてゐて、却つていろ〳〵誤解を起させては——と考へて、寫眞機はわざと携帶して來なかつたので、殘念ながらどうにもならない。諦める。

更に今日は獨白國境線まで南下、ドイツ軍大本營が設置されてゐると噂されるアーヘンへ乘込むべく決心する。エンメリッヒよりケルン行の急行に乘る。ケルン一帶は軍の移動が實にさかんで、物々しい空氣が支配してゐる。ちよつと大きい工場などには皆、「われ等斷じて屈服せず」とか、「團結は勝利を生む」とかいふ戰時スローガンが大きく貼り出されてゐる。驚いたことには、かの有名なケルン大寺院——ゴシック式の歷史的建築物にも亦、このスローガンが麗々しく貼つてあることだ。寧ろ悲壯な感を與へる。

この邊は第二線のせゐか、老兵の多いのが目立つ。私はケルン驛でアーヘン行の汽車を待つてゐる間、「おぢいさん中隊」とでも呼びたいやうな一隊に出會つた。私は昨年、上海や南京でも相當年輩の兵隊を見掛けたが、これはそれどころではない。この中隊の一人に話し掛けると、自分は八月末に初孫が生れて、「たうとう年寄の仲間にはいつたな！」と考へてゐるひまも無く召集されたのだと言ふ。人の良ささうなこのおつさんは、懷中から初孫の寫眞を大事さうに取出して見せてくれたが、まる〳〵と太つた可愛いい男の兒であつた。

そのうちに、この驛頭で一つの小事件が持上つた。上品な身なりをした一人の母親が三つ位の可愛いい娘の手を引いて「おぢいさん中隊」の前を通らうとすると、一人の兵隊がイキナリその子供を抱きあげてしまつた。そして頰ずりしながら、「おゝ可愛いいお孃さんだ！　歳はいくつ？　お孃さんの名前はアンナといふのぢやない？　いやきつとアンナといふに違ひない！」などと夢中になつて叫ぶのだ。きつと急に自分の娘のことを思ひ出したに違ひない。彼の娘はこのお孃さんに似てゐるのだ。そして、名はアンナといふのだ――私は斯う想像した。突然自分の娘を横取りされてムッとしたらしい母親も、事情が判つたのであらう、同情深い目付をしてこの微笑しい情景を眺め

てゐる。私は何か胸にこみ上げて來るものを感じて、そつと脇を向いた。

ケルンからアーヘン行の汽車に乘る。他の乘客が皆、ジロジロ猜疑の眼を以つて私を見るのは餘り愉快でない。日本から歸つて來た外國人で、日本でスパイ扱ひにされたと苦情を漏らす者がゐるが、なるほど愉快ではなかつたらうと、今、自分の身に引き較べて同情が湧く。

ケルンを出て小半時間、デューレンの近くでドイツ最新鋭戰鬪機メッサーシュミット第百十號が十機編隊で矢のやうに西方へ飛び去るのを見る。アーヘンに着いた時は、日はもうとつぷりと暮れてゐた。憲兵やゲシュタッポの警戒が相變らず嚴重を極めてゐるが、幸ひ驛の構內は燈火管制で暗い。なるだけ隅へ隅へと暗い所を選んで歩き、遂に今度はつかまらずにホテル・クヴェッレンホーフに辿り着くことが出來た。ホテルにさへはいれば、旣成事實を主張して何とか追拂はれずに濟むといふ氣がして一安心だ。早速ホテルから當地方最大の新聞、ナチ黨機關紙ウェストドイッチャー・ベオーバハターの編輯局に電話を掛けて貰つて、主筆に會見を申込む。直ぐ來てくれと言ふので、出掛けて行つて、主筆マラングレ氏といろいろ話し合ふ。通り一遍の意見しか述べないので、些かガッカリする。しかし、これは望む方が無理だ。

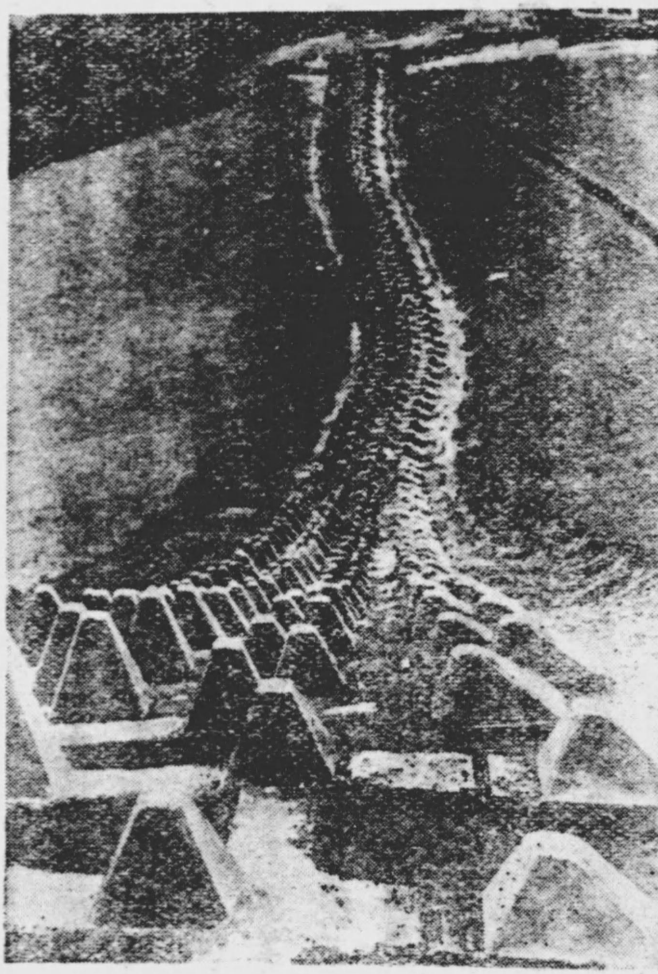
街を歩く。燈火管制の眞暗な中にも拘らず、夥しい兵隊が洪水に押流されたやうに歩いてゐる。理髮店にはいる。お客は全部兵隊だ。料理店を覗く。こゝも兵隊で滿員だ。どこへ行つても兵隊!

兵隊！　兵隊！　である。このアーヘンに、ニュッレンスといふ人口十七萬の市には勿體ないやうなレストランがある。試みにはいつて見ると、こゝも軍人で一ぱいだ。しかも、日本なら恐らく將校だけしかはいらないところだらうが、こゝでは將校だけでなく、一般の兵隊が澤山はいつてゐる。また、他の諸都市では、カフェーやバーなどは大抵十二時か一時が看板であるが、こゝは特に二時まで許されてゐるといふので、東京へ電報を打つた後、この町で一番大きいカフェーへ行つて見る。こゝアーヘンは西部戰線の第一線に屬するので、一體に若い元氣な兵隊が多いが、その連中がそれぞれ女友達を同伴して來て愉快さうに踊つてゐる。ドイツは今、まさしく「兵隊の天國」かも知れない。

六　ジークフリート線

十一月十五日（水曜）曇後晴

今日はいよ〳〵「西の壁」ジークフリート線を視察する日だ。しかし、並大抵のことでは見られないだらう。下手をするとつかまつてしまふ。ベッドの中でも、朝食の際にも、頭の中でいろ〳〵策戰を練る。今日は一つ、本社のデスクを喜ばせるやうな電報を打ちたいものだ――このこと許りが頭を占領してゐる。



ジークフリート線タンク防禦施設

ホテルの支配人に賴み込んで自動車を一臺調達して貰ひ、先づドイツ、オランダ、ベルギー三國々境に在る「三國見晴臺」へ向ふ。市を出はづれると、もう、要塞施設が眼にはいつて來る。私は豫め運轉手に言ひ含め、歩哨や監視兵の立つてゐる箇所は、行先を急ぐ普通の旅行者らしく見せかけるため、且つは歩哨に誰何する時間を與へないため、全速力を以つて疾驅させ、誰もゐない場所はユックリと徐行させた。それでも、歩哨に銃劍を突きつけられて誰何されること度々だ。

なるほど、噂に違はず無類の壯觀である。野を越え、丘を越え、川を跨いで蜿蜒と雲の彼方へ連なつてゐる光景は、一種豪壯な快感を人の胸に起させる。「モダン萬里の長城」とでも呼ばうか。先づ

第一線に幅の廣い鐵條網が布かれ、そのうしろ若干の距離を置いて、無數の戰車鹿柴がニヨキ〳〵頭を擡げてゐるが、そのグロテスクさは、宛ら繪に見る地獄の針の山である。最も感心させられるのはカムフラージュの巧妙なことで、例へば、一見普通の民家の塀らしく圍つてある所があつたが、私が丁度その前を通り過ぎる、中から一人の兵隊が戸を開けて出て來たのを見ると、驚く勿れ、中には銃眼と機銃座が物凄く覗いてゐるではないか。トーチカなのだ。

とある村はづれのことである。附近に監視兵のゐないのを幸ひ、車を停めて展望してゐると、近くで遊んでゐた七つ位の可愛いい子供が私の側へチョコ〳〵驅けて來て、いたいけない、だがキッパリした口調で、「こゝは餘り見てはいけない所なのだヨ。早く行つておくれヨ」と言ふ。こんな小さい子供にも、ジークフリート要塞の重要さが敎へ込まれてゐるのであらう。私は思はず微笑みながら、この小さい愛國者に敬意を表して、直ちにそこを立去つたのであつた。

要塞の第一線は既に早く完成して居り、目下第二線以下の增强工事のため、數萬の勤勞奉仕團員が晝夜兼行の作業を續けてゐる。まさに、秦の始皇帝もはだしの大築城である。ここを視察した日本の某將星が口を極めて賞讃してゐたのを思ひ出す。

アーヘンに引返して汽車に乘る。一路ベルリンへ歸るのだ。こゝ四日間に亙つて踏査した三百粁の行程が、まるで夢のやうに思ひ出される。ライン重工業地帶を通過する。銃を擔つたドイツ兵に

監視されながら、多數のポーランド軍捕虜が畑で耕作してゐるのが車窓から目擊される。前の座席に坐つた人の話では、エッセン附近では、捕虜が道路工事や建築工事にも動員されてゐるといふ。捕虜ばかりではない、操練時間以外の兵隊が鋤や鍬を振ひ、農村の手足を補ふのに大童の奮闘をしてゐる。銃を執るべき兵隊がまた、銃後の活動に參加してゐるのだ。ドイツは今や、國家總力を擧げて戰つてゐるの感が深い。

無事ベルリンに歸つて來て、宣傳省で外人記者の同僚たちに話すと、「許可證無しに行ける筈がない」と言つて、なか〳〵ほんたうにしない。私自身は、さして冒險だとも感じなかつたのであるが、そんなに危險な旅行だつたのであらうか？　ベーマー外國新聞部長は私の肩を叩きながら言つた——

「日本の新聞記者にはわるい奴がゐる。今後、君を宣傳省の注意人物とする！」

（昭和一四、一一、二三）

ベルリン日記抄

五月十日（金曜日）

蟲が知らせたのかもしれない……六時にはベットを離れて、先づ顏に剃刀をあてようと、顏一ぱいに石鹼の泡をこすりつけた時であつた。突如、ケタ、マシイ電話のベル。何事かと思つて受話器に飛びつくと、宣傳省の非常招集！　リッベントロップ外相が重大聲明を發表するから、六時四十分までに、外務省に集つてもらひたい――といふ。時計を見るとちやうど六時半、あと十分しかない。

僕の車は、約一粁離れたガラーヂに預けてあつた。每朝八時に家の前まで持つて來ることになつてゐる。持つて來るまで待つては居られない。すぐガラーヂに電話をかけると、あいにく誰もゐない。もう、自分で驅けつけるほかにてはない。大急ぎで顏の石鹼泡を落すと、顏も洗はず、齒も磨かず外へ飛び出す。

美しく晴渡つた空だ。朝の光線が、街路樹の鈴懸に、うづくやうな緑色に鋭く反射してゐる。僕は驅けた。一生懸命に驅けた。しまひには、上衣を脫いで驅けた。息せき切つて車に飛乘り、ハンドルを握ると、一目散に外務省へ！　交通規則も何もあつたものぢやない。交叉點でもスピードを緩めず、强引に突つきつて走る。ほかの自動車は、この權幕に恐れたか、向ふの方で皆よけて通してくれる。ティーアガルテン通に出る急カーヴでは、惰勢のために車が横つ飛びに飛んで、朝の散步の老婦人をあと一寸でひき倒しさうになる。速度計をチラッと見ると、針は百粁！　市內の制限速力四十粁を二倍以上も越してゐる。……外務省の前に車を停めて時計を見ると、六時五十分、もう定刻を十分過ぎてゐる。急いで二階の會見室へと驅け上る。

室にはいると、もうかれこれ二十人ばかり集つてゐる。皆、眠さうな腫れぼつたい眼つきをしてゐる。先づ素早く集つてゐる顏觸れを見わたすと、APのロッホナー初め米國人六七名、イタリー人三四名、日本人二名、ほかにハンガリー、ルーマニアなど小國の記者が一人位づつ……この瞬間、僕は「ヤックナ！」と直感した。白蘭進入だ！　ベルリンに二十名以上も駐在してゐるベルギー、オランダの記者が一人もゐないのが何よりの證據だ。もう、疑ふ餘地はない。早速デンマークの記者を摑まへて、いきなり「抵抗は强いやうかネ？」と聞くと、「まだ何も判らない」といふ返事。

「ドイツの保護する中立國が、また二つばかり殖えたね」と言ふと、彼は、一ケ月前の深刻な體驗

に至急報を一本飛ばさうといふことになり、車を支局へ走らせる。とにかくこの間にの昔にニューヨークからフラッシュが飛んで、日本では事情が詳細に判つてゐるのかと思ふと、何だかばか〳〵しくなつてくる。電報用紙をDNB(デーエヌベー)通信社の電信室に持つて行くと、當直のオペレーターが、こんな早くから何の至急報かといふやうな顏をしてゐる。まだ何も知らないのかと思ふと氣の毒になる。しかし、說明してやつてゐる餘裕はない。大急ぎで外務省へ引返したが、まだ外相は來てゐない。けれども、記者團は既に五十名近く集つて居り、それぞれ情報を持寄つては、あゝでもない、かうでもないと騷いでゐる。中には、「もうオランダ首府ヘーグが占領されたさうだ」と尤もらしい顏をしてゐるのもある。「既に數千名の落下傘部隊が白蘭兩國內に著陸したさうだ」――かう言ふのは米國記者である。さすがに耳が早い。

待つこと一時間半、八時半になつて漸く、リッペントロップ外相が姿を現はす。黑のネクタイ、灰綠色の制服にナチス名譽黨員章と鐵十字章を佩用、睡眠不足のためか顏色は幾分蒼ざめてゐるが、口許に微笑を浮べ、眼は底知れぬ緊張に輝いてゐる。

「ドイツ政府は既に早くから英佛兩國の戰爭政策の眞意が奈邊にあるかをよく知つてゐた。……」

とロを切つた外相は、一語々々力強く、對白蘭兩國政府覺書を讀みあげる。外相の演說は、大衆的魅力に乏しく、決してうまいとは言はれないが、かうして外交的文書等を朗讀する段になると、聲に抑揚あり、調子に張りがあつて、なかく堂に入つたものである。

僕は外相の眞向ひに坐つて耳を傾けてゐるうちに、何ともしれぬ緊張が全身をつゝんでくるのを覺えた。心臟に沁みるやうな感じだ。去年の九月一日以來この戰爭を覆つてゐた僞裝のヴェールが剝がれて、いよく其の實體が露呈されるに至つたのである。英獨兩雄體當り的死鬪が開始されたのである。たうとう、大戰の本格的段階にまで到達したのだ。僕は、今自分の立つてゐる地盤が、世紀の一大轉換期に直面して地辷りしてゐるのを、身近にひしくと感じた。「歷史」のなまくしい體臭を嗅いだ。

＊

日本の朝刊締切に間に合ふ最終時間——午後三時までは、夢中になつてタイプを叩いた。手が痺れるほどタイプを叩いた。仕事に一段落がついてホッとしてゐるところに、一通の軍事郵便が屆く。親しいS中尉からだ。スタンプを見ると、西部戰線のどこからか、七日前に出したものである。アドレスとしては、いつもの通り、一五四四七Cといふ殺風景な數字が並んでゐるだけだ。葉書には、元氣のいゝ走り書で次のやうに書いてある。

「長らく御無沙汰してすまなかつた。僕の所屬部隊がまた〳〵移動したので、便りをするひまがなかつたのだ。僕等は今度、重大任務についた。

僕はもう恐らく、生きて歸ることはあるまい。しかし、僕が祖國のために一命を捧げた場合にも、決して悲しんでなぞくれるな。男として最も誇らしい死を神から授けられたのだから……」

僕は、この文句を讀んで、今さつき打つた電報――ヒットラー總統の「西部戰線の兵に告ぐ」を思ひ出した。それは、言々句々火を吐くやうな文字で連ねられて居り、

「今や決着の時機は至れり。ドイツ民族千年の運命この一戰に決す。われ等愛する子孫のため鬪ひ拔かん！」

と絕叫した歷史的名文である。總統の烈々たる決意は、全將兵の胸臆に熱火を燃やし、今や、ドイツ大軍の士氣は大いに揚つてゐる。この士氣の昂揚は、我々の寧ろ意外とするほどである。聯合軍の空氣はベルリンでは知る由もないが、しかし、このドイツ將士の士氣は、恐らく聯合軍に對して精神的優勢をかち得るに足るであらう。ドイツの兵隊は、いざ電擊戰となると、インスピレーションを得たやうに强くなる。この呼吸を呑みこんでゐるヒットラー總統は、また偉大な將器といふべきか。

＊

夜十一時過ぎになつて漸く歸途につく。途中フェミナ（キャバレー）の前を通り、ふと中の景況を探つてみたくなつたので、車を停めて中にはいる。……何といふさびれ方だ！ベルリン第一を誇る豪奢な大廣間が、まるで夜半の鐘乳洞みたいに寂然としてゐる。今夜からダンスが御法度になつたさうで、誰一人踊つてゐない。こちらの盛り場はダンスでもつてゐる。ダンスあつての盛り場だ。日本のやうに四疊半の淺酌低唱といふ澁い趣味のないこちらでは、ダンスが缺けると、急にひどくさびれて見える。

給仕（オーバー）に、「どうだい、西部攻擊は？」と脈を引くと、ベルモットをつぎながら、「いよ〱英國と正面切つて鬪ふのだから、大變ですよ」と言ふ。この男は正直だ。英國に對する强がりを豪語する者とても、英國打倒の困難さを知つてゐることは、この男と同樣である。ドイツは、今まで一度も大帝國を抑へたことがない。それだけに、英國に對して本能的に一目を置いてゐることは、前駐獨英國大使ヘンダーソン氏のいみじくも指摘してゐる通りである。

その日下開山英國に對して、ドイツは今、死物狂ひに突つかゝつて行つてゐるのだ。その氣魄は、その決意は、悽愴な眉間に現れてゐる。ドイツ國民が眞劍になるのも無理はない。この眞劍な意氣ごみは、今度こそ、老大英國を土俵のそとへ押し出すかもしれない。その可能性が多分にある。今後の成行が、百パーセントの興味をもつて注目される所以である。

五月十四日（火曜日）

オランダ軍司令官全軍に抵抗中止を命令。

五月二十八日（火曜日）

眼を覺ますと、鎧戸を通してさしこむ朝の光線が、今日もまた晴天であることを語つてゐる。コーヒーを啜りながら新聞に眼を通してゐると、一つの死亡廣告がふと僕の注意を惹いた。小さなつつましい廣告ではあるが、それは舊皇孫ウィルヘルム中尉（舊皇太子の長男）の戰死を報ずるものであつた。

> 皇子ウィルヘルムは、わが家の武人的傳統に忠實なる模範的將校として、祖國のために生き、而してその一命を捧げたり。今、底知れぬ悲しみと共に、その英靈を送る……

僕は茶碗を置いて、窓硝子のそとを眺めた。そこにはうつろなまでに澄渡つた五月の空が、靜かな朝の呼吸をしてゐた。僕は更に、オランダ、ドールンにある老廢帝の上に思ひを馳せた。ロンドンへの轉住を英國政府から勸められて、「余の英京に赴く時は、わがドイツ軍と共に進軍する時であらう！」と答へたと傳へられる廢帝――ホーエンツォレルン家の數奇なる運命は、またこの先、

どのやうに續いて行くことであらうか？

新しく作る洋服の服地購買證書をもらふために、十一時頃家を出て宣傳省へ行く。係の室で雜談してゐると、突然、ラヂオの擴聲機から「雷鳴吹奏曲」が劉喨と鳴り響いた。この雷鳴吹奏曲は、臨時特別ニュースの放送を知らせる前觸れである。雷が轟きわたるやうな、勇壯な旋律だ。

耳を澄ますと、アナウンサーは、先づベルギー國王レオポルド三世が無條件降伏を申出たことを聲高らかに告げた後、語をついで、「我々ドイツ國民は、わが獨軍のなしとげた偉業に對し、滿腔の感謝を捧げ、限りなき誇りを感ずるものである」と結ぶ。アナウンスは續いて吹奏される國歌「ドイッチラント・ユーベル・アッレス」……。僕が差出した手を強く握り返した宣傳省の役人は、「ベルギー國王の態度はなか〳〵立派だ」と言ふ。「見たまへ、オランダその他多くの國の元首は、皆、國土と國民を見棄てゝ蒙塵してゐるぢやないか！　若いレオポルド三世は、最後までその國土に留まつて、その兵卒と共に彈雨の中をくゞり、自己一身の安全をはからなかつた。遂に降伏したとはいふものゝ、實に見上げた男らしい態度だ。」

僕は默つてゐた。その時、僕の腦裡には、舞臺で見るハムレットに似通つたレオポルド三世の顏が、寂しくクローズアップされてゐた。

三時頃、身體はあいたし、天氣は上々なので、急に思ひたつて久しぶりに、ワンゼーのゴルフ・リンクスへ出かける。更衣室にはいると、僕のロッカーの右隣りに、新しいネームカードがつけてある。番人のおやぢにどこの國の人かと聞くと、ドイツ人だといふ。僕は、「これで、たうとう落着いたネ！」と言つて、おやぢと一緒に笑つた。そのわけはかうだ——

僕が去年このクラブに入會した當時、僕のロッカーの右隣りには、ポーランド大使リプスキー氏がゐた。その頃は、ちやうどダンチヒ問題が沸騰しはじめた時で、リプスキー大使の名が新聞紙上に現れない日はないほどであつた。隣り同志の緣だから、一度は同大使に會つて挨拶したいと思ひながら、一日も行きあはずに過ぎてしまひ、そのうちやがてポーランドの滅亡となつてしまつた。十月……十一月……「リプスキー」といふカードの字のみ、暗い更衣室の隅に殘つて、當人の姿は、永久にこゝから消えてしまつたのであつた。僕は、ロッカーの前で服を着更へる毎に、このうつろなネームカードを眺めて、時代の潮流の激しさを身にしみて感じるのであつた。

間もなく、このロッカーに新しいぬしがはいつた。ノルウェー公使館付武官ペターソン大佐！けれども、獨軍のノルウェー進擊によつて、この名前もまた、すぐ消え去らねばならない運命に置かれた。それは四月の中旬のこと——再びからになつたロッカーを見やりながら、僕は、「今度は、

ベルギーかオランダの武官が來る順番だネ」とロッカーのおやぢに言つて笑つた。しかし、三度目には、本家本元のドイツ人が占據したので、こゝに、世界の政治情勢と共に、變轉極まりなかつた「運命のロッカー」も、遂に安息の時を見出すことゝなつた……。

さて、このロッカーのおやぢは、若い時をフランスで暮したといふだけあつて、物の考へ方などがドイツ人離れして居り、時々辛辣な警句を吐いたりして、なか〳〵おもしろい男であつた。ゴルフ・クラブに集まる各國の政治家・外交官・實業家などの話を聞いてゐて、それに彼獨得の解釋を加へて話してくれるので、僕にとつてはなか〳〵おもしろいネタが多く、いはゆる「信ずべき筋」ではないにしても、確かに毛色の變つたニュース・ソースの一つであつた。ところが、今度の戰爭が勃發するや、俄然急轉回、大の國家主義者となつてしまひ、口を衝いて出るのは熱烈な愛國論。今日も偏狹なドグマを振りまはすので、ほんたうのニュースを敎へてやると、むきになつて反駁してくる。話中途でコースに出て、ワン・ラウンドの後いゝ氣持でクラブ・ハウスへ引きあげて來ると、待構へてゐて、僕を說得しようと努める。うるさいおやぢだ。

六月四日（火曜日）

フランダース、アルトア方面の包圍殲滅戰終了、捕虜總數百二十萬以上。

六月五日（水曜日）

早朝、首都パリをめざす新攻勢開始。

六月十日（月曜日）

朝刊を手に取るや、イタリーに關する記事はないかと、眼を皿のやうにして探す。イタリーの參戰いよ〳〵切迫――といふ情報が、昨夜おそく某方面からはいつたからである。

＊

晝、スペインのアボガド紙特派員Cを支那料理屋へ案內する。

この男は、五月十日獨軍が西部攻勢を開始した當日、外務省の新聞會見の席上僕を見つけるやいなや、「蘭領東印度に關して、何か情報がはいつたか？　日本は一體、蘭領東印度をどうするつもりか？」と疊みかけて熱心に聞いたものであつた。彼の考へ方によると、この絕好無二の機會に、日本が蘭領東印度をその支配下に收めないといふことは、およそ想像のできぬことであるらしい。彼は親日的である。それだけにまた、日本の態度は、まだるつこくて「見ちや居られない」らしい。このやうに、我々の考へ方とは性格的に違つてゐるから、彼に日本の眞正な立場を納得させるには、先づ根本的な點から說明して行かなければならない。支那料理の皿をユックリ重ねながら、

いろ〳〵な角度から懇切に說明して行くと、彼も、東亞新秩序の眞義などをかなり了解したらしい。

とにかく、こちらで蘭印問題に關心がもたれてゐることは、恐らく日本で想像する以上であらう。

＊

夕刻六時から、宣傳省の新聞定例會見に出席する。一通り質疑應答が終つた時、外務省の役人が立つて、「七時からリッベントロップ外相の緊急聲明があるから、すぐ外務省の聯邦會議室に集つていたゞきたい」と言ふ。またも電擊聲明だ。大急ぎでウィルヘルム通を橫切り、向側の外務省へ驅けつける。聯邦會議室にはいると、そこには、獨伊兩國の大國旗が壁にかけられ、擴聲機は旣に、ローマからの中繼放送を傳へてゐる。

イタリーの參戰！　やがて、ムッソリーニ首相のさびのある聲が、ローマ市民の熱狂せるどよめきを伴奏にして響いてくる。

白蘭進入、イタリー參戰……かくして、歷史の宿題が一つ一つ解かれて行く。あゝでもない、かうでもない——と、我々が迷ひ惱んだ課題を、「時」が自然に、無雜作に解決して行く。ホッとした感じと共に、淡い寂しさが胸をかすめるのは何故であらうか？

六月十四日（金曜日）

ゆうべは明方の三時まで飲んだ。

といふのは、かうだ。既に十一日、獨軍の先頭は首都パリの西北方二十粁、オアーズ河畔に到達してゐる。だから、十三日には、パリ市内に進入しないまでも、郊外位にはとつついてゐるはずである。一刻も早く、パリ入城の速報を手に入れたい。しかし、ニュース統制の完全に行はれてゐるこゝドイツでは、さういふ特種を得ることは、先づ不可能と言つてよいほど困難である。朝早くから、方々へ手を廻して打診してみたが、さつぱり判らない。そこで夜、支局の仕事を終へてから、クライスト通のジョッカイ・バーへ出かけた。宣傳省若手官吏の定例集合があるのを知つてゐるからだ。仲間に入れてもらつて一緒に飲みながら、いろ〳〵情報を交換してみたが、結局要領を得ずに終る。家に歸つてベットにはいつたのは四時。夜の短かいこの頃のベルリンのことゝて、もう東の空が白んでゐる。二時間ばかり眠つて、また支局へ出かける。

十數種の新聞雜誌に眼を通し、社說を讀み、觀測電を打ち、一息ついてゐるところに、例の雷鳴吹奏曲！　時計を見れば正十二時半。パリ入城を報ずる特別ニュースだ。

「今や、勝利に輝けるわが獨軍は、續々パリに入城しつゝあります」――アナウンサーの聲は甲高い。

ジャンヌ・ダークの奇蹟は、今度は、遂に現れなかつた。首都パリの失陷――今後フランス政府

がいかに抗戰を續けようとも、首都放棄が軍事的敗北を意味することに變りはない。獨軍の勝利は、ナチ政權の基礎を鞏固にし、ヒットラー總統に對する國民の崇敬と信頼を一段と高める作用をもつ。これまでナチスの政策を白眼視してゐた自由主義的なドイツ人までが、今日、用もないのに電話をかけてきて、「どうだ、ヒットラー總統の手並は！　いつもながら鮮かな切味だネ」と吹つかけてくるから、「君は一體いつからナチ黨員になつたのかネ？」とひやかしてやつた。

ポーランド作戰は終つたが西部戰線が膠著し、ドイツ國民が陰慘な冬を前にして憂欝な氣分に鎖されてゐた頃には、一部國民の政府に對する感情に多少不安の樣子も見えないでもなかつたやうである。そして、何れの國にも見るやうにインテリの間には、當局の施政、措置に對して相當に鋭い批評を試みたり、皮肉な諷刺をさへ口にするものもないではなかつた。しかし、今や東にポーランドを一擊の下に潰滅せしめ、更に西に轉じて白蘭兩國を席卷し、フランスの首都パリを攻略するに至りては、逞しい現實が、あらゆる懷疑と內政的不安を粉碎してしまつたのである。

「まづい物を食ひ、破れた靴下を履いてゐても、おれ達ドイツ人は、こんな實力をもつてゐるのだぞ」――道を步く誰も彼も、かう言ひたげな顏つきをしてゐる。

六月十七日（月曜日）

十五日には、ヴェルダンの全要塞が陥落した。十六日には、獨軍はロアール河を渡り、今曉、左翼の快足挺身部隊は、マヂノ線の背面を驅け拔けて、早くも、スイス國境に到達した。もうかうなれば、フランスは、軍事的には全面的敗北の運命に置かれたわけである。降伏するか、それともまた、どこか植民地に逃げてあくまで抗戰を叫ぶか――フランスは今、最後の關頭に立つてゐる。更に今朝、ペタン元帥を主班とする軍事內閣がレイノー內閣にとつて代つたといふ情報がはいつたが、この政策は、フランスの態度にどういふ變化を與へるであらうか？　これ等の觀測は、愼重を期さなければならぬ。そこで朝早くから、日本人會長、海軍武官、大使館參事官等の諸氏を歷訪して、その意見を叩いて廻る。フランスが、單獨休戰を申出た場合のドイツ側の條件、英國本土攻擊の具體的方法などが話題に上る。

＊

晝から、ヒットラー・ユーゲント本部に女子青年團「美と信念」部指導者アンネマリー・カスパーを訪問する。歲はまだ二十二三、ウイーン出身といふだけに、深く澄んだ明眸の物優しい娘さんである。それが五十以上の部員を指揮する人とは思はれない位だ。戰時における若い女性の任務といふやうなことについて、日本の例を擧げたりしながら、一時間以上も話しこむ。健康で快活、將來健全な母性となり得るやうに指導するのが、現在彼女の目ざしてゐる目標であると言ふ。ナチス

世界觀についても論じあふ。先頃會つたドイツ女子青年團最高指導者ユッタ・リュディガーも、またこのカスパーも、その他ナチス教育を受けた若い女性は、おしなべてナチス世界觀を確乎たる信念としてもつてゐる。

女子青年團では、智育と德育が少し疎かになつてゐるのではないかと思はれるほど體育に力を入れて、健康な母性をつくりあげることに努力してゐる。この點で、ドイツ民族將來の素質向上は、極めて明るい希望に照されてゐる。日本も、民族千年の大計を考へるならば、將來母性となるべき若い女性に對して、一層徹底した指導と敎育を與へるべきではなからうか。若い女性の浮薄な風潮は、次の世代をそこなひ、民族的發展の上に暗影を投ずること大なるものがあると言はなければならぬ。

*

歸途フリードリッヒ街を走つてゐると、また〳〵例の雷鳴吹奏曲が咆え出した。午後五時だ。すぐ車を停めて、最寄のラヂオ店の前に佇む。擴聲機から流れ出る聲は、ペタン佛首相が休戰を申出たこと、ヒットラー總統がムッソリーニ首相と會見することになつた旨を傳へる。アナウンサーは更に聲を張りあげて、「我々がこの歷史的瞬間を身をもつて體驗したことを、我々の子孫はきつと心から羨むことでありませう」と叫ぶ。

僕はこの時、實に意外な事件に出つくはした。僕のすぐ側に立つてゐる品の良い老婦人が、ハラハラと涙を流してゐるのだ。ドイツ人は一體、いつになつたら有頂天になつて喜ぶのだらう――と疑はれるほど、どんなニュースにも冷靜であるのを見慣れてゐる僕には、この老婦人の涙が、實に不思議なものに思はれた。或ひは、最愛の息子を戰場に失つたお母さんであるのだらうか？　或ひはまた、前大戰の屈辱を女心に刻みつけて忘れなかつたゝめでもあらうか？

それはどうでもいゝ。僕は、何とも言へぬ嚴肅な氣分に打たれた。アナウンサーが、「これから三分間、戰死者追悼の默禱に入ります」と告げた時、僕もまた、その老婦人の傍に直立したまゝ、靜かに瞑目して默禱に耽つた。

六月十八日（火曜日）

ヒットラー總統・ムッソリーニ首相のミュンヘン會談。

六月二十二日（土曜日）

コンピエーニュの森において、獨佛休戰條約調印。

六月二十四日（月曜日）

夕刻、宣傳省でフランスのニュース映畫を觀る。宣傳省の役人が、占領下のパリから持歸つた物である。

ドイツ兵捕虜收容の場面が出てくる。皆くやしさうな顏つきをして居り、上衣に白ペンキで番號を打たれる時にも、いま〳〵しさうに、上衣を係員の前に突き出してゐる。それから收容所へ向ふ時には、分列式の時のやうに整然と行進してゐる。不敵の面魂だ。

これを觀て、僕は非常におもしろく思つた。ドイツのニュース映畫に出てくる聯合軍捕虜は、皆朗かな面持で、ダラ〳〵と行動してゐる。兩者を比較してみる時、人は、今次大戰の歸趨の決して偶然でないことを知るであらう。兵隊の心構へと戰鬪精神が、初めから全然違つてゐるのだ。これでは、勝敗の數は初から明らかである。我々は、ドイツ大勝の原因を檢討する時、いはゆる「新兵器」の穿鑿などに餘りとらはれないやう、充分注意しなければならない。獨軍機械力の優越、これは絕對に見逃し得ない要點であるが、同時にまた、聯合軍が餘りにも弱かつたといふ事實を忘れてはならないであらう。

＊

獨佛休戰條約第二十三條には、佛伊休戰條約の調印成立がドイツ政府に通告された時から六時間

後に、休戰が實行される旨規定されてゐる。そして、既に昨夕から、ローマ近郊で佛伊休戰交渉が行はれてゐるから、今晩あたりは警戒を要する。支局のデスクを離れずに待機してゐる。

はたせるかな、午後十時に雷鳴吹奏曲が鳴り響く。佛伊休戰條約が今夕七時十五分に調印され、その通告が七時三十五分にドイツ政府の許にはいつたから、いよ〱明二十五日午前一時三十五分をもつて、西部戰線における軍事行動が一切停止される――といふのである。莊重に湧き起るドイツ國歌「ドイッチラント・ユーベル・アッレス」……。遂に、西部戰場の嵐は鎭まつたのである。殘るは、海峽を挾んで英獨の死鬪のみだ。

至急報を打ち終へたところへ、電話のベルの音。ヒットラー青年團幹部のJが聲をはずませながら、「今夜君の仕事が終つたら、ひとつ一緒に祝杯を擧げたい」と言ふ。

「よろしい。若い者同志で乾杯しよう！」と、僕は答へて電話を切つた。（昭和一五、六、二五）

バルカン戰線從軍記

一　一番乘をいそいで！

奥行の深い青空に、無雜作にちぎつた白雲が浮んでゐる。

四月三十日午後三時、ベルリン西北郊シェターケン軍用飛行場では、三發ユンカース五二NETJが、快調な爆音を轟かせながら出發を待つてゐる。私は今、獨軍司令部特別仕立の飛行機に搭乘し、アテネ入城一番乘をめざして旅立たうとしてゐるのだ。轟々たる爆音は、私に快い興奮を與へる。それは、新聞記者として一番乘を狙ふ功名心だけからではない。人類文化のふるさとへ乘りこむといふ、まだ見知らぬ故郷への憧憬である。聖地を巡禮する旅人の懷ひである。

アテネ――その名は、私の耳に懷かしい響をもつてゐる。ペリクレスやデモステネスの事跡を興味深く學んだのは、中學校の歷史の時間であつた。ソークラテス、プラトーン、アリストテレース

を繙いたのは、向ヶ岡の寄宿寮であつた。そしてそれは、私の魂の成長史と別物ではない。ホーマーの英雄詩を讀みながら、私は、いつかは必ずギリシァを、その首都アテネを訪れたいと念願したことであつた。それがはからずも、今、ドイツ電擊軍のあとを追つて入城を急ぐことゝなつたのである。私は、豫期しなかつた運命のめぐりあはせに驚きもし、また、喜びもしたのである。

午後三時十分、ユンカース輸送機はその巨體を空中に浮ばせた。舵の方向は東南、一路ウィーンへ！　左手には、春光を浴びて鈍く光るハーフェル河を隔てゝ、ベルリンの市街がほの霞んで見える。右手には、ナウエンの無電塔が神經質な姿をピリ〳〵させてゐる。雲がだいぶ出てきたらしく、機翼が光つては曇り、曇つてはまた光る。私は手帳をとり出して、

　　南へとはゞたく翼春の雲

と、俳句風に最初のメモを書きいれた。

風も出てきたらしい。さうたうに揺れる。バルカンの風雲急なり——といふ感じだ。

ドレースデンの上空を、千米の高度で過ぎる。美しい古都。エルベの帶は、もう春模様だ。

手のすいた電信士（下士官）が操縦室から出て來て私の横に腰かける。胸に鐵十字章をつけてゐるので、どこで殊勳をたてたのかと聞くと、昨年西部戰線のパリ爆擊に參加したのだといふ。

「六月三日の午後でした。私の乘つてゐた長距離爆擊機ハィンケル一一一がパリ郊外の軍需工場

を爆撃しての歸途、五十粁ばかり來た時に、突然フランスの戰鬪機十數臺にとりかこまれてしまつたのです。必死になつて應戰しましたが、なにしろ多勢に無勢、したゝか機銃彈を打ちこまれて、私は右肩に重傷を負ひました。見れば、操縦士も血達磨になつてやうやく舵をあやつつてゐるやうな始末——もう、いよいよ最後だと觀念した時、味方の驅逐機メッサーシュミット一一〇が數機あらはれて、敵機を追つぱらつてくれたのです。私は重傷のため半ば喪心狀態に陷つてゐましたが、瀕死の操縦士とバランスを失つた機とが氣にかゝつて、はたして基地ま



著者が飛んだ空路を示す圖

で歸りつくことができるかどうかと、操縦士の手もとを一心に見守つてゐました。操縦士は蒼白な顏をして、必死の操舵を續けてゐる。機體は右に、左に、上に、下に、大きく搖れながら、よろめくやうにして空中を泳いで行きます。やつとのことで、基地までたどりつきました。

あとで聞いた話ですが、地上勤務員たちもフラ〳〵に醉拂つたやうな飛行機が歸つて來たので、いつたいどうなることかと思つて、固唾を呑んでその着陸を見守つてゐたさうです。しかし、無事に着陸してプロペラーが止つたので、一齊に歡呼の聲をあげて操縦席にはしりこみました。そして喜びの握手の手をさし出した時……」

こゝまで一氣に語り續けた電信士は、一瞬言葉を切つて苦しさうに息を呑んだ――

「あゝ、その時、彼はもうこと切れてゐたのです。義務を完全に果して！……」

このやうに數奇な戰歴の持主とは思へないほど溫和な顏をした電信士の眼も、その時異樣に銳く光つて、やがて淚が一ぱいにたまつた。私もまた、溢れ出る淚を拭はうともしなかつた。

「私は、幸ひ傷もなほり、かうして生きながらへることができたのです。そして、後方勤務でゆつくり靜養してゐるやうなわけですよ。」

彼は、低くつぶやいた。

プラーグの上空を通過してゐる頃だが、下は一面の密雲におほはれて、視野が全くきかない。高

度計は、二千五百の數字を指してゐる。

私たちは、さらに生と死の問題について語りあつた。軍人精神を論じた。そして私が、

「我々は、大きな全體の中の個として、いつでも全體のために生命を投げ出す覺悟がなければならない。その場合、死は聖く美しい。」

と言つた時、彼は信念に充ちた態度で言ひ放つた――

「けれども、生きるといふことは、どうしても生きぬくといふことは、モット價値の多いモット美しいことですヨ！」

これは確かに、彼のあまりにも深刻な體驗からうまれ出た生の叫びであらう。しかし私は、日本の兵隊ならまたおのづから別の言葉があるだらうと考へた。こちらの軍人は、將校たると兵卒たるとを問はず、平氣ですぐに、「死にたくない」とか、「生きながらへたい」とかいふ言葉を口にする。したがつて、捕虜に對する觀念も、日本とは全然ちがつてゐる。歐洲人に言はせると、日本人の捕虜に對する觀念は、どうも理解がゆかぬといふ。日本軍人の美談を話すつもりで、かへつて逆の効果を生じることとすらある。それなら、このやうな生死觀をもつ彼等が戰爭に弱いかといふと、決してさうではない。ドイツ軍人がその範例である。要するに、人生觀、生命觀の根本的な差異から來る問題であらう。

とまれ、この「生きぬくといふことは、モット美しいことだ」といふ言葉には、犯し難い眞實の響があつた。私は、反駁も批評もせず、たゞこの言葉を、口の中でくりかへしくりかへし味つてみた。

春眠といふのか、うと〳〵眠くなる。懷中から仁丹を出して嚙んだり、膝をつねつたりいろ〳〵と工夫をこらしてみるけれども、どうにもならない眠氣がのしかゝつてくる。思へば、この二ケ月ばかり、ほとんど滿足な睡眠をとつてゐないのだ。松岡外相の來獨、その松岡外相がベルリンを離れた翌日には、待つてゐましたとばかりにバルカン戰爭の勃發――平均毎日四五時間しか眠つてゐない。一生一代の働き時だと思つて緊張してゐるものの、さすがに仕事の合間には疲れが浪れ出てくるものとみえる。

何分ぐらゐ假睡したものであらうか？　氣がついてみれば、もう第一着陸地ウィーンの近くに來てゐるらしく、行手遙かに、ドナウ河が鈍く光つて見える。「美しき青きドナウ」だ。まだ冬の名殘を感じるベルリン附近とはちがつて、この邊はもう全くの春景色、燃え出る若芽の匂ひがムンムンと千米の上空までたち昇つてくるやうな感じだ。そのみづ〳〵しいむせるやうな新綠に混つて、白や赤の花が咲きこほれてゐるのが見える。

ウィーンの街が眼下にひろがつてくる。その眞中に、針のやうにそゝり立つサン・シュテファン

教會――いつもながら印象的な姿だ。

午後六時十分、市東北方のアスペルン空港に着陸、グランドホテルにおちつく。

夕食後ぶらりと散歩に出ると、なまぬるい風が肌に觸れる。ウィーンは、私にとつては四度目であるが、いつ來てみても、この土地のものやはらかい雰圍氣には心をひかれる。この町には、ヨハン・シュトラウスの血がまだかよつてゐる。

アテネ入城を明日に控へてゐるので、自重して、寄席を一つ覗いたゞけでホテルへ歸つた。ベッドにはいるなり、熟睡の虜になる。

二 ベルグラード爆撃の跡

五月一日(木曜日)

午前九時五分、アスペルン空港を離陸、東南方――ベルグラードの方向へ舵をとる。ふだんなら、美しいウィーンを去るのには強い別離の情が動くのであるが、夕刻には目指すアテネに一番乘ができるといふ今、いさゝかの感傷もない。むしろ、心は先へ! 先へ! といそぐ。

ドナウ河が後方に見えなくなる頃から、前方の瓢箪形のノィジートラート湖が見えてくる。大きな溜水だ。その中ほどから先は、もうハンガリー領である。この一帶は萬年洪水地帶で、いたると

ころ満々たる水が溢れてゐる。

ベコニー森を越え、ブラッテン湖を過ぎて飛ぶことしばらく、十時半頃、左手からドナウ河が這ひよつてくる。さきほど私たちに別れたドナウは、東流してブダペストの岸を洗ひ、さらに南走してこゝに姿をあらはしたのである。

ドナウ河を越えて、舊ユーゴースラヴィア領にはいる。いよ〳〵戰地に近づいて來たのだ。緊張する。

こゝにも見る洪水地帶。クラ、ノィザッツなどの水郷が潮來のやうな美しい景色をくりひろげてゐる。その先は一望千里の平原、區劃正しい田畑の色あひが、芝居の引幕そつくりである。その中を走る道路の上を、ハンガリー軍が行進して行く。大部分は機甲部隊である。失地回復の軍を進める彼等に、機上から敬意を表する。

ドナウ、タイス兩河の合流地點あたりから飛行機は幾曲折するドナウ河に沿つて進む。ベルグラードはすでに近い。數條の道路が南へ向つてはしつてゐる。この道を、フォン・ワイヒス將軍麾下の獨軍機械化部隊が、疾風怒濤のごとく驀進して行つたのだ。今もなほ濛々たる砂煙がたつてゐるやうな氣がする。

飛行機が下降し始める。遙か前方に、二つの大きな河が合流してゐるのが見える。あれが、ドナ

ウとサーヴェの合流點であらう。その兩河に圍まれてゐるあたりに、夥しい人家の群が、だん〳〵とハッキリ視野の中へ浮びあがつてくる。ベルグラードだ！　午前十一時半。

私は座席から立ちあがり、コンタックスを兩手に固く摑んで、何物をも見逃すまいと身構へる。飛行機はグン〳〵下降して、三百米の高度まで降りる。大きく旋回を始める。

先づ眼にはいつたのは、ベルグラード市北方、ドナウ河にかゝつた鐵橋が、中ほどで無殘に爆破されて、水の中へ崩れ落ちてゐることだ。その殘骸の周りには、河水が白く、儚なく泡立つてゐる。さらに見わたせば、西方サーヴェ河にかけられた鐵橋も爆破の犧牲になつてゐる。

王宮、陸軍省その他の官廳街、軍需工場地帶などを含む河寄りの一劃は、獨空軍の集中爆撃を受けたらしく、完全に叩きのめされてゐる。燒けおちた家屋の外廓だけが、無氣味にニョキ〳〵突き立つてゐる。廢墟だ！

最もひどくやられてゐるのは、中央停車場である。ひんまがつた線路、半分ふつとんでゐる機關車。プラットフォームは無疵に殘つてゐるのに、そのすぐ隣の車庫が叺つぶしに破壞されてゐるのを指さして、

「ホラ、ごらんなさい！　プラットフォームは全然手がつけてないでせう。すぐわが軍が利用しなければならないからですよ。しかも、その側の車庫が完全に叩きつぶしてあるのは、これこそ、

急降下爆撃機の威力ですヨ。」

と、隣の電信士が耳うちする。まつたく、驚嘆すべき命中率である。しかも、一般市民の住宅區域はほとんど被害をかうむつてゐないから、獨空軍の爆撃技術は高く評價されなければならない。

　飛行機は、數度の旋回を終へて、東南方ソフィアの方向へ向ふ。私は、遠ざかり行くベルグラードの廢墟を眺めながら、こんなことを考へた――

「ユーゴースラヴィアはまたなんと愚かなことをしでかしたものであらう。自己の國力を考へず全く無益な騒ぎをひき起したものといふほかはない。この戰爭の發端をなしたのは、三月二十七日早曉のクーデターであり、その中心はユーゴー空軍の青年將校たちであつた。しかし、獨空軍當局の話によると、そのユーゴー空軍自體の抵抗力がすでに極めて微弱であつたといふ。充分な實力をもたずに血氣の勇に逸つて戰爭をおつぱじめたユーゴー軍部の責任もさることながら、それにひつぱられて理性を失つたセルビア人もまた、罪を免れることはできまい。殊に、三國條約加盟の條件として、ユーゴースラヴィアはその主權及び領土不可侵を獨伊兩國より確約され、「軍隊は進駐せず」との一札をとつてゐるのであるから、なにもさう血相變へていきり立つまでのことはなかつたのではなからうか？　短氣を起したばつかりに、元も子もなくしてしまふやうな始末になつたのである。しかしながらまた、さう〳〵理知の方式で解決できないところに、民族感情の魔力があり、國際關

係の迷路が横たはつてゐるとも言へよう。ユーゴースラヴィアの崩壊は、支那抗日焦土化と共に、いたましい民族悲劇と言はねばならない。」

三　ソフィアの横顔

ベルグラードから先は、丘陵地帶、山岳地帶といふやうに、だん／＼土地がその皺を深くしていつてゐる。この邊は、ブルガリアからなだれこんだフォン・クライスト將軍麾下の快足部隊が一路西進、ユーゴー・ギリシァ兩軍の間に太い楔を打ちこんで、「ヒットラー戰法」の眞面目を發揮した作戰地域である。濃い綠におほはれた山と谷の間を縫つて、白い絹糸のやうな道路が幾すぢもはしつてゐる。この白糸も、今度の戰爭では、すくなからず鮮血に赤く塗られたことであらう。

いよ／＼、ブルガリア國境にかゝる。二千米臺のベルカン山脈が、白雪をいたゞいて聳え立つてゐる。殊にミジョール山（標高二、一八八米）は、どこか榛名を思はす山容で美しい。

この山並がだら／＼と平原へ下つていつたところに、首都ソフィアが横たはつてゐる。低空に舞ひおりた飛行機から眺めると、獨特の黑い服裝をした百姓女が田畑で働いてゐるのが見える。ブルガリアに來た——といふ感が深い。

午後一時五分、ソフィア西方の軍用飛行場に着陸。まる四時間の飛行だ。

獨空軍が共同使用してゐるとみえて、ドイツ機が多數並んで居り、ドイツ航空兵の姿も數多く見られる。ドイツ機に比べるとまるで玩具のやうなブルガリア機が、遠慮したやうに隅つこに置かれてゐる。ドイツから古い型を買つたものらしい。

ブルガリア兵は、顔付も服装も赤軍の兵隊そつくりで、すぐにスラヴ系人種であることが判る。ドイツ兵に對しては畏敬して頭が上らないらしく、どつちが大家さんだか店子だか判らないやうなかつかうだ。私に對しても至つて親切で、私が寫眞機をとり出して、この軍用飛行場をパチ／＼寫しまはつても、誰一人文句を言ふ者がない。

酒保にはいる。おいしさうな煙草やチヨコレートが一ぱい並んでゐる。ドイツで生活してゐる者にとつて、先づ眼につくのはかういふ品物だ。買ひたい。しかし私の懐中には、何しろ出發があまり急だつたので、ドイツ貨のマルクしかはいつてゐない。「マルクが全歐洲を支配すべし」といふ、まるで、フンク經濟相でもいだきさうな雄大な幻想(ヴイジヨン)を起して、マルクで賣つてくれと交渉したが、ブルガリアも獨立國、なか／＼ウンと言はない。レヴァでなければいけないと言ふ。ところが、この通商交渉の途中に、相手がどういふ心境の變化を起したものか、紙幣はいやだが、硬貨なら受取つてもいゝといふ。飛びたつ思ひで、財布から五マルク銀貨をつまみ出して、チヨコレートと取換へる。しかし、あとでよく／＼考へてみると、チヨコレート數片が五マルクとは、またあまりに

も高くつく。

チェッ、僕も飢ゑてるナ！

と、私は、自分ながらチョットあさましくなつて舌打した。

この飛行場ではガソリンの補給ができないといふので、ソフィア郊外のもう一つの飛行場へ行くことになり、ソフィア上空を横切つて飛ぶ。見わたすところ、特別に目立つ建物も尠く、何の變哲もない平凡な都市であるが、たゞ、屋根瓦がほとんど全部赤瓦であるのがまとまりがあつて美しい。

十分ばかりで他の飛行場に到着。給油時間を利用して市内へ食事に出かけようといふことになつたが、あひにく自動車が全部ふさがつてゐて一臺もない。三十分ばかり待つたあげく、たうとう赤十字のトラックで運ばれることになる。何の因果で荷物同然の取扱ひを受けるのかなと思つたが、しかたがない。きたなくてガソリン臭いトラックに乘りこむ。しかも、道路がおそろしく惡いときてゐるからたまらない。振りおとされないやうに、圍ひの板にしがみついてゐる圖は、われながらあまりいゝかつかうではない。かうしてドイツ航空兵や日本人やがごつたにトラックに積みこまれて運ばれてゐるさまは、どうよく見ても、まづ捕虜としか見えないのであらう。通行人がみんなジロジロ見ることおびたゞしい。こつちはこつちで、初めてのソフィア訪問なので、珍しくて通行人をジロジロ眺める。

これぢア、どつちが見物だか判らないナ！　と、私は思はず苦笑した。

私は、ブルガリアに對して、その首都ソフィアに對して、さうたうの期待をもつてゐた。かねて、ブルガリア國民の教育程度が比較的高いことを聞き、また、ベルリンでつきあふブルガリア新聞記者のレヴェルがそれを裏書するやうに感じてゐた私は、ソフィアに着くなり、その期待が裏切られたのを直觀して失望した。いくら郊外とはいへ、家屋はきたないし、道路は粗悪である。子供は、はだしで歩いてゐる。まづ、どうしても三流國としか見えない。これでは、三國條約に加盟して軍隊を進駐させられても、當然の成行だといふ氣がする。その國力を考へてみる時、加盟當時國內にさうたう強い異論があつたことなぞむしろをかしい位である。獨軍の進駐を拒むことは、全く不可能であつたと言へよう。

それにしても、またなんとドイツ兵の多いことか！　紅顏の兵隊、おつさんの兵隊、陸軍の兵隊、空軍の兵隊、さては海軍の兵隊にいたるまで、ドイツの兵隊が街に氾濫してゐる。映畫館の表看板を見ると、「お好み音樂會 Wunschkonzert」「ユダヤ人ジュース Jude Süss」といふやうな、ドイツではやつた映畫がいたるところで上映されてゐる。私は、こゝソフィアに、バルカンへヒタ〳〵と押しよせるドイツ南進の波を、はつきりと感じたのである。

トラックにしがみついたかつかうで、少々ばつが悪かつたが、王宮の前を敬意を表しながら通る。

小ぢんまりした黄色の建物である。ホテル・ブルガリアといふ當市第一のホテルの前でトラックをすてる。人口三十萬の都市にまづ相應のホテル。「捕虜」の一團がドヤ〳〵ときたないトラックから降りて來たので、ボーターがめんくらつて出迎へる。あひにく肉なし日にぶつつかつたが、ドイツでは食べられないほんもののオムレツや、ブルガリア特產の赤葡萄酒などに味覺を滿足させて、いそいでもとの飛行場へ引返す。目的地アテネへのみちをいそがなければならないからだ。

午後四時四十分、ソフィア飛行場離陸――サロニカを經てアテネへと向ふ最終コースに飛びたつ。刻々に小さくなつて行く赤瓦のソフィア市街を見やりながら、

僕はいつたい何だらう？

と考へた。

或る獨立國の首府に、一人の外國人が、空から軍用機で舞ひ降りて來る。彼は旅券をもつてゐない。いはんや入國の查證をや。その國の貨幣も所有してゐない。そのくせ、勝手に方々をほつゝき廻り、飲み食ひ、おまけに買物までする。そして、稅關の門もくゞらずにまた空へ舞ひ上つて行く。いつたい、これは何だらうか？　これがドイツ軍人なら、話は判る。ドイツ人のジャーナリストでも、筋は立つ。從軍記者として、當然ドイツ軍屬の資格を認められるからだ。しかし、ドイツ軍人でも何でもない他國の新聞記者が、このやうにふるまへるのはなぜだらうか？　おそらくドイツ軍

所屬の從軍記者とみなされて、この認定のもとに、ドイツ軍人と同樣の特別待遇が與へられるのであらう――と、私は自分勝手に解釋して、良心の苛責を免れた。

四　メタクサス線――サロニカ

飛行機は、スッルマ溪谷に沿つて南進する。獨軍進擊のコースだ。

希勃兩國々境を東西に走る標高二千米のロドペ山脈、それを鋭利な剃刀で南北にサッと切つたのが、スッルマ溪谷である。上空から見ても、その險峻なのがハッキリと判る。その中を、一すぢの細い道路が、拗ねたやうに曲折しながら通じてゐる、まさに天險だ。

この溪谷から進入して來る敵軍を迎へて、これに鐵の一擊を加へようといふのが、ギリシア側國境の要塞メタクサス線である。その强固なことマヂノ線以上といはれ、さすが精强のドイツ山岳部隊も、三日三晚攻めあぐんだ鐵壁である。

私は眼を見張り、瞳を据ゑて、この要塞線の片影でも認めたいと努力したが、空中から素人にでも見つけられるやうな、そんな間の拔けたものであらうはずがなく、殘念ながら、全然認めることができなかつた。たゞ、ドイツ軍の後續部隊であらう、長さ數粁にわたる機械化部隊の隊列が、南へ！　南へ！　と進んで行くのが見えた。

南へ行くに從ひ、山容から險しさがだん〳〵失はれて、雲のやうにもく〳〵した山塊の連なりに變化して行く。その合間々々に、大きな湖水がいくつも、鈍く物憂氣に光つてゐる。この邊の田畑は、眞四角に區切つてあつて、ハンガリー方面のそれが長方形なのと、おもしろい對照をなしてゐる。こんなことが判るのは、飛行旅行の賜物であらう。

今朝からの晴空は、いよ〳〵その澄明さを增してくる。地上の丘陵も、華手な春衣裳をまとつてゐる。その丘陵の重なりの果に、青磁色の水平線が遠く、長く、見える。

サロニカ灣だ！

と叫んで、私は眼を凝らした。サロニカ港はすでに近い。

サロニカは、今次戰爭における、ドイツ軍の第一戰略目標であつた。したがつて、獨軍第一期作戰の主力はサロニカ占領に注がれ、四月九日、ヴァルダル溪谷より南下した戰車部隊のサロニカ突入により、マケドニア戰線の大勢はこゝに決したのであつた。このやうに重要な戰略價値をもつサロニカだけに、私の興味と關心は特に深かつた。

午後五時五十五分、サロニカ上空に到達、飛行機は三百米まで高度を下げて大きく旋回を始める。だら〳〵とゆるやかに傾斜した典型的な港町。お揃ひの赤瓦が、紺靑の海に映えて美しい。市街そのものは、たいした被害を受けてゐないが、海岸近くを通つてゐる鐵道線路は要所々々を正確に

爆撃されてゐる。港内では撃沈された英國輸送船や破壊された水上飛行機が、その殘骸の一部を海面上にあらはしてゐる。その數はさうたうに多い。なま〳〵しい戰爭のにほひがする。

五　オリンプスの神々

サロニカから先は、エーゲ海の上を飛んでアテネへ一直線に向ふコースを選ぶ。

高度千米――

空は、穹窿の果まで惜みなく澄みわたり、海は、それを映して青水晶のやうに美しい。儚いまでに透きとほつた海の表面には、微粒のやうな波がふるへてゐる。その微粒は、斜光を受けて、金に光り、銀に光る。

やがて、右手に、白雪の冠をいたゞく巨人のやうな山塊があらはれてくる。オリンプス山だ。海拔二千九百十八米のこの山は、聖く崇く、雲の上に聳えて、いかにも神話に出てきさうな山容である。をりからの夕陽を受けて、山腹の雲は金色に輝き、今にも、ゼウス初めオリンプスの十二神が現れて來さうである。

私は、中學時代に愛讀したギリシァ神話を懷しく思ひ出した。少年の空想に翼を與へたギリシァ神話の數々は、十數年の後、またもや私に、遠い昔への夢を追はせてくれるのだ。

スキアトス島の上空を通過する頃から、いろ〳〵な島影が視界にはいつて來る。見わたせば、無數の島嶼が海上に浮んでゐる。なるほど、看板に僞りはなく「多島海」だナ――と思ふ。僅か二十日前には、このあたりを、英國艦船が自由自在に動き廻つてゐたのに、今はもう、その影だに見ることができない。情勢の早い變化には、いまさらのやうに驚かされる。

この右手の陸地のあたりには、ラリッサ、ヴォロス、などといふ、獨・英・希軍の激戰地があるはずだが、飛行機はぐん〳〵先をいそいで、早くもエウボイア島上空にさしかゝる。

この島は、今回、「ヒットラー戰法」の新機軸――判官もどきの八艘飛びが行はれたところである。四月十九日、獨軍機甲部隊が、オリンプスの天險を拔いてテッサリアの平原に雪崩れこみ、立直る隙も與へずラリッサ、ヴォロス、ラミア等の要害を拔いて、テルモピレーの古戰場へひた押しに進んだ時には、ドイツ軍の進擊路は、當然テーベへ向ふ本街道を取るものと信ぜられた。ところが、あくまで人の意表に出る「ヒットラー戰法」は、こゝでもまた奇手を案出、一部隊をして、突如、エウボイア島に渡らせて敵の虛を衝いたのである。同部隊は、エウボイア島を一氣に南へ驅け拔けて、今度はまた、アッといふ間に、再びヒラリと本土へ飛び移り、電光石火、背後から戰略據點テーベ（アテネ西北方五十粁）を占領してしまつた。これで、首都アテネの運命はきまつたのである。

六　深夜のアテネ入城

夕闇が刻々に迫つて來た。

殘光が、はかなく暮れ殘つた空に漂つてゐる。南歐らしい、夢のやうな薄暮だ。

七時三十分、大きな飛行場の上空に達する。旋囘する飛行機の上から見おろすと、幾重にも掘りめぐらした塹壕や、數多くの破壞された飛行機が見える。飛行場の周圍には、野營のテントが、無數に、規則正しく並んでゐる。

これが、アテネ市北方二十五粁にあるタトイ軍用飛行場なのだ。着陸。

スーツケース一箇をさげて飛行機から降りた私は、これが「神々の國」に印する第一歩だと思つて、力強く大地を踏みしめた。見上げれば、ほんのりと明るい空には半弦の月がかゝつて、それを横切る時鳥のやうに、メッサーシュミット機が、ヒューン〱と空を掠めて行く。

私の神經は、極度に緊張してゐる。附添の宣傳省付將校が自動車の交渉に出かけた間の時間も、むだに使ふまいと思つて、一人のドイツ航空兵と一緒に、場內を視察して廻る。こゝの草叢、そこの草叢に、十五瓩級の爆彈が無數にころがつてゐる。みんな音響發生裝置をつけてゐる。

「爆彈が落下する途中で、この音響發生裝置が物凄く薄氣味惡い唸りを發するのですが、この唸

りだけで、たいていの者は神經をまゐらされてしまひますョ。」

と、航空兵が說明する。

飛行場の西側には、巨大な格納庫が十棟ばかり並んでゐるが、これ等の格納庫には、掠り傷一つついてゐない。ところが、その前方に置かれてゐる英希兩軍の飛行機は、一つ殘らず虱潰しに擊碎されてゐる。「なぜ、ついでに格納庫も爆擊しなかつたのだらうか？」と私は航空兵に尋ねてみた。この質問を受けて、

「ヘヤ・ドクトル！　これこそ、わが急降下爆擊機獨特の腕前ですョ！」

と、かれ航空兵、すこぶる得意である。

「格納庫は、わが軍が次の作戰にすぐ使はなければならないでせう。いはゞ大事な財産ですよ。だから、飛行場爆擊の際には、手をつけずにソーッとして置くのです。そのかはり、格納庫から五十米も離れてはゐない地上飛行機は、かたつぱしから容赦なく叩き潰してしまつてありませう。然り、これをわが急降下爆擊機の威力と言はずして、ソモ何と申すべきでありませうか！」

航空兵先生、しまひには演說口調である。

別に彼の熱辯に魅了されてしまつたわけではないが、これには心から感心した。ベルグラードの場合もさうであつたが、全く鮮かな爆擊の技術である。かうなると、一つの「藝術」とさへ呼べる

であらう。

昨年の白蘭佛作戰の時は、格納庫もなにもいつしよくたに爆碎し盡されてゐた。それから一年後、その體驗をよく研究したドイツ空軍は、「今度は、格納庫には手を觸れない」といふ方針を採用した。一つの、大きな進歩である。もちろん、今回は、敵空軍の抵抗や地上防空砲火が前回よりも微弱で、餘裕綽々と爆擊を敢行できた——といふことはあらう。けれども、ドイツ空軍の爆擊技術が、この一年間に著しい進歩を遂げたといふことは、まさに、爭へない事實である。絕えざる研究と進歩——こゝに、ドイツ軍の强さを說明する鍵が祕められてゐよう。

自動車の交渉に行つた將校が歸つて來ての話に、アテネ市との電信電話線を英國軍が退却する際切斷して行つたため、アテネ市との連絡が非常に惡く、いつ自動車が調達できるか判らないといふ。心細い話だ。

しかし、私をガッカリさせたのは、自動車の問題よりも、電信電話の不通である。僅か途中二十五粁の、こゝとアテネ市の間に於いてさへこんな狀態なのだから、ベルリンとの電話連絡など、まづ、問題にならないと見なければならない。私がベルリン出發の時から持ちつゞけて來た一縷の望は、入城第一電をベルリン支局に電話で送るといふことであつた。そのために、支局の同僚は、わざわざ勤務時間を延ばしてまで、私の呼出しを待つてゐてくれてゐるはずだ。しかし、もしそれがだ

めだとすると、あとに殘る方法――軍の飛行便託送などは、あまりにも遲く、かつ不確實である。せつかく、私自身がアテネに一番乘をしても、送信の方法がなければ、新聞特派員としての任務は果せない。いつたい、どうしたらよいだらうか？　私の心は、深い地底へめりこんで行くのみであつた。

あたりは、もう眞暗である。その暗いなかで、私の足もとにまつはりつくものがある。よく見れば、一匹の小犬である。鼻を悲しげにクン〳〵鳴らしてゐる。今頃こんなところにうろついてゐるのは、きつと宿無し犬であらう。この犬の主人は、今度の戰爭で戰死したのであらうか？　捕虜になつたのであらうか？　それともまた、どこかへ逃げてしまつたものであらうか？　――私は、戰爭の悲劇を、身近にひし〳〵と感ぜずには居られなかつた。

こゝまで來て居りながら、眼と鼻の距離のアテネ市内にはいれないとは！　私は、齒をくひしばつて、アテネ市街の方角を眺めやつた。平時なら、仄かに空に映る街のあかりが見えるのであらうが、現在は燈火管制が嚴重に施行されてゐるのであらう、萬物が黑一色の中に沈澱して、街のありかを知るよすがは何一つない。たゞ、仰ぐ空には、深く鏤められた無數の星が、二千五百年、古代ギリシア當時の影を宿して光つてゐる。古代の神祕と數々の神話とを物語つてくれさうである。

闇にすかして時計を見ると、針は八時を指してゐる。日本との時差七時間、東京は今、午前三時

である。今もしベルリンへ第一電が送れゝば、支局でタイプを叩く時間三十分、ベルリン、東京間二時間乃至三時間とみて、いくら遅くとも朝の七時には本社のデスクに屆くはずだ。たとひあと五時間遲くなつても、同報電話さへ使へば、夕刊に間に合はせることができよう。あァ、どうにかして、一刻も早くアテネ市內にはいりたい。さうして、なんとかてつとり早い方法で送信できないものだらうか？

本社の編輯室の、殺氣立つた光景が眼の前に浮んでくる。「同報ッ！」と叫ぶ聲。その原稿を摑んで驅け出す給仕の顏……。

十分、二十分、三十分……時間は遠慮なくたつて行く。私は、今日のこの日まで、「秒」といふ時間の最小單位を、これほど長く感じたことはない。ふだんは聞いたこともない、懷中時計の秒を刻む音が、今日は、ハッキリとカチ〳〵耳朶に傳つてくるのである。しかもその幽かな音が、またなんと意地惡く神經を苛立たせることか！　それは、執拗な惡魔の跫音に聞える。

時たま、遠くの道に自動車のヘッドライトが閃めくので、もしや迎への車かと思つて、胸をときめかすが、そのまゝ違つた方向に、尾をひく人魂のやうに消えてしまふ。期待しただけに、裏切られた失望は大きい。

三十分……一時間……

私の心は、次第にいら〳〵してくる。あせるまいとは思ひながらもあせつてくる。何者に對するともしれない憤怒が、荒れ狂ふ炎のごとく、ムラ〳〵と胸中に燃えひろがつてくる。私はジッとしてゐるのに堪へられなくなつて、そこいらにころがつてゐる石ころを靴先で蹴りながら、あちこち歩きまはつた。さうかうするうちに、私はふと、よく舞臺の上で俳優が焦躁の氣持を表現するのに、石を蹴るしぐさを使ふのを思ひ出した。ヘヘア、僕もやつてるナ——かう考へると同時に、私は自分の現にやつてゐることを客觀的に反省できるやうなら、すこしは心にゆとりがあるのだなと氣がついた。さう氣がつくと、氣持がだん〳〵落着いてきて、私は、いくらあせつたつてなるやうにしかならないのだから、ひとつしぶとく腰を据ゑて待つてやれ——といふ心境に變つていつた。「諦めましたヨ、どう諦めた、諦められぬと諦めた」などと、口ずさんでみたりした。

なまあたゝかい南歐の春宵にも、地を這ふやうな冷氣がしのびこんできた。私は、冷えて風邪をひくといけないから、飛行機の中にはいつて待つことにする。今夜はもう望みないにしても、とにかく電文だけは書いておかうと思つて、懷中電燈の光をたよりに、一生懸命、入城記の前書をしためる。書き終へて時計を見ると、すでに九時半。

あたりは、全く靜かである。なにか聞えないかと耳を澄ましても、微かな物音一つ聞えない。萬物みな死したる靜けさである。これが、戰地の夜であらうか？——私は疑つた。私はメモを取出し

て、今にも消えてしまひさうな懷中電燈の薄光で、次のやうに書入れた。

靜かである。たゞ靜かである。この向ふで血腥い戰爭が行はれてゐようなどとは、想像だにできない靜謐な宵である。

この深々とした靜けさは、私の聯想を、鎌倉の圓覺寺へもつていつた。私が學生時代よく籠りに行つた佛日庵は、圓覺寺の境内でも特に奥まつた靜かなところにあつた。私は今佛日庵の一室に坐つてゐるやうな氣がした。大悲神呪の讀經が聞え、木魚の音が聞え、老師の一喝が響いてくるやうな氣がした。……私は靜かに眼を閉ぢて、安らかな瞑想に耽つた。

何十分たつたものであらうか、突如、誰かが、

「自動車が來た！」

と叫んだ。私は反射的に飛びあがつて、飛行機のそとへ驅け出した。

明るいヘッドライトが近づいて來る。見れば、ハーケンクロイツの標章とCDといふ外交團の徽章をつけてゐる。ドイツ公使館の自動車なのだ。私は勢よく飛乘ると、一目散に「神話の都」への道を急いだ。ヘッドライトに照されて、カーヴの樹木が、パッと現はれてはパッと消える。時速八十粁！　カーヴを切るごとに、車の片側がスーッと浮く。

十分も走つた頃、突然、行手に懷中電燈の青い光が搖れたと思ふと、嚴とした鋭い號令――

「止れ！」(ハルト)
キーッとタイヤが軋つて、急停車。步哨の銃劍と拳銃。アテネ市城門の交通檢査なのだ。
運轉手は横柄な男とみえて、
「ドイツ公使館の公用車だ。檢査無用！」
と高飛車に出るが、檢査の兵隊、そんなことではへこまない。却つて胡散臭しとみたか、執拗な訊問を重ねる。同乘のドイツ兵まで、軍隊手帳を出して調べられてゐる。嚴重な警備ぶりに、しみじみ、戰地へ來たといふ實感がする。占領後間もないからであらう。
燈火管制の時間で、どこをどう通つてゐるのか皆目判らないが、たゞ、夜目にも、廣い道路と大きな白堊の建物だけはそれいと判る。一番乘の緊張に、私の眼は皿のやうだ。
立派なホテルの前で、車がとまる。玄關の兩脇に、警備兵が二人、不動の姿勢をとつてゐる。拔劍である。
中へはいつて、これが有名なホテル・グランド・ブレターニュだと知る。このホテルはつい先日まで英國派遣軍司令部であり、イーデン外相も宿泊してゐたが、今は、獨軍前線總司令部が置かれてゐる。なるほど、堂々たるものだ。帳場の上の電氣時計は、ちやうど十時半を指してゐる。
とつつきの大廣間は、色とりどりのドイツ軍將校で一ぱいである。大將がゐる。紅顔の青年將校

がゐる。陸軍、空軍、エス・エス（親衛隊）……ドイツのあらゆる制服がこゝに集まつてゐる。

「將官だけで三十人も來てゐますヨ」と、帳場の男が私の耳にさゝやく。

食堂にはいる。こゝも、ドイツ軍人で超滿員。やつと一つ席を見つけて腰をおろすと、近くのテーブルで、ウィーンでよく見かけた將軍が副官と一緒に食事をしてゐる。ハハア、ウィーンの軍團が來てゐるナ――と思ふ。

朝からの强行軍で、ペコ〳〵の空腹。さつそくパンに嚙りついたが、こゝのパンはおそろしくまづい。半年にわたる對伊戰爭の影響であらう。食後、ギリシァ煙草をとりよせてみると、これはまたさすがにうまい。紫煙をゆつくり吐き出しながら、ふと隣室を見ると、一人の將軍が、たくさんの幕僚にとりまかれて會談してゐる。私は、オヤッ！　と思つた。あの顏といひ、口髭といひ、確かに東南歐方面軍總司令官リスト元帥だ。

これはインタヴューものだ！

と思つたので、すぐに宣傳省員のところへ飛んで行つて、なんとか會見の斡旋をしてくれと賴みこむ。ところが、リスト元帥は生粋のプロシァ軍人かたぎで、新聞記者とのインタヴューなどは好まれないだらう、ことに現在バルカンの外交情勢が極めて微妙な折であるから、なほさら會見の許可を得る可能性はない――といふ返事。あの手この手で粘つてみたが、結局、引導を渡されてしまふ。

これがよその國なら、直接本人にぶつつかる非常手段をとるとか、副官の「馬」を射る謀略手段を使ふとか、あれやこれやの四十八手を用ひる餘地があるのだが、統制の隙間のないドイツでは、そんなことは絶對に許されない。いさぎよく諦めるほかはない。

自分の席に戻り、煙草をくゆらせてゐると、いろんな話が耳にはいる。

ギリシャ軍の捕虜は、全部釋放されたといふ。今回の戰爭で、ドイツは初めから、正面の敵は戰爭挑發者英國であつて、ギリシャ國民は敵としないといふ方針をとつてきた。それは、四月六日にドイツ政府が發表した對希通牒の中に明記されてゐる。

「(前略)以上の理由によつて、ドイツ政府はその軍隊に對して、英國軍をギリシャ領土より驅逐せよと命令するに至つたのである。ドイツ政府はこゝに、ドイツ軍は斷じて、ギリシャ國民の敵として進擊するものではなく、またドイツ國民は、ギリシャ國民と戰ひ、これを損傷せんとする意圖の毛頭もないことを、特に强調する。ドイツがギリシャに對して與へざるを得なくなつた一擊は、英國に向けられたものである。ドイツ政府は、速かに英國侵入軍をギリシャ領土から驅逐することによつて、ギリシャ國民と歐洲協同體に重大寄與をなすものであることを信じて疑はない。」

これに加へるに、ドイツは今次戰爭におけるギリシャ軍の敢闘精神を賞揚し、ヒットラー總統は特に、將校の捕虜に帶劍を許すとともに、アテネの無名戰士の墓をギリシャ近衞兵が引續き警備す

ることを許したほどである。いはゆる「武人の名譽」を尊重しての處置である。

捕虜釋放には、ほかにもう一つ、現實的な理由がある。それは、麥の收穫期にあたつて生產力低下を防ぐためである。ギリシァの不作は決してギリシァのみの不幸でないことを、ドイツは何者よりもよく知つてゐるのだ。

さて、このホテルは滿員で空室がないといふので、方々へ電話をかけて探したあげく、やつとホテル・コスモポリートに一室を見つけて、そこへ移ることになる。

スーツケースをさげて、星月夜を步く。どこからともなく、ライラックの花が匂つてくる。なまあたゝかくて、猫の夜啼でも聞えてきさうな夜である。南國だなア――と、しみ〴〵思ふ。

午後十一時以後は、一般市民の通行は嚴禁されてゐるとかで、ほとんど人通りはない。深く沈んだ靜けさ。時々、步哨の誰何する聲が銳く靜寂を破る。

暗い中を尋ね〳〵て、やうやくホテル・コスモポリートにたどりつく。もう、一時を過ぎてゐる。五時に起すやうに帳場に賴んで三階へ上る。

室は、あまりりつぱではない。心細い電燈の光に、壁の裸電畫がぼんやり浮び上つてゐる。しかし、ベッドの敷布が白く淸潔なので、まづ〳〵がまんができる。ギリシァに多いとかいふ南京蟲もゐさうにない。

小さい机に向つて日記をつけながら、戰地で、ともかく一つの室にありつけたことが仕合せなんで、どんな室でも文句なんか言へた義理ではない――などと考へる。

三時。倒れるやうに横になつた枕許に、機甲部隊の進軍の音でもあらうか、車輪の重く軋る音が、どこからともなく、遙かに傳つてくる。

熟睡――。

七　赤罌粟の花に祈る

五月二日（金曜日）

正五時、ノックの音にパット飛び起きる。勢あまつて、掛蒲團が二三米フッ飛んで床に落ちたが、そんなことはかまつて居られぬ。大急ぎで齒を磨き、髭を剃り、服を着る。今日はパルテノン神殿に詣でるので、カラーの眞新しいのをつけかへる。

地圖と案內記をとり出して、今日の見物豫定地を研究する。要點だけはメモにとつて、作戰計畫に愼重を期する。

下へ降りると、ちやうど七時。食堂にはいつて朝食を注文し、窓から空を見上げると、一點の雲もない快晴で、朝の光が眼にしみて痛い。はてしなく澄みきつた穹窿を眺めてゐると、睡眠時間タッ

夕二時間の疲れなど忘れてしまつて、新鮮な活動慾が身内に起つてくる。

このホテルはオモニアス廣場に面して居り、道路を隔てゝたくさんなカフェーが並んでゐる。驚いたことには、それ等のカフェーが、朝の七時といふのに早くも超滿員、お客が道路上に置かれたテーブルに倚つて、これはまたノンビリと珈琲をすゝつてゐる。トルコ風の小さな珈琲茶碗に、その數倍もあるコップの水の取合せ――初めて見る眼には、すこぶる奇觀である。そしてテーブルの間を縫ひながら、汚いはだしの子供たちが、胡麻のやうなぶつ〳〵の一ぱいついた菓子パンを賣り歩いてゐる。何のことはない、支那街である、上海である、南京である。――私の第一印象はこれだ。どうよく見ても、清潔な街ではない。しかしまた、この東洋的な亂雜さが、私にある親しさと氣安さとを感じさせてくれたことも事實である。

私は、このゴミ〳〵と動くギリシァ人たちの表情から、敗戰ギリシァの感情を讀み取らうと努めた。しかし、それはむだな努力でしかなかつた。珈琲に口をうるほしながら、のんべんだらりといつまでも何やら論じあつてゐる中年以上の男、無氣力な顏をした青年、眞赤な口紅を塗つた厚化粧の娘――みんなシャア〳〵として、どこに戰爭があるかといつた顏付である。釋放された捕虜は、あまりめだたないやうに裏通りのみを歩くやう訓令がでてゐるさうだが、それでも女と手を組んで散歩してゐる心臟ものもゐる。

私は、意外な感じがした。失望した。「楯を持つて歸れ、然らずんば楯に乘つて歸れ！」といふ、あの古代ギリシァ人の氣魄は、今はもうないのであらうか？

ちやうどそこへ、給仕が珈琲を運んで來たので、

「ドイツ軍がはいつて來てゐるのに、アテネ市民はあまりくさつた顏はしてゐないぢやないか。いつたい、ギリシァ人はドイツ人をどう思つてゐるのかネ？」

と話しかける。給仕の眼に、一瞬、チラッと警戒の色が浮んだが、私が日本人だと判ると初めて安心したやうに語りだした。

「アテネ市民は、ドイツ人に敵意をもつて居りません。ドイツ軍が入城して來た時に、市民が花を投げたり煙草を贈つたりして迎へたのは、何よりの證據ですよ。

だつてさうでせう。ギリシァに戰爭をしかけてきたのはイタリーです。そのイタリーの旗色が惡いものだから、盟邦のドイツが、見るに見かねてはいつて來たのです。ギリシァ國民を敵として戰ふのではない――と、ヒットラーさんもはつきり言つてゐるでせう。だから、私たちギリシァ人も、ドイツ人を憎んだりするいはれがありませんよ。

それに御覽のとほり、ドイツ軍の軍規は嚴正ですから、市民はドイツ兵を尊敬してゐます。しかしあなた……」

と、彼はあたりを見まはして、イタリー人がゐないのを確めた後、聲をひそめて言ふ。

「もしはいつて來たのがイタリー軍だとしたら、話は全然ちがひますよ。ギリシァを將來イタリーの保護國にするとか、勢力範圍下に置くとか、いろ〳〵の噂がありますが、それではとても治つて行きますまい。ギリシァ國民は、どうせ他民族に支配されるなら、偉敬するドイツ人に治めてもらひたいと思つてゐます。」

盟邦イタリーのことをかう言はれては、私もあまり愉快でないから、ひとつ說敎してやらうかと思つたが、先を急ぐ、手早くバターをパンにすりつけて口の中へはふりこむ。バターを贅澤に使つていたための目玉燒、香り高い珈琲……久しぶりに、ほんものづくしの朝食だ。食べ終つて、食糧切符を出さうとポケットへ手を入れて、こゝでは切符がいらないのだと氣がつきをかしくなつた。代金を拂ふのは忘れても、切符を出すのは忘れないほど切符制度に慣れてしまつたことを考へて、「ドイツの統制はほんものだ」と、今さらのやうに思つた。切符なしでは食べたやうな氣がしないやうになれば、日本などでも、食糧統制に對する不平が起らないやうになるだらう――などと考へる。

八時、寫眞器を肩に表へ出る。とたんに、强烈な太陽の直射が、私の顏に、肩に、全身に降りかかる。南國の陽光だ。なるほど、さういへば昨日飛行機で、一氣に十度以上の緯度を飛び越して南へ下つて來たのだ。氣候の急激な變化も當然だ。外套を室に殘して來てよかつたと思ふ。

この炎熱の下に、無數の人間がうごめいてゐる。しかも、人種展覽會だ。殊に、ドイツから來た者の眼には、ユダヤ人がめだつ。長く髭を延ばし黑い服をつけたユダヤ人僧侶が去勢されたやうにゾロゾロ步いて行く。この雜踏の中に立つて、ギリシア人の巡査が、ドイツ兵に指導されながら、汗だくで交通整理にあたつてゐる。もう卽製のドイツ式交通整理が實行されてゐるから驚く。全く、どこへ行つても、「ドイツ化」の早いのには感心させられる。

オモニアス廣場からアテネの銀座パネピスティミウ通を南へ下つて行く。道路は幅三十米以上もあり、立派に舖裝されてゐる。リスト總司令官の布告が、いたるところに大きく貼り出されてゐる。市民の武器彈藥携帶を禁止する布告だ。

通行人は、もうみんな白味勝の夏服を着てゐる。夏服を着てゐないのは、私とか、ドイツ兵とか、北方から長驅攻入つて來た者ばかりである。小麥色の肌をした若い女が華手な色眼鏡をかけてゐるのにたいへんたくさんであふ。おそろしく魅惑的な印象を受ける。地味なドイツ娘を見慣れてゐたせゐであらう。

しばらく行くと、左側に壯大な建物が三棟並んでゐる。圖書館と大學とアカデミーである。三つとも白堊に卵色を配した古典ギリシア式建築で、イオニア式の柱を用ひてゐる。前庭に植ゑられた芭蕉などの綠と調和して、近代アテネの代表的建築美を構成してゐる。

街角の煙草屋にはいる。一人のドイツ兵が買物をしようとしてゐるが、ドイツ語がおやぢに通じなくて困つてゐる。英語で取次いでやると、厚く禮を言つた後、「どこから來たのか？」と尋ねる。ベルリンからだと言ふと、さも懐しさうに、自分もベルリン子だと言ふ。それから、二人ともアクロポリス見物の途中といふことが判り、旅は道連れ――と二人肩を並べて歩き出す。

よく見ると、はたちになつたかならぬ位の紅顏の青年である。碧く澄んだ眼にすつきり通つた鼻筋、いかにも男らしい端正な顏で、古代ギリシァの彫像に血をかよはせたやうな男である。それに比べて、街上で見るギリシア人の中に、いかにいはゆるギリシァ型の顏が稀であることか。ドイツ人と比較して、いかに貧相に見えることか！　話に聞けば、ギリシァでは、過去二千年間に非常に複雜な人種間の混血が行はれ、現代ギリシァ人には、アルバニア人、トルコ人、シリア人、ユダヤ人、マルタ人、アラビア人、エヂプト人等の血が混つてゐるといはれる。私が舊臘ナチス・ドイツの指導的理論家ローゼンベルグ氏のインタヴューをとつた時、同氏は、古代に優秀な文化をもつたインド民族がつひに奴隸的境遇に墮ちたのは、人種的な混血が行はれたからであると說き、血の純潔性を强調してゐたが、ギリシァ衰微の原因も、或ひは、ヘレネ族の純粹性喪失に求められるかもしれない。

ゆうべ食事をしたホテル・グランド・ブレターニュの前を通り過ぎると、左手に明るい卵色の舊

王宮が王立公園の中にそゝり立つてゐる。王宮の前には無名戰士の墓があり、スカート附の古風な服裝をした近衞兵が二人、大時代的な歩き方で墓前をゆきゝしてゐる。これが昨夜話に出たヒットラー總統特別許可の警備兵なのである。公園は、ほとばしるやうに吹き出た新緑におほはれ、ジーッと見つめてゐると芽がうづきだしさうである。

むせるやうな若葉の匂ひから逃れるやうに眼を上げた私は、一瞬、ハッと息を呑んで立ちすくんだ。見よ、眼の前に聳え立つ突兀たる岩山を！　アクロポリスなのだ。しかもその頂上には、壯麗なパルテノン神殿が朝陽に燦然と輝いてゐるではないか！

私の胸は感動にふるへた。私は燒きつくやうに、この聖なる丘を見つめた。繪葉書やアルバムの寫眞から頭に描いてゐた映像が、今現實の姿をとつて現れたのだ。せり上つた舞臺のやうに、街の中から孤立してそゝり立つてゐるこの丘は、一種奇怪な美感を構成してゐる。

私は、化石したやうに立つたまゝ動かなかつた。同行の兵隊もまた、ジーッと立ちつくしてゐた。

二人がまた歩き出した時、彼は感激におしひしがれた聲で、つぶやくやうに語りだした――

「わたしは今、少年時代からの夢を充すことができて感慨無量です。一度は歐洲文明の發祥地アテネを訪づれたい――これはわたしの長年の憧憬だつたのです。わたしは滿足です。しかし、今日、この喜びを戰友Pと頒つことができないのは、なんとも殘念でたまりません。Pもまた、このアテ

ネに對しては、限りない憧憬をもつてゐました。ギリシア戰線に來てからは、幕營の時にも、行軍の間にも、きつと一緒にアクロポリスを訪づれようと、何度もくりかへし〳〵約束しあつたものでした。

ところが、そのPは……」

こゝまで一氣に語つてきた彼は、突然語を切ると、そのまゝ默つてしまつた。不思議に思つて彼の顏を覗くと、もり上つてくる感情を一生懸命押へようと努力してゐるらしく、眼は赤く充血して、小鼻のあたりがピク〳〵動いてゐる。彼は、やうやくにして言葉を續ける——

「Pはテルモピレー峠の激戰で壯烈な戰死を遂げてしまつたのです。わたしが第一線後方の假繃帶所へ驅けつけた時、Pの息はまだありました。わたしの手を握りながらPの最後に言つた言葉は、

アテネはもう近いのに！

といふ一語でした。

アテネはもう近いのに！——わたしの耳には、この言葉がまだ響いてゐるやうですヨ。」

彼は涙を流さなかつた。けれども、彼の胸は泣く以上の激動に襲はれてゐるらしく、その双頰は蒼白に硬直してゐた。

私も嚴肅な感動に打たれて、慰藉の言葉さへ發し得なかつた。二人は言葉尠なにアクロポリスへ

の道を急いだ。オリンペイオンの祠趾、ディオニソス劇場、オデオン音樂堂などを順々に過ぎて行けば、道は早くも、アクロポリス西側の登り口にさしかゝる。太陽の直射に汗ばみながら、大理石の道を踏んで入口に達する。平常はきつと入場料をとるのだらうが、今はドイツ兵は木戸御免である。門をくゞると、すぐ眼の上に、ペンテリコン產白大理石造りのプロプュリエが聳えてゐる。日本なら、さしづめ山門といつたところである。プロプュリエの建築を鑑賞しながら、さらに頂上の平地へと登つて行く。階段の大理石はひどくすりへつて、靴がつる〳〵すべりさうである。

「この石のやうに、アテネの歷史も風雨に曝されてきたのだなア！」

と、同行の兵隊が、獨りごとのやうに言ふ。

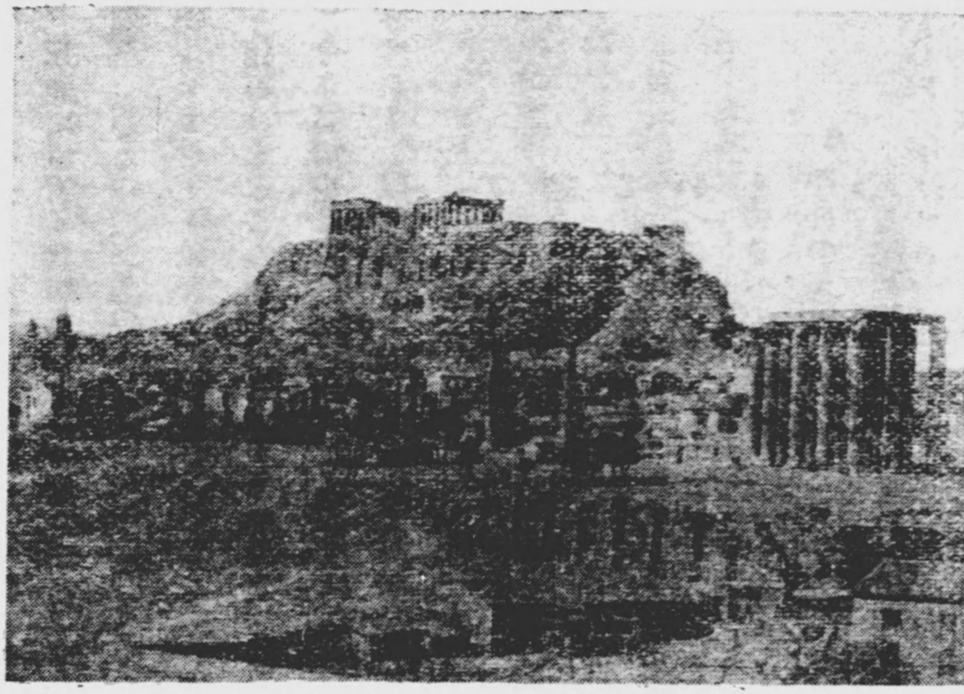
白く光る大理石の間には、罌粟、野菊、朝顏などの花が一面に咲き亂れてゐる。罌粟の花は、今にも赤い滴がしたゝりさうに眞赤だ。血のやうに赤い。二人は期せずして、戰友Pのことを思つた、アテネを前にして寂しく逝つた若いPのことを……。私たちは立止つて心からPの冥福を祈つた。赤罌粟の花に祈つた。

眼の前にはもう、パルテノン神殿が莊嚴瑰麗な姿をあらはしてゐる。美しく彫刻された破風を支へるドリア式圓柱は、黃金色に古さびて重厚な美感を釀し出してゐる。完成された調和（プロポーション）・均衡の美である。

私たちは神殿の東側に廻つて、臺石の破片らしい大きな石に腰かけた。空は、見上げる額も染まるかと思はれるばかりに青い。その穹窿を切り刻むやうに、たくさんなドイツ機がスーッ〱と飛びかつて行く。あれがドルニエ偵察機、あれがハインケル爆撃機、あれがメッサーシュミット戰鬪機……と、兵隊が一つ〱致へてくれる。西南の方向には、ゆるやかな起伏をなして續くオリーヴ畑のかなたにピレウス港が見え、その向ふには、水碧き地中海が明るく光つてゐる。

この丘の東端と西端の二ケ所には、獨軍重高射砲隊が砲門を開いて待機して居り、西側の高射砲陣地の上には、ドイツ國旗のハーケンクロイツ旗と青地に白十字のギリシァ國旗とが相並んで立てられてゐる。ほかの占領地のやうにドイツ軍旗を揭げずに普通のドイツ國旗を立てたのは、歐洲文化の搖籃アテネ市を尊重するドイツ側の深い配慮から出たものであり、ギリシァ國旗を並立させたのは、ギリシァ軍の勇敢な戰鬪ぶりを嘉して、ヒットラー總統が特に命じて行はせたことなのである。聞けば、このハーケンクロイツ旗を揭揚する時、アテネ市内の百名以上の國民學校兒童が、長い旗竿を丘の上までエッサ〱擔いで上つたといふ。私はこの話を、おもしろいと思つて聞いた。

私たちはそれから、代表的なイオニア建築エレヒティオンを鑑賞して丘の北壁上に立つた。眼下には、人口百萬のアテネ市街がひろ〱と横たはつてゐる。三方山に圍まれてあたかも擂鉢の底のやうなアテネ市街、そのアテネ市が大事に抱きかゝへてゐる寶玉の匣——それが、このアクロポリ



アクロポリス丘

スなのである。思へば二千五百年の歴史ではある。今、この敗殘の日を迎へて、この丘上に眠る古代ギリシァの武將たちは、いつたい、いかなる感慨をもつて陷落アテネの姿を見守ることであらうか！　私は足もとに血を流す赤罌粟の花を眺めながら、「夏草やつはものどもが夢の跡」といふ一句を、しみ〴〵と思ひ起さずには居られなかつた。

歸路につく。いつの間にか、ドイツ兵が一ぱい見物に來て居り、この兵隊さんたちをめあての五分間寫眞屋が大繁昌である。如才のない寫眞屋に言はれるまゝ、神殿の圓柱の前で武骨に肘を張つてみたり、空を仰いで數千年の回顧の夢に耽るやうな深刻極まる眼付をしてみたり、いたるところに微笑ましい風景がくりひろげら

れてゐる。まづ、典型的なお上りさん風景である。

丘の出口で、兵隊と固い握手をかはして別れ、私はひとりで北麓のトルコ町へとくだつて行つた。圓蓋と窓との間が梟の頭と眼のやうにつまり、まるで梟の顏のやうに見えるビザンチン寺院。パリのモンマルトルによくあるやうな、狹く穢い路次、階段狀の細い坂道。はだしの子供。ボソ〱歩く驢馬。……これが、近代アテネの現實の姿なのだ。なんといふ大きな差異であらう！——と、私は今さらのやうに、頭上高く聳えるアクロポリスを仰ぎ見た。これが、同じ民族の文化的所産であらうか？ 私は、或る近代詩人のうたつた嘆きの詩を思ひ出した——

アテネを見た者は不幸である
若き日の夢のすべては
この近代の都の光景を前にして
いづこへか消えてしまふ
その昔への追想を
今日の現實の中へ
どう納めてよいか判らない

ドイツ軍の占領後、ギリシァでは、ドイツ軍票とギリシァ貨幣ドラクマとが並行して通用してゐる。比率は、占領前は一マルク對四十六ドラクマであつたのが、占領後は一マルク對五十ドラクマに固定された。たいして有利になつたはずではないが、物價がギリシァ政府のストップ令によつて釘付けにされてゐるため、我々ドイツから行つた者にとつては、すべてが格安で、いかにも非常に有利な爲替相場で交換したやうな氣がするのである。そこで大いに買物をといふことになるのであるが、そこは用意周到なドイツ政府、今までの各占領地統治の經驗にかへりみて、今度は軍人の買物に嚴重な制限を加へてゐる。まづ根本的對策として、軍人への軍票交付を最小限度にまで削減し、その上に、購買許可證制度を採用した。購買許可證の文言を飜譯して示せば次のとほりである。

一九四一年四月二十八日付

駐屯軍司令部命令第一號拔萃

△禁令

アテネ市ニ於ケル軍人ノ自由購買ハ、ソノ何タルトヲ問ハズ、卽時コレヲ禁止ス。購

買ハ、駐屯軍司令部發行ノ購買許可證ニ依テノミ行ハルベシ。
各商店ハ、市當局ヨリ、本證書ニ對シテノミ商品ヲ販賣スル旨ノ指示ヲ受ケタリ。
食料品ノ購入ハ、アテネ市ノ物資需給狀態ニ省ミ、コレヲ全然禁止ス。但シ飲食店、喫茶店等ニ於テハ、現金ヲ支拂フ軍人、軍屬ノミ飲食スル事ヲ得。違反者ハ嚴重ニコレヲ處罰ス。

アテネ市駐屯軍司令部

この禁令を讀んだ時、私は一つの無邪氣な挿話を思ひ起した。去年の初春、パリ陷落直後に私の親友であるヒットラー・ユーゲントの一幹部がパリに出張したが、歸つて來てからの茶飲話に、彼は次のやうな笑話がパリではやつてゐると傳へてくれた。

或る一人の英國間諜(シークレット・サーヴイス)が、ドイツ軍人の制服を着用してパリで暗躍したが、一回も露顯せずに働くことができた。ところが、いよ〳〵任務を完全に遂行してパリを立去る日、つひにばれて逮捕されてしまつた。いつたいどうしたことか。それは彼が兩手に土産物の大トランクをさげてゐなかつたからである！

過去の經驗を仔細に檢討して、新しい處置を果斷に實行する――これが、ドイツの大きな特色であり、著しい强味である。私は今回の獨軍當局の果斷な處置にはすつかり感心したが、氣がついて

みると、あんまり感心ばかりしては居られない。私もドイツ軍に從軍してゐる以上、もしかしたらこの禁令の適用を受けるかもしれない。なんとか便法を講じてもらはなければならんと思ひ、さつそく、例のホテル・グランド・ブレターニュに出向いて受付で交渉すると、外國人と思つたせゐか手輕に數百マルク分を軍票とドラクマに兩換してくれた。紙入は、一萬ドラクマ以上の札束で快くふくれてゐる。買物をすれば、「街の經濟學」も研究できてニュースのたねにもなる——と大いに勇み立ち、すぐにホテルへとつて返して、番頭に「買物の案内をしないか」とかけあふと、眼の聰いこの番頭、早くも人の懷ぐあひを見てとつたとみえて、二つ返事で引受ける。

先づ洋服屋だ。アテネで一番大きい店にはいつて、「英國製の服地が欲しい」と言ふと、店の奧から山ほど持つて來て並べる。なるほど、みんな Made in England と商標が打つてある。マッチをすつて試驗すると、まさしく純毛だ。さつそく一着分三ヤードばかり買ひ求める。

次には煙草屋。「普通の店にはもう英國製煙草は賣つてゐないが、たつた一軒ストックをもつてゐる店がある」と言つて、番頭が案内してくれる。見れば、私の好きなゴールド・フレイクの小箱數十箇をつめた大箱が置いてある。一日一箇といふベルリンからみると、一度に數百本買ふといふことはかゝら恐しいことである。しかし勇氣をふるつて「その大箱をくれ」と言ふと、「へイかしこまりました」といふ返事。かうなるとあつかましくなつて、次々と大量購買をもくろんだが、いく

ら「自由主義經濟」のアテネでもさうは問屋が卸さない。例へば、麻ハンケチは三枚、チョコレートは四箇……といふやうに一定量以下しか賣つてくれなかつた。海上封鎖をされて將來輸入の見込がたゝず、ストックをだん〳〵喰ひつぶして行くギリシァとしては、やむをえないことであらう。けれども、ジョニー・ウォーカーのウィスキーとか、ポルスのコニャックとか、ほんものがまだたくさんあるのは、さすがに長年英米佛諸國の勢力下に貿易を續けてきた國であることを肯かせる。

たゞおもしろいと思つたのは、靴下は、男子用でも婦人用でも、ドイツ製品が多いことである。ドイツは、國内では靴下の購入を特に嚴しく制限して、それを外貨獲得の輸出用にまはしてゐるのである。またアテネ市内での商店でも、軍票が些かの不安もなく通用し、むしろ本來の貨幣ドラクマ以上の信用を保つてゐるやうにさへ見えたが、これは、ドイツ軍の威力とドイツ國力の充實とを示すものとして羨ましい感じがした。

亞熱帶的氣候からくる生理的必要であらう、商店は全部、正午から午後三時半まで「晝寢の時間」をとる。私も買物を急いで、正午すこし前に或る繪葉書屋にはいる。はいつて驚いたことには、ヒットラー總統の似顔繪を繪葉書にしてたくさん賣つてゐる。それも、惡意のある漫畫などではなく、極くまじめなものである。ドイツ軍が入城したと思ふと、もうすぐにヒットラー總統の繪葉書を賣つてゐる。このやうな如才ない早業は、いつたい、褒めていゝのか、貶していゝのか？　迷ひなが

ら表へ出る。

表では、新聞の賣子がうるさく呼賣してゐる。一種ばかり買つてひろげて見ると、さらに驚いた、みんな揃つて、第一面中央に大きくヒットラー總統の寫眞を掲げてゐる。綺麗な色刷にして、ヒットラー總統を雲海高き山上に立たせた寫眞もある。おそらくオリンプス山のつもりであらう。私はこれを見た時に、苦心してこんな構圖をつくりあげた寫眞師の努力を、むしろいぢらしいものと感じたのである。

九 街上の邂逅

晝食は、アヴェロフといふ氣の利いたフランス料理屋で。

私をベルリンから運んで來た飛行機の航空兵たちと一緒のテーブルに坐る。話してみると、みんな、買ひたい物を山ほど眼の前に見ながら、軍票を給與されないために買へなくなつて殘念だといふ話。ちやうどその中の一人、電信士Wが今日結婚二周年記念日だといふので、「留守番してゐる奥さんに何か記念品を買つて歸るやうに」言つて二十マルクばかり軍票を渡すと、非常に喜んでくれた。

食事半ばに宣傳省員が側へ來て、「原稿を軍の飛行便に託することになつたから、夜の八時まで

に持つて來てくれ」と言ふ。心がピーンと張る。食事もそこ〳〵に立上つて、ホテルへの道を急ぐ。燃える炎天の下に、道路は漫歩の市民で埋まつてゐる。私は汗ばみながら、人ごみの中を泳いで行く。大學の前まで來た時である。私は人とぶつつかりさうになつて身體を捩つたが、たちまち、ギヨッとして立ちすくんだ。相手も棒立ちになつてゐる。

二秒、三秒――

「シュミットぢやないか！」

「友枝ぢやないか！」

二人は同時に叫んだ。そして次の瞬間、ほとんど抱擁せんばかりに固く〳〵手を握りあつてゐた。涙もろい私はもう涙ぐんでゐた。

なんといふ奇遇であらうか！　最初はお互ひに人違ひかと疑つたほどの奇遇である。

「會ひたかつたヨ！」

「會ひたかつたヨ！」

二人はまた同じ言葉を吐いた。

この年若い陸軍少尉シュミットは、私の最も親しい、「俺、貴樣」で呼びあふ友人の一人なのだ。仕事の餘暇にヒットラー・ユーゲントの青年運動を研究してゐる關係から、私の友人には二十歳前

後の青年が多いが、シュミットもまたその中の一人なのである。初めて知り合つたのは、一昨年の三月、彼がまだデーベリッツ歩兵學校の士官候補生であつた頃だ。大戰勃發するや、少尉に任官して第一線へ出動、シャンパーニュの追擊戰、ヴェルグンの攻略戰などに赫々たる偉勳をたてゝ鐵十字章の一級、二級を兩方とももらひ、聯隊旗付將校としての名譽を擔つて凱旋して來た。それから一年近く會ふ機會がなく過ぎて來たのだが、今會つてみれば、顏は逞しく陽にやけてながい歷戰の功を物語つてゐる。眼は銳く敢鬪精神に燃えてゐる。

私は彼の話をユックリ聽きたかつた。心ゆくばかり語りあひたかつた。しかしながら、私は今、電報記事を書くといふ義務を負つてゐる。この仕事は、絕對に拋棄できない緊急なものだ。友人は軍人である。處は戰地である。誰が再會の日を保證できようか！

とはいへ、今別れゝば、いつの日かまた再會できることであらう！

邂逅五分もたゝないのに、私たち二人はつひに、訣別の挨拶をかはさなければならなかつた。兩手を握りあつて、何度も〳〵打ち振つた。思ひ切つて左右に別れたが、私は十步ばかり行つて後を振向いた。シュミットもまた振向いた。もう一度振返つた時、彼もまた振返つたにちがひないが、物凄い雜沓は、その時もう二人を別世界に引離してゐた。

私はホテルの室に驅けこむなり、まとひつく別離の情を振りのけ、振りはらふやうに、

「仕事だ！　仕事だ！」

と、叫んだ。

上衣をぬぎ鉢卷をしめると、私は取憑かれたやうにペンを動かした。――手には、油汗がジットリ滲んでゐた。

一〇　從軍記者の惱み

約束の八時すこし前に記事を書き終へ、コスティといふ大學近くのレストランへ驅けつけて宣傳省員に手渡す。ホッとする。けれども、ホッとしたなかにも、一沫の不安が胸の底に澱んでゐる。はたして迅速、確實にベルリン支局に屆いてくれるであらうか？　ほかの記事とはちがつて、一番乘の記事が時間的に遲れるやうなことがあつたら、それはまさに致命傷である。支那でも歐洲でも同じであるが、從軍記者の苦心は、ニュース自體を書くといふことよりも、むしろ、いかにしてその書いたニュースをてつとり早く送るかといふ點にあるのだ。實際、これには命が縮まる思ひである。しかもそこには、運不運といふ「運命」の影が射す。人事を盡した後は、もう神に賴るほかはない。私は、瞬時も肌身を離したことがない兩親餞別の御守を固く握りしめて、心から神の加護を祈つた。

心をまぎらすやうに葡萄酒を飲む。なかなかうまい。料理も味はいゝが、どうも見るところ、このギリシァには肉類があまり豐富でないやうだ。肉のきれいが、ドイツとあまり違はないほど薄い。食糧輸入國であるからであらう。

食事中、明日午前九時から入城分列式が行はれるといふニュースがはいる。ヒットラー總統が來るだらうか？――といふことが話題の中心になる。來る來ない、ちやうど半々である。

ヒットラー總統が古代ギリシァ文化に對して異常な關心と愛著の念をもつことは、すでにあまりにも周知の事實である。「ヒットラー樣式」と呼ばれる近代ドイツの建築樣式が、ギリシァ建築の影響を多分に受けてゐることは專門家のひとしく指摘するところである。

ヒットラー總統個人としては、もちろん、すぐにも飛んで來たいであらう。しかし、諸般の政治的、軍事的、外交的の事情がこれを許すかどうか？　こゝに、判斷の分岐點がある。とにかく、おもしろい判じ物だ。

肝腎の仕事がすんだから踊り場へでも出かけて、アテネの娘さんと南國の春宵に踊るのもわるくない――と思つたが、聞けば、ダンスは禁止されて、キャバレーなどは全部閉鎖されてゐるといふ。諦めて、ホテルへの道を歸る。途中カフェーなどを覗いてみると、どこもこゝも、ドイツの軍人で超滿員である。アテネ市は、今、ドイツ兵が滿ち溢れてゐるのだ。こんなに大勢のドイツ人が踊り

場へ行つてダンスを始めたら、それこそたいへんであらう。ダンスを禁止し、キャバレーを閉鎖させたわけがなるほどと頷かれる。

二 入城分列式

五月三日（土曜日）

隣りの室でも、向ひの室でも、さかんにドアをノックする音が聞える。その音に眼を覺まして、枕許の時計を見ると五時である。入城式に參加する軍人がみんな叩き起されてゐるのであらう。私も起きる。早く起きて、ヒットラー總統がはたして乘りこんで來るかどうかを偵察したかつたからだ。

急いで朝食をすませて表へ出ると、前の廣場はもう一部交通遮斷されて、警備のドイツ兵が一ぱい並んでゐる。早起の市民が物珍しさうにかたまつて立つてゐる。偵察機が低空飛行をして通る。空はどんよりと曇つてゐる。

まだ時間があるので、人ごみをわけてぶら〳〵散歩する。道端には、アテネ名物の靴磨きがずらりッと並んで、うつろな聲で客を呼んでゐる。小さい子供までが、誰から敎はつたのか、「シュー・プッツェン〳〵（靴を磨きませう）」とあやしげなドイツ語でドイツ兵たちに呼びかけてゐるのは、

むしろあはれである。

その中の一番小さい子供の前に立止つて靴を臺に乘せる。年は七つ位であらう。見ればぼろ〱の服を着て、むき出しの膝ッこぶからは腫物の膿が流れ出てゐる。こんな小さい年からひとの靴を磨いて生きなければならないとは！——私は、思はず顏をそむけた。その視線が、隣りでこれも靴を磨かせてゐるドイツ兵の視線とかち合つたので、私は輕く會釋した。するとそのドイツ兵も、私に會釋しながら話しかけてきた——

「ドイツ人には、とてもこんな商賣はできませんよ。だいゝち、ドイツでは人手が不足で、かういふ悠長な仕事へまはす勞働力はまつたくありませんね」

アテネに靴磨きが多いのは空氣が乾燥してゐて砂埃がたつからであらう。靴を磨かせることは、決して贅澤なことではなく、むしろ日常必需のことなのかもしれない。その證據には、當人が靴磨きでもやりさうな穢い子供までが、ほかの子供の前に立つて靴を磨かせてゐるのをよく見かけるから。一回五ドラクマの相場なのを十ドラクマ握らせたら、大喜びで、ほかの子供たちにも見せびらかしてはしやいでゐる。膝の膿と思ひあはせて、胸がつまる思ひがした。

ヒットラー總統は、殘念ながらどうも來さうにない。總統が來るなら、もつとエス・エスなどがはいりこんで嚴重な警戒をやるはずだ。おかげで、入城式のニュース・ヴァリューが十分の一以下

に減つてしまつた。

九時前、舊王宮前の新聞記者席にはいる。王宮前正面には閲兵臺が設けてあつて、その背後には、早くも、ドイツ國防軍の將星、三國條約關係國の外交團などがぎつしり詰めかけてゐる。アマティアス廣小路からパネピスティミウ通へかけては、道の兩側に、警備と見物のドイツ兵が隙間のない人垣をつくつてゐる。舊王宮の向ひ側は在留ドイツ人の特別席で、ヒットラー・ユーゲントの制服をつけた少年少女が、ハーケンクロイツの小旗を兩手に立並んでゐる。在留ドイツ人は、戰爭中も敢然とアテネに留つてゐたが、ドイツ軍入城後は通譯とか案内人として献身的な奉仕を行つてゐる。「一肌組」根性などは全然見られない。

舊王室や眞向ひのホテル・グランド・ブレターニュなど大きな建物の屋上には、高射砲隊が、今にも火蓋を切らんばかりにして、敵機御參んなれ！と待ちかまへてゐる。じつさい、入城式の最中にドカーンと爆彈が落ちて來たらたまらない。

日本でいふならちやうど花曇りといつた空模樣、時々やはらかい薄陽がもれてくる。

ヒットラー總統はたして來らず、九時五分前、東南歐方面軍總司令官リスト元帥が閲兵臺に登る。

正九時、閲兵臺前の軍樂隊が有名なカイザー・エーガー行進曲を吹奏し始めると、アマティアス廣小路の方から、アルプス山岳部隊が肅々と行進して來る。嶮峻な山岳地帶で言語に絕する苦勞を

なめて來たのであらう、兵の顏は赤銅色に燒けて逞しい面魂を見せてゐる。しかし、小ざつぱりした服裝をしてゐるのは、いつもながら、ドイツ兵の身嗜みの良さである。

猛烈な拍手と歡聲が起つたので、何事かと思つてその方を見ると、隊伍堂々と落下傘部隊が進んで來る。四月二十六日早朝、コリント地峽を急襲して、英國軍を潰滅させた殊勳甲の英雄部隊だ。ヒットラー・ユーゲントの子供たちは、感激の極、聲の嗄れるほど「ハイル〳〵！」と絶叫してゐる。元帥杖をあげて答禮するリスト將軍の顏にも、言ひしれぬ感謝の色が浮ぶ。

この時！　はるか南の空に鋭い爆音が轟きわたつたかと思ふと、たちまち、編隊飛行の數百機が上空を黑くおほひ、隼のごとく北方の空へと消え去つた。

上空の飛行機と地上の落下傘部隊！　すばらしい舞臺效果だ。

この息づまるやうな一幕が終ると、三色旗を先頭に掲げてイタリー機甲師團がやつて來る。これは誰にも意外なことであつた。

次には、親衞師團「アドルフ・ヒットラー」。この師團は、今度の戰爭で一番の難所を引受け、ピンドス山脈の峻嶮を攀ぢてコリント灣口に到達、パトラス海峽を渡つて、ペロポネソス半島へ攻め入つた精銳である。熱烈な拍手。觀衆のどよめき。

續いて機械化師團……戰車師團。無限軌道の轟音は高く天に冲して、軍樂隊の吹奏する行進曲が

完全に消されてしまふ。この堂々たる鐵牛陣くろがねの進軍をまのあたりに見て、ギリシァ人はただ呆然としてゐる。

「これぢァかなふわけがない！」

などと、自嘲的な言葉をもらす者すらある。機甲兵團の大行進こそまさに、本日の歴巻であつた。

高射砲隊をしんがりに、十時十分、一時間以上にわたる入城分列式は終了――私は、ホテルへ歸つて電報記事を書く。室の中は蒸されるやうに暑い。

一二　アテネ娘の涙

正午前、空は再び紺碧に晴れる。

街へ出る。昨日英國製煙草を買つた店へ行くと、あんなに山ほどあつたものがもう全部賣切れてしまつてゐて、一本も殘つてゐない。早いものだ。これは大部分のギリシァ商人が、遠い將來のことは考へずに、手持品をどしどし賣捌いてしまふからであらう。

ゴルフ・ボールを少し買つて行きたいと思つて、二三軒運動具店を尋ねてみたが、どこにも賣つてゐない。「ギリシァにもゴルフ・コース位あるだらうに、ボールを一つも賣つてゐないとはどういふわけだ？」とふしぎに思つて尋ねると、

「英國兵がみんな持つて行つてしまつたんですョ!」
と吐き出すやうに言ふ。いくらゴルフ狂の英國人でも、まさか、逃げる時にゴルフ・ボールまで持つて逃げはしまい。この言葉の間に、裏切つて逃げた英國人に對するギリシァ人の憤懣がのぞいてゐると思つて、私は興味深く聞いた。

私は、もつとギリシァ人の佯らぬ心境を聞いてみたい。悲しみか、諦めか、憤りか、いづれかは知らぬが、その氣持に直接觸れてみたい。

この時私は、昨日ハンカチを買つた裝身具店におきやんな娘がゐて、お互ひにいろ〳〵むだ口をたゝきあつた時、「あしたの晝は、お店からひまがもらへる」と言つてゐたのを思ひ出し、あの娘なら話相手になつておしやべりするだらうと考へた。さつそく行つて誘つてみると、きさくに散歩に出てきてくれる。この娘さん、ドイツ語は全然しやべれないが、英語はブロークンながら話す。だから英語で話すと、私のいゝ話相手だ。

カフェーで苺ミルクの苺を匙でつぶしながら、「ドイツの兵隊さんをどう思ふ?」と聞いてみる。

「ドイツの兵隊さんはたしかに強いわ。だからギリシァ人はみんな尊敬してることよ。信用してることよ。その證據に、あなたアテネの女はみんな、いつもどほりお化粧して往來を歩いてゐるでせう。もし、どんなことをされるか判らないと思つたら、ヘイあたしはこゝに控へて居ります――

といふやうな目立つたお化粧をするはずがないぢやないの。これがなによりの證據だわ。

だけど、イタリーの兵隊さんはだめよ。ギリシァ人みんなばかにしてるわ。だつてあたしたち、イタリーには戰爭で負けなかつたんですもの。あなた、今日の入城式をごらんになつたでせう。イタリー軍が通る時、市民がどんな顏してたか御存じ？　みんなクス〳〵笑つてたわ。」

こゝで私は話を遮つて、イタリー軍の作戰齟齬が全くやむをえない一時的なものであつたことを納得させようとしたが、彼女は頑なに受入れなかつた。……彼女は、すこしヒステリックに苺の粒をギュー〳〵押しつぶしながら、訴へるやうな調子で言ふのであつた。

「あなた方は、あたしたちギリシァ人がばかなことをしたとお思ひになるでせう。イザとなれば頼りにならない英國に義理立して國をうしなふなんて、目先のきかない話だとお考へになるでせう。だけど、ほんとにしかたがなかつたんだわ。どうにもならなかつたんだわ。これが、大國の板挾みになつた小國の運命といふものよ。あたしたちは、この運命を、甘受しなければならないんだわ。アテネが陷落した時、この町の新聞は、みんなかう言つて市民に呼びかけたわ――堂々たる態度でこの大きな不幸を迎へよ！　と……」

彼女の眼には、キラリと光るものがあつた。私は默つて珈琲茶碗を口へもつていつた。

別れる時名前を聞いたら、エヴァンジェリアといふと答へた。

一三　ピレウス港の慘劇

晝食後、ピレウス港へ行かうと思ひたつ。

ホテルの支配人に賴んで、タクシーを一臺傭つてきてもらふ。支配人が「この男は私が保證します」と言ふだけあつて、見たところ親切で正直さうな運轉手だ。しかし、その自動車ときたら、いくら古典尊重のアテネでも、すこし時代がかりすぎた代物である。

「この車は、今、博物館から引出して來たのかネ？」

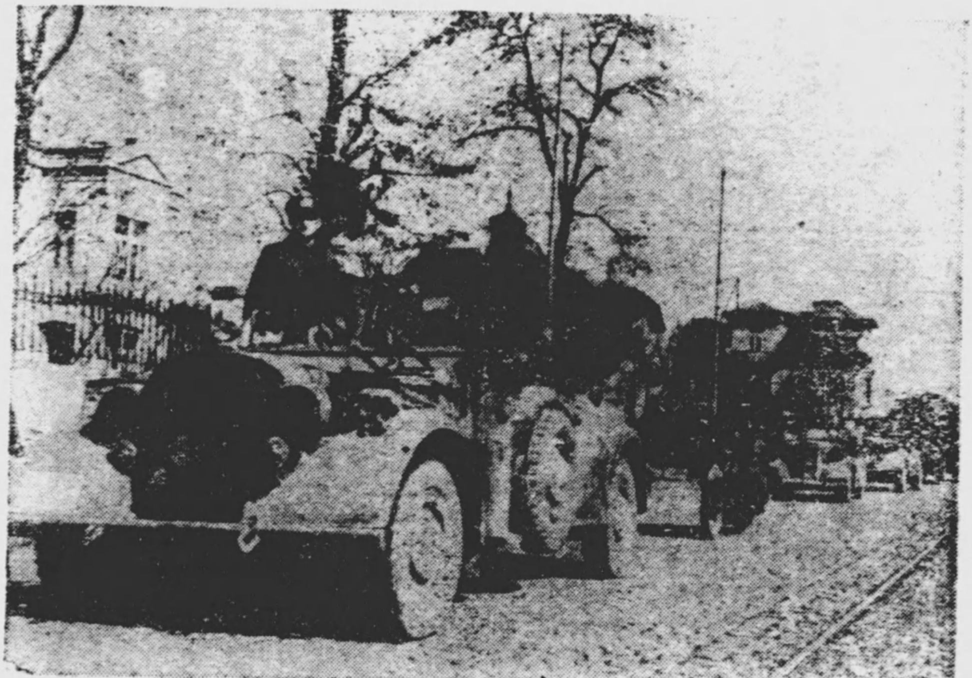
とからかつても、別におこりもせず、

「なアニ、ピレウスまでは十粁たらずですから……」

と、えらく賴もしさうな顏をしてゐる。その顏付に信用して、ともかくも出かけることにする。

ごみ〳〵して穢い下町を西南方へ通りぬけると、ピレウス港へ一直線に通じる自動車道路に出る。この道路に出たとたん、私たちは土煙の煙幕につゝまれてしまつた。獨軍機甲部隊の進軍なのだ。重戰車が通る。輕戰車が通る。裝甲自動車が通る。オートバイが通る。何物をも押し流さずんばやまない機械の流れである。

この流れをやりすごしてから、私の自動車は、またトボ〳〵と賴りない進軍を續ける。もの〻五



ドイツ軍のギリシァ進入

粁も進んだ頃であらうか、果然、前のタイヤがパンクしてしまつた。運轉手がタイヤを取換へてゐる間、私はブラリと横手の空地の方へ歩いて行つた。そこには、一本の檞の木が立つてゐる。初めは注意にとめなかつたが、その側へ行つた時、何氣なく梢を見上げると、下から二米ばかりのところになにやら書いた板が打ちつけてあるではないか。オヤッと思つて讀んでみると、赤ペンキで太々と、

こゝではギリシア兵のみ敢闘
英國兵は知らぬ顔

と落書してあるのだ。

じつさい、今度のギリシァ戰線で、英國軍がギリシァ軍を矢面に立てゝおいて、自分たちは

逃げ仕度に餘念のなかつたことは、ひどくギリシァ國民を憤激させたらしい。ケオス島(アテネ東南)では、ギリシァ砲兵隊が、逃げて行く英國軍隊輸送船に對して砲火を浴せたといはれる位である。

幸ひパンクは一回ですみ、およそ四十分ばかりかゝつて、やうやくめざすピレウス港にたどりつく。すこしごみ〳〵してはゐるが、すでに古くからペリクレス等が力をいれて經營しただけあつて、首都アテネの表玄關としての體裁を整へてゐる。港をいだく三つの丘に、白堊の町並が美しい。

埠頭に立つて見わたすと、まづ、英國軍隊輸送船の殘骸が眼にはいる。完全に撃沈されてマストだけ海面上にのぞかせてゐるもの、半分沈沒してゐるもの、沈んではゐないが火災のため鐵骨を腸のやうにむき出してゐるもの等々、さま〴〵な醜い姿を見せてゐる。輸送船にやうやくたどりついて海上に逃れんとする英國兵めがけて、「ゲーリングの禿鷹」急降下爆撃機が、舞ひおり、飛びくだり、息つく間も與へず猛爆を加へた凄慘な光景が、今なほ眼前に彷彿とするやうである。ダンケルク以上の慘劇といはれるのもむりはない。

……幻想に耽つてゐた私は、突然、背後で荒々しく言ひ爭ふ聲に我にかへつた。振返つて見ると、なにやら風采のよくない男が、運轉手をつかまへてわめきたてゝゐる。氣のいゝ運轉手はなにかボソ〳〵言ひながら、これをなだめにかゝつてゐる。私はつか〳〵と二人の所へ行つて、「いつたい、

なにを囁いでゐるのか？」と尋ねてみた。私がドイツ語をしやべつたのを聞くと、その男は私の方に向きなほり、これもドイツ語で、

「實は、あなたが日本の新聞記者だといふことを聞きましたので、是非あなたに聞いていたゞきたいと思つて話しかけようとすると、こん畜生がよけいなとめだてなんかしますんで、つい、聲を荒立てゝしまつたんですが……。聞いていたゞきたいといふのは、ほかでもないんです。英國人の卑怯さです。奴等は今まで、このギリシァといふ國をさん〲嬲りものにしたあげく、とゞのつまりは、わたしたちを裏切つて逃げてしまつたんです。奴等がこゝをわれがちに逃げて行く時の醜體なていたらくは、あゝ、いま思出しても胸がムカ〱する！」

と、こゝまでまくしたてたが、よほど激情家らしく、それから先は吃つてしまつて、喉のあたりを苦しさうにもぐ〱させてゐる。

私はこの激しい聲を耳にしながら、心はさつきの娘が美しい額を寂しく曇らせて言つた言葉を、靜かに嚙みしめてゐた。

「これが、大國の板挾みになつた小國の運命といふものよ。あたしたちは、この運命を甘受しなければならないんだわ。

一四　綺譚「自動車あと押し物語」

午後八時から、アテネ駐割ドイツ公使の招待晩餐會に出席。

隣りに年若い將校が坐つてゐるので、名前を聞くと、クヌートセンといふ軍報道班付（プロパガンダ・コンパニー）の從軍畫家である。從軍畫家といつても、ドイツ軍のそれは、ほかの將兵と同じく第一線に立つて戰ふのであつて、このクヌートセン君は拔群の功名があつたらしく、胸間に鐵十字章をつけてゐる。

生粹のベルリン子といふだけあつて、きび〳〵した齒切のいゝ口調で、いろ〳〵とおもしろい戰場の體驗談を聞かせてくれた。マケドニア戰線でトルコ人の家にとまつてハーレムを見學した話だとかなんだとか、珍談奇話がたくさん飛び出したが、その中で最も人を笑はせた一件を、こゝで紹介することにしよう。

時は、アテネ陷落の直前。クヌートセン君は、ひとり自動車を操縦して、第一線のすぐ後にぴつたりつきながら、南へ〳〵と急いでゐた。めざすはアテネだ！

突然、モーターの故障……修理の時間なんかない……敵の遺棄した自動車のうち、まだ使へさうなやつを一臺徴發して、强行軍を續ける。

テルモピレー峠の險所で、またも故障、パンク。チェッ！　と思つてあたりを見まはすと、折り

からそこには、釋放されて家路へと向ふギリシァ軍捕虜が數千名屯してゐる。一計を案じた彼は、車の上に立ちあがつて大音聲に叫んだ――

「アテネに家をもつ者は集まれッ！」

たちまち、どや〳〵とアテネ組が前へ出る。一人々々職業調査が行はれる。……その結果、彼は三名の捕虜を、アテネへの同行者として選び出した。その三人とは――、拳鬪選手と自動車修繕工場の職工と、それからホテルの支配人。

なぜ？　まづ、故障自動車を交通の邪魔にならない場所へ押上げて行くには、拳鬪選手の金剛力がいる。次に、本職さんがおてのものゝ修繕をする。それなら、ホテルの支配人はいつたい何の役にたつのか？　そこにクヌートセン先生の深謀遠慮が潛んでゐるのだ。時間の關係上、アテネに着くのはどうも深更になるらしい。眞暗闇のアテネでてつとり早く室と食事にありつくためには、どうしてもホテルの支配人をつかまへておかなければならぬ！

しかもその上に、この三人は、アテネへの歸心矢のごとしだ。空腹に耐へかねてゐることはもちろんであるが、一刻も早く家へ歸つて、家族の者に自分のこの無事な顏を見せてやりたい、戰死も負傷もせずこんなに元氣だといふことを知らせてやりたい――その希望で心は一ぱいなのである。だから、車のあと押しをするにもなにをするにも、恐ろしいほど眞劍で、ふだんの力の二倍位絞り

出すやうなありさま。お蔭で、その後悪路の上でたび／＼故障やパンクがあつたにもかゝはらず、この從軍畫家と捕虜の珍妙な一行は、豫定よりもずつと早く、めざすアテネに乘りこむことができたのである。そして——

「わたしたちがさつそくあたゝかい食事にありつけたことはもちろんですヨ。」

かうクヌートセン君が話をうちきつた時、私は附け加へて言つた——

「あなたはもう一人捕虜を引具して來るべきでしたよ。それは、トルコ風呂のおやぢだ！」

「アハヽヽハッ、そこまでは氣がつかなかつた！」

彼は愉快さうに笑つた。

＊

外は、海のやうに奧深く澄んだ月夜である。月光の中に溺れさうな氣がする。ホテルへ歸らうと何氣なく南方の空を仰いだ私は、月光の中にアクロポリスの丘が黑々と浮き出してゐるのを見出して立止つた。嚴肅な姿である。晝間の南歐的な明るい姿とちがつて、今は、むしろ威壓的にさへ見える嚴かな山容である。激しい自然の破壞力、それにも劣らぬ人間の破壞力に耐へてきたものゝ崇高さがあらはれてゐる。それはまた、人類の知性の不壞なる姿でもあるのだ。

私は身をつゝむ月光を浴びながら、この聖なる丘と相對してゐた。

一五　ギリシア青年の悲憤

五月四日（日曜日）

今日もまた、底の抜けたやうな青空。たゞし風が強い。

今日は、いよ〳〵コリント地峽行きだ。なま〳〵しい戰場視察なのである。

食堂で朝食をとつてゐると、案內役のドイツ公使館員がやつて來る。はたち位の好青年だ。ドイツ人そつくりの顏をし、ドイツ語を正確流暢に話すので、初めはドイツ人かと思つたが、挨拶のとき聞いてみると、アテネ生れのギリシア人だといふ。手に持つてゐる Deutsche Nachrichten fuer Griechenland（ギリシア獨語通信）といふ標題の新聞を見せてくれる。占領後發行されるやうになつたドイツの機關紙である。第一面に大きく、コラコグル新首相の檄「國民に告ぐ」が出てゐる。惻々として人の心を動かす名文だ。

　ギリシア人よ

現實を直視しつゝ、この不幸なる運命を迎へよ！

諸君は、ギリシア軍傳統の名譽を護るために、マラソン、テルモピレーの戰士の後裔らしく勇敢に戰ひ、つひに矢盡き刀折れて倒れたのである。

かくのごとく國民は雄々しく戰つたのであるが、誤れる政策に迷ひ、つひにはその國土と國民とを見捨てた前國王および舊政府のために破滅に陷つたのである——と說き、最後に次のごとく絕叫してゐる。

ギリシア人よ
躊躇することなかれ！
われ等は、全力を傾注して立ちあがらう。
余は、國民各自の熱烈なる愛國心に信賴する！

ギリシア青年は、前國王および舊政府の責任を糺彈した箇所を指さしながら、沈痛な語調で言つた——

「國を滅ぼすものは、無責任な政治家の行きあたりばつたりの政策ですよ。」

表へ出る。

カフェーには、あひかはらずお客がギッシリつまつて、呑氣さうに珈琲をすゝつてゐる。

「カフェーは、朝から晚まで滿員のやうだが、いつたい、この人たちはいつ仕事に出て働くのかネ？」

と聞くと、青年は恥ぢいるやうな面持で答へるのであつた——

「朝から晩まで珈琲ばかり飲んでるんですよ。タッタ匙一ぱいの分量でもいゝから、祖國の運命について考へてくれたらなア！

御承知のとほり、ギリシァは希土戰爭の結果、一九二四年トルコと住民交換條約を結びましたが、この時トルコから歸つて來たギリシァ人の數は百五十萬に及びました。これはギリシァにとつて、實に重大な社會問題でした。その時以來、深刻な失業問題が起つて、アテネに貧民窟がふえてきたのですよ。そしてこの癌を取除いてしまふには、ギリシァ人の個人主義的傾向があまりに强すぎたのです。ほんたうに、わたしたちの國は、いつ立直ることができるのでせうか？」

彼の顏には、言ひしれぬ悲痛な色が浮んでゐた。

私たちはさらに、いろ〳〵な問題について語りあつた。彼の話では、ギリシァ軍はおよそ四十萬人動員したうち、その半數以上が捕虜となり、英國軍は約六萬名上陸したうち、一萬ばかりが捕虜になつたといふ。英國軍はおもに濠洲兵およびニュージーランド兵であつたらしい。

一六　捕虜の「葬列」

九時四十五分出發。

コリントまでは百粁近くあるので、往復分のガソリンをしこたまつめて行かねばならぬ。ピレウ

スの軍用給油所に立寄つてガソリンをもらひ、西方コリントへ向けて國道を走る。

道路はよく鋪裝されてゐるが、兩側はぼく〳〵の赤土。龍舌蘭などの亞熱帶植物が繁茂してゐる。遠くには、オリーヴ樹の畑が灰綠色につらなつて見える。

やがて道は海岸へ出、ギリシァ、ペルシァの大海戰で有名なサラミス島を左に見て走る。道の片側には、ギリシァ軍捕虜の列が蜿蜒として無限に續いてゐる。將校も、兵卒も、みんな疲れきつた顏をして、西から東へ歩いて行く。ペロポネソス半島まで追ひつめられたあげく捕虜となり、釋放されて家路をたどつてゐるのであらう。

捕虜の群は、默々として重い足をひきずつてゐる。無言の行列である。木蔭に腰をおろして、自分ひとりで傷の手當をしてゐる者があるかと思へば、待ちかねて途中まで出迎へに來た家族の者と抱擁してオン〳〵泣いてゐる者もある。夫婦相擁してゐるかたはらで、いたいけない子供たちが呆然と父親の顏を見つめてゐるのもあはれである。

道端は、捕虜の「葬列」のほかに、破壞された戰車、高射砲、トラック、裝甲自動車等等で一杯である。みんな道の兩側にあふむけにひつくり返つて、めちや〳〵に破壞されてゐる。潰走の途中を、ドイツ軍の急降下爆擊機に狙はれて爆擊されたものらしい。ところがふしぎなことに、破壞物は道の兩側にだけ橫たはつてゐて、鋪裝道路には疵一つついてゐない。同行の空軍將校に聞くと、

道路は獨軍機甲部隊の急進擊のためにできるだけ無疵にとつておく必要があるので、急降下爆擊機は、わざと直接目的物を狙はずに道路から或る距離をおいて爆彈を落し、强力な爆風で道路上の戰車などを道端へフッ飛ばしたのだといふ。

砂濱には、水の中に首を突つこんだ自動車があちこち橫たはつてゐる。その沖には、五千トン級の輸送船が、踏みつぶされたブリキ細工のやうな姿を見せてゐる。遁走兵が輸送船にたどりつかうと汀まで乘りつけたものゝ、ドイツ軍荒鷲の猛襲にあつて、船も車ももろともに、あへない最後をとげたものにちがひない。血まみれになつて呻きたてる聲が、まだ耳に響いてくるやうな氣がする。

南國の暑氣に死骸が腐臭を放つのをおそれてか、死骸はてつとり早くとりかたづけてしまつてあるが、それでも、腐つて蠅の汚なくたかつてゐるのがところ〴〵にころがつてゐる。黑こげとなつた馬の肉片も散亂してゐる。そのまはりには、眞紅の罌粟の花が一面に咲き亂れてゐる。

赤罌粟の原の一隅、一本の榭の木の下に、空軍の一團が集まつてゐる。何事かと思つて見れば、墓標のかはりに燒け折れたプロペラーを立て、一同頭をたれて哀悼歌「われにひとりの戰友ありき」を低く合唱してゐるのだ。不幸こゝで墜落、戰死をとげた空の僚友のために、さゝやかな野邊の送りをいとなんでゐるのであらう。私も車中から脫帽して、恭々しく勇士の冥福を祈つた。

野原、海岸いたるところに、ドイツ軍部隊が分散して野營してゐる。猿股一つの兵隊さんたちが、

健康さうに陽燒けした赤銅色の胸や背を見せて、晝寢をしたり、洗濯をしたり、海水浴をしたりしてゐる。オリーヴの樹蔭でなにやらひとりほくそゑみながら手紙を書いてゐる兵隊は、きつと故國の愛人へ華々しい武勳でも知らせてゐるのであらう。屆先は、ベルリンか、ミュンヘンか、それともまた、ティロルの山中か？

罌粟の原は、いつのまにか野薊の原にかはつてゐる。汀近くまで野薊の花におほはれてゐる。

野 薊 の は ら 丘 に つ ゞ き 海 に い る

捕虜の「葬列」は、依然として續いてゐる。默々として續いてゐる。沈默の流れだ。

ひつくり返つた戰車、自動車の列も續いてゐる。氣がついてみると、それ等の車のタイヤは、一つ殘らず全部きれいに取去られてゐる。すばらしい早業だ！　さすがにドイツは廢品回收の本家本元だけあると感心する。

自動車は、斷崖の中腹を縫つて走る。眼下には、エジーナ灣が碧々とひろがり、その上に、エジーナ島をはじめ大小無數の島嶼が浮んでゐる。ベルリンで北歐的な生活環境の中にゐる私にとつては、この明るい地中海的風景に突然ぶつつかると、まつたくめまひを感じる位だ。大きな驚異である。

一七　落下傘部隊の勇士と語る

自動車はやがて、同じ方向へむかつて進む機械化部隊に追ひつき、これを一つ〳〵追越し始める。一臺、二臺、三臺、四臺……と、初めはすぐに全部隊を追越してしまふものと思つて、丹念に計算してゐたが、途中でたうとう匙を投げてしまつた。驚くべし、ぎつしりつまつた隊列で實に四粁以上も續いてゐるではないか！　おそらく、新作戰地へ向つてゐるのであらう。

へと〳〵になつてやつとこの隊列を追ひぬいたと思つたら、私たちの前には、もうかの有名なコリント運河が大きな口を開いてゐた。運河にかゝる唯一の鐵橋が爆破されてゐるために本道はとほれないから――と警備の歩哨に敎へられて、應急架設の軍橋をわたり、でこぼこの道をはねかへりながら進む。ひどい赤土の埃だ。

こゝはもうペロポネソス半島である。西の方遠くには、ヴォイディア、オロノス、ケールモ、チリアなど二千三百米級の山々が、今なほ白雪をいたゞいて聳え立つてゐる。しかし、この地峽一帶は平坦な草原で、無理をすれば飛行機でも着陸できるやうな地勢である。落下傘部隊の作戰地としては、けだしおあつらへむきの場所である。ドイツの落下傘部隊も、おそらく、この附近に飛降りたものであらう。

午後二時、めざすコリントの町に着く。貴重な古蹟などによつて歴史的には有名であるが、現在は、人口一萬にもたらぬさびれた町にすぎない。こゝには、四月二十六日午前七時半、コリント地峽附近に飛降りて敵軍の退路を遮斷し、英國兵一千名を捕虜にしたドイツ落下傘部隊が幕營してゐる。さつそく、一人の若い落下傘兵をつかまへて、當時の模樣を聞いてみる。

彼の話によると——

コリント奇襲の命令がくだつた二十六日早曉、まづ戰鬪機と急降下爆擊機が出動し、戰鬪機は果敢な機銃掃射で、急降下爆擊機は得意のダイヴで、大地も燃えんばかりの猛爆をくはへ、敵屛息せりとみるや、間髮をいれず一群の輸送機があらはれて、落下傘兵を一面にばら撒いていつたのである。それでドイツ軍の損害は非常に尠く、ごく僅かの者が落下中射たれて負傷したにすぎない。

「わたしの舞降りたところは靑草の褥で、赤罌粟と野薊の花が咲き亂れてゐました。」

この兵隊さん、なかなか詩人である。

「たゞ、いまだに思ひ出しても殘念なのは、大事な鐵橋を、英國軍の時計仕掛爆彈で爆破されてしまつたことです。」

ともあれ、彼等落下傘兵の働きは、胸間の鐵十字章が示すやうに、拔群である。私は、彼の末ながい武運を祈つて固い握手をかはし、彼等の捕虜にした英國兵の收容所へと車を走らせた。

一八　笑ふ捕虜

捕虜收容所は、町はづれの野原の中にある。鐵條網を無雜作にはりめぐらした中に、千人ばかりの捕虜がゴロ〳〵してゐる。英本國兵、濠洲兵、ニュージーランド兵、インド兵、ビルマ兵、パレスティナ出身のユダヤ人兵等々……さすがに、太陽の沒することなき世界帝國だけあつて、ヴァラエティに富む豪華版である。ほかにユーゴー戰線からはる〴〵ここまで退却して來たセルビア兵もまじつてゐる。

セルビア人はいかにも憂鬱な顏をしてゐるが、英國人は至極朗かである。「捕虜になつたからには、まづ生命に別條はあるまい。自分一個に關するかぎり、戰爭はこれで終つたのだ」といふ面持である。朗かに語り、明るく笑ふ。今さつきまでギリシァ軍捕虜の「葬列」を眺めてきたばかりなのに、こゝには、なんとまた「笑ふ捕虜」がゐる。

たゞ「生きる」といふことしか考へない人間の群である。生きてゐるかぎり、朗かに笑つてゐる。捕虜にならうがなるまいが、そんなことはおかまひないのである。「生きる」、そこにのみ、唯一にして最上の希望があるのだ。

「生きぬくといふことは、モット美しいことだ」――私の耳に、あの機上の對話が響いて來た。

英國兵を一人つかまへて話しかけると、この男はウェールス生れの肉屋である。故郷には、ことし二十四歳の妻と生後六ケ月の赤ン坊が殘つてゐると言ひ、賴みもしないのに懷中から一枚の寫眞を取出して見せてくれる。おもながの美しい細君が、まる〳〵とふとつた男の子をだいてゐる寫眞だ。しばらくジーッと見つめてゐたが、つぶやくやうに、

「この子にミルクは充分あるかなア？」

と言ふ。

やがて氣をかへたやうに、「英國機のベルリン空襲はどうだ？ さぞひどくやられてゐるだらうナ？」と尋ねるから、「英國機は時たまベルリンまでやつて來るだけで、たいしたことはない。被害も、とりたてて言ふほど大きいものではない」と答へると、

「イヤ、そんなことはない。たしかにベルリンは、ひどくいためつけてゐるはずだ。」

と言つて頑張る。

「僕が證人だ！ 目擊者だ！」

と、私は力强く叫んだ。

「ベルリンに住んでゐる僕が良心をもつて言ふことに、斷じてまちがひはない。君たちは自分の國のラヂオ宣傳に迷はされてゐるのだ」ときめつけると、向ふも負けてはゐず、「イヤ、今度の戰

爭では、前大戰とちがつて、逆にドイツ側の宣傳が巧妙で、英國側はいつも馬鹿正直で拙劣だ。だから、信用できるのは、むしろ英國側のニュースだ」と主張する。

私は、別にドイツの辯護をしようといふのではない。たゞ、事實が歪められて、人に誤つた觀念をいだかせてゐることがかいまんできないのである。なにも捕虜なんかと議論をしようと思つて、はるばるこゝまでやつてきたわけではないが、彼等の迷妄は是非とも啓いてやらねばならぬ。

——と考へて、一つ〳〵實例をひきながら、英國側宣傳のかいらくりを説明しだした時、私は、案内の宣傳省員が、自動車の中から大聲で私の名を呼んでゐるのに氣がついた。出發なのだ。

話をうちきつて車に飛乘つた私は、煙草に火をつけながら、なにも眞實を知らない英國兵が、捕虜になつても朗かに笑つてゐるのはあたりまへだと思つた。むしろ、かはいさうになつた。

一九　繡ひかけた刺繡

立木などがしだいに影を長くひきだしてきた。

車のスピードをだして、コリント鐵橋への道をいそぐ。ひろ〴〵とした草原の中の赤土道をまつすぐ進んでゐると、車は急につまづいたやうに止る。まるで落し穴のやうに、運河のわれいめが大地深くきりこまれてゐるからだ。幅は二十五米位でゝもあらうか、幅が狹いだけに深さは幾層倍にも

見え、ほとんど直角にそゝりたつ兩岸の壁は、さながら研ぎすました刀でたちきつたやう。鐵橋は、さつきの落下傘兵が言つたやうに、完全に爆破されて、わづかに兩端に、飴のやうにへしまがつた鐵骨がぶらさがつてゐるばかりである。無殘な姿だ。きりたつた絶壁の先端に立つと、爆破のために地盤がゆるんでゐて、今にも足もとから崩れて墜落してしまひさうである。こはいのをむりにがまんして下を覗くと、はるか底の方、運河の水は深淵のやうに澄んで、鐵骨が數本、魔神の手のやうに突き出てゐる。

橋の袂には、英國軍の高射砲陣地があつたのであらう。破壞された高射砲の殘骸の側に彈丸やいろいろな備品や兵隊の携帶品などが、所かまはずめちやくに散亂してゐる。英國兵の慌てふためいて逃げるかつかうが眼にうつるやうだ。

南歐の夕陽は、あかくと新戰場を照してゐる。

私は、なにかしら心をひかれるものを感じて、上等な英國製煙草の空箱や罐詰などがちらかつてゐる草むらのあたりを低徊してゐた。

フト私の眼にとまつた物がある。體をかゞめて拾つてみると、一枚の細長い布片である。長さは八十糎、幅は十糎ばかりだ。それだけなら何の奇もないが、この布片には刺繡がほどこしてある。中央に黃色の絲で王冠がかゞり出してあり、その下に赤色でリボンをあしらつて、そのリボンの中

に、黑絲で Faithful and Firm 誠實堅固と繡つてある。また、王冠の左側には黃色の絲で good と繡つてあるが、それと對稱形をなすべき右側には、たゞlらしい字が半分繡ひかけてあるばかりだ。そのエルの字のところには針がさしてあり、その針には、まだ二十糎以上も絲が殘つてゐる。

これはいつたい何であらうか？　右側には何といふ字が繡はれようとしたのであらうか？

私の英語の知識では、good luck（幸運）といふ字しか想像できない。すなはち、lの半分とあとの三字を殘したまゝ、この刺繡は未完成に終つてゐるのだ。日本の千人針をまねたものが、この頃歐洲でもちよい〳〵行はれてゐるといふことを聞いたが、「誠實、堅固」とか「幸運」とかいふ字句の選び方からみて、或ひはそのやうなものではなからうか？　しかし、それにしても、兵隊自身が刺繡をするとは、またどうしたわけであらうか？

なにかほかに判斷の材料はころがつてゐないかと、好奇心にかられながら、私はなほもその附近を丹念に探し求めた。やがて私は、布片の發見場所からおよそ二米ばかり離れたところで、とりちらかした紙屑にまぎれてゐる一葉の寫眞を見つけ出した。名刺形の小さい寫眞で、その中には、二人の男女がテニス服でネットの前に睦じく立並んでゐる。男は二十七八、女ははたちを一つ二つ越えたところであらうか。二人とも、貴族タイプの氣品のある容貌である。署名はないかと思つて、裏をひつくり返してみたが、スミスといふオックスフォードの寫眞屋の印章が薄くおしてあるだけ

だ。

この二人がオックスフォードに住んでゐることはだいたい想像がつくが、そのほかには何の手懸りもない。だいいち、この寫眞と布片の持主が同一人であるといふことすら、これを實證する何物もないのだ。たゞ、二つとも二米ばかりの近い距離の中に落ちてゐたといふだけである。

私の空想は、しかし、こゝに一つのストーリーを作りあげた——

この二人は、オックスフォードの上流家庭に育つた愛人同志である。男は、バルカンの風雲急を告げるとともに、故國を離れて遠く出征の旅へのぼることゝなる。女は、別離に際して、男へ針と糸巻を贈り、戰陣で無聊の時は刺繍をしながら自分のことを思ひ出してくれと頼む。男は、約束を守つて、時折道具を出しては繍つてゐたが……。

ともあれ、この物語の主人公は、いかなる運命にみまはれたことであらうか？　刺繍に「幸運」を祈つたかひあつて、無事に逃げ去ることができたであらうか？　それともまた「幸運」を未完成に棄てた運命そのまゝに、武運つたなく若い生涯の幕を閉ぢたことであらうか？

誰も知る者はない。

殘陽は無心に、コリントの野を照してゐる。

＊

（なほ、私はこのコリント地峽で、ドイツ軍がバルカン作戰中用ひた唯一の、劃期的な新戰術の跡を見ることができたが、軍機に屬するため、こゝに發表できないのを遺憾とする。）

＊

歸途を急ぐ。

道路の半壞して狹くなつた地點にさしかゝつた時、私たちの車のすぐ前を先行してゐた馬車が、すれちがふドイツ軍の自動車と接觸して谷底へ墜落、乘つてゐたギリシア軍捕虜たちは車外へ投げ出されて氣絶してしまつた。もし、私たちの車がもう數米先へ行つてゐたら、スピードがついてゐるだけに烈しく轉落して、私たちの命はあぶなかつたであらう。きはどいところで命拾ひをしたわけだ。ホッと胸をなでおろす。

さすがに疲れが出てきて、コックリ〳〵居眠りをする。醒めた眼に、南歐的な風景がさやかに美しい。海沿ひに白壁の家が多い。

しろき壁赤罌粟の花あをき水

熱海、伊東間そつくりの海岸道路を走ること二時間、夕方の七時近くにアテネに歸りつく。アクロポリスの姿が、瞑想する哲人のやうに尊い。

二〇 別離のうた

いよ〳〵、あすは出發ときまる。

アテネがすつかり氣にいつてしまつた私にとつては、別離の情の惻々として迫るものがある。すくなくとも、アクロポリスは、是非もう一度訪れたい。

ヨシッ、徹夜だ！

私は決心した。出發前に、朝早くアクロポリスへ登つてやれ！

ホテルの室で、荷づくりをしたり、日記をつけたりする。……そのうちに、體がなんだか痒くなつてきた。「オヤッ、をかしいゾ！」と思つて裸になり、肌衣などを丹念にしらべると、はたせるかな、大きな南京虫があらはれて出た。さつそくひねりつぶしたが、その時、私は、「久しぶりだなァ！」と、切られ與三もどきの懷舊の情を禁じえなかつた。思へば、南京虫とは、高等學校の寄宿寮を出て以來八年ぶりの邂逅なのである。衞生設備が完備してしかも寒い氣候のドイツへ來てからは、南京虫といふ名前が頭から消え去つてゐた。ところが今度、南歐の不潔なところへ來たおかげで、南京虫と久々の對面をする光榮に浴することができたのだ。きつと、これも今度の從軍旅行の一つの思ひ出となることであらう。

＊

五　月　五　日　（月曜日）

午前四時半——そろ〱あたりが明るくなつてきたので出かける。

舊王宮前の廣場まで來てアクロポリスを見上げた私は、朝陽を受けて金色に輝いてゐるパルテノン神殿を見出して、思はず歡喜の聲をあげた。日中に見るおちついた姿、夜に見る嚴かな姿……とちがつて、いま見る朝のパルテノンは、華やかな姿である。ペリクレス當時の黃金時代を偲ばせるにたるきらびやかさをもつてゐる。

走るやうにして丘の入口まで登りつくと、門衞が、「ドイツ軍人以外は、午前八時まではいれない」と言ふ。私は諦めず、「自分はドイツ軍に從軍してベルリンから來た者だが、今日歸ることになつたので、是非もう一度鑑賞して行きたいのだ」と熱心に賴みこむと、こちらの熱情が通じたか、特別に門をあけて入れてくれた。

曉のアクロポリスは、警備のドイツ兵數名を除いては人影もない。寂としてゐる。

神殿を心ゆくばかり鑑賞した後、丘の北壁上に立つて見わたすと、眼下には、まだ夜の深い眠りから醒めきらぬアテネの街が、なにか放心したやうに、くすんだ灰色の屋根を見せて橫たはつてゐる。この薄倖の街をジーッと見つめてゐるうちに、私は、ひごろ愛誦する牧水の歌を、口ずさまず

に居られないやうな氣持になつた。

幾山河越えさりゆかば寂しさの
　はてなん國ぞけふも旅ゆく

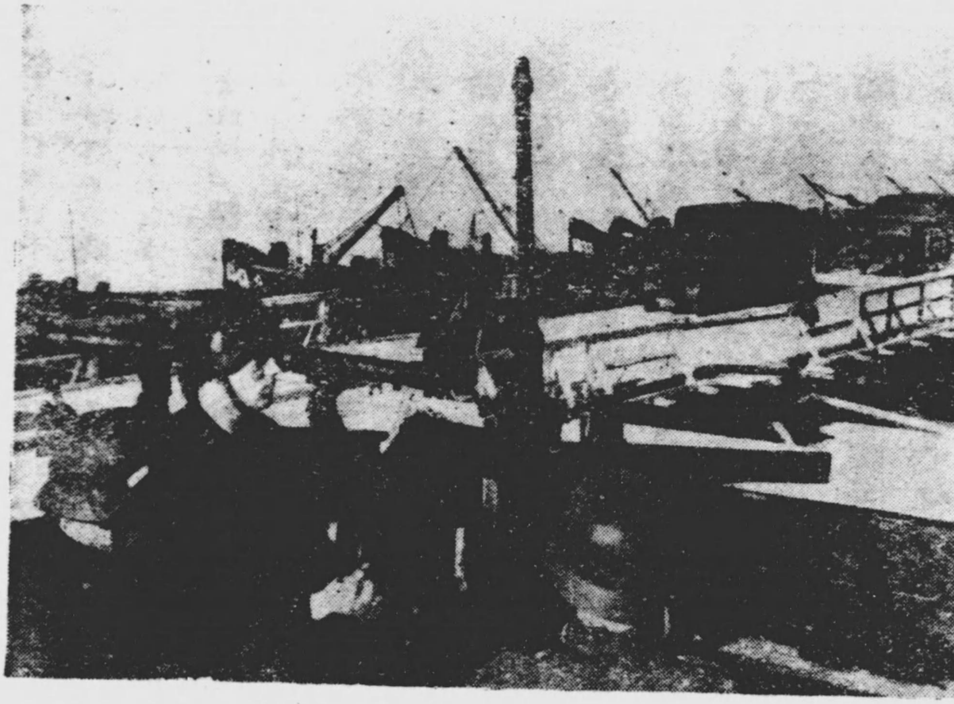
それは、深く、強く、はてしない漂泊の思ひであつた。

＊

午前九時半、タトイ飛行場離陸。今日はブダペストまで飛ぶ豫定だ。
エーゲ海の上空を飛ぶ。下を見おろせば、濃紫に深々と澄んだ水――高貴な色だ。點々と浮ぶ島々は、もうまつたくの夏化粧で、いきな浴衣模樣をくりひろげてゐる。岩に戯れる白浪は、人魚が遊んでゐるやうだ。
十時五十分、サロニカ飛行場着陸。給油と晝食の後、午後零時四十分離陸。
ゆうべは一秒も眠らずに徹夜したので、けふは機上でグッスリ熟睡。空には夢もないとみえる！

二一　ブダペストの一夜

眼がさめてみると、眼下には、ドナウ河が艶やかに流れ、それに跨つて人口百五十萬のブダペスト市がひろ〴〵と横たはつてゐる。美しい都だ。



ドナウ河の架橋と進軍

午後四時半、市東方二十粁の軍用飛行場に着陸。氣のいゝハンガリーの兵隊が大勢寄つてきて、さかんにサインをせびる。

ドナウ河の中に浮ぶ、マルガレート島のホテル・パラティヌスに投宿、さつそく硫黄泉の風呂にはいつて汗を流す。水不足のアテネで一回も風呂にはいらなかつたゞけに、そのありがたさはまた格別である。浴室に、どこからか美しい小鳥の聲が聞えてくる。

食後、夜の散歩に出る。燈火管制がないだけに、街は煌々と明るく、ドナウ河面に映ずる灯があでやかである。ブダペストで私を喜ばせたのは、おいしい料理よりもなによりも、この明るい夜の街である。一年半以上燈火管制の漆黒の夜の中に暮してきた私にとつては、むしろ頭

が混亂するほどの明るさだ。「明るい夜もあつたのだなァ！」と思ひ出す。

アリゾナといふここ一流のキャバレーにはいる。純然たるパリ式だ。名前は忘れたが、モンマルトルのなんとかいふキャバレーそつくりである。女レスリングがある。薄い水着一つでとつくみあひ、しまひには、髪の毛をむしりあふまねまでやつてみせるのだからさういふたうなものだ。私は、これを見ながら、ベルリンの生活が、いかにきまじめで健全であるかを思つた。またそれでなければ、戰爭にも勝てないと思つた。

二二　ハンガリー軍の凱旋

五月六日（火曜日）

五時起床。窓外に、新綠の葉が光つてゐる。

溫泉の朝風呂にはいり、香り高い珈琲で朝食をすます。

見物と買物に街へ出る。物價は高いが、品物は豐富である。

市の中央に「自由廣場」がある。こゝにはハンガリー國旗が半旗に揭揚され、その下に圓形の花壇がつくつてある。花壇の眞中には赤、靑、黃、いろとりどりの花で大ハンガリーの地圖が描きだされ、舊領土の失地を明らかにしてゐる。その地圖の周圍には、これも花で次のやうな誓ひの銘が

書かれてゐる。

われ　神を信ず
われ　祖國を信ず
われ　永遠なる神の正義を信ず
われ　ハンガリーの再興を信ず
アーメン

國民に自國の歴史的な失地を敎へ、その回復を誓ふ大ハンガリー主義精神のあらはれである。そして、これ等の失地が全部回復され、大ハンガリー主義の理想が實現した曉に、初めて半旗が竿頭までひきあげられるのである。

實に、徹底した國民敎育である。凄烈な民族的誓願である。

深い感慨にうたれながら、自由廣場から循環道路の方へ行くと、群衆が道の兩側に人垣をつくつて、雜沓を極めてゐる。通すがりの人に何事だと聞くと、ハンガリー軍がユーゴースラヴィアから凱旋して來るのだと言ふ。さつそく、人垣の中にもぐりこんで見物することにする。

午前九時、瀏喨たる行進曲とともに、ハンガリー軍が循環道路を堂々行進して來る。主として機甲部隊である。往路、機上から見た部隊かもしれない。落下傘部隊も、華々しく進軍して來る。兵

隊の顏は、みんな晴やかだ。

歡迎の民衆は、失地回復の任務をはたして凱旋して來たこれらの勇士に、心から熱烈な歡呼をあびせてゐる。涙ぐんでゐる者すらある。

この感激の雰圍氣につゝまれながら、私は今さつき見てきた半旗と大ハンガリー地圖とを思ひ浮べてゐた。

あれほど悲壯に失地回復を誓つたハンガリー國民が、その目的の一部を達した歡喜の情は、私も充分に共感することができる。しかし、回復すべき失地は、まだ／＼たくさんいゝ殘つてゐる。たとへば、ルーマニアとの領土調整問題も、まだ終局的には解決してゐない。しかも、失地回復を冀願する國は、決してハンガリー一國のみではない。東南歐のあらゆる國々が、それ／＼に「正當」な失地回復の要求をひつさげて、互ひに機會を窺ひあつてゐるではないか！　茲こゝしき前途ではある。はたして、あの半旗は、いつの日か竿頭までひきあげられることであらうか？　また、かゝる日がいつたい來るものであらうか？

私は、東南歐のかなしき宿命を思はずには居られなかつた。

――凱旋部隊の行進は、なほも續いてゐる。歡呼の聲は、ます／＼高くなるばかりである。

二三　歸　還

午後一時四十五分、ブダペスト出發。いよ〳〵最後のコースだ。スロヴァキァ上空を通過する頃から、風が出、密雲があらはれ、なか〳〵難航である。天候は、しだいに惡くなる。寒くなる。

幸ひ事故もなく、五時五十分、シュターケン飛行場に着陸する。スーツケースをさげて地上に降り立てば寒さがぞく〳〵身にしみる。

南歐のあたゝかさに比べて、これはまた、なんといふ寒さだ!

私は、外套の襟を立て、前を深く合せた。

思へば、ながい、波瀾に富んだ從軍行であつた。飛行距離四千粁、飛行時間およそ二十時間、上空通過國六ケ國、歐洲大陸を南北に貫いて飛んだわけだ。きのふまで地中海の薫風に吹かれてゐたのに、けふはもう、朔風の中に曝されてゐる。寒いはずだと思ふ。

ベルリン市内への自動車を待つて、格納庫の前に立つてゐると、電信士Wが近寄つて來て、

「あなたにせつかくいたゞいた軍票で、なにかいゝ記念品を家内に買つて歸つてやりたかつたのですが、買物が非常に制限されてゐるため、思ふやうな物が買へなくて殘念でした。しかし、いくら

ませう。どうもありがたうございました。」

と、あらたまつて禮を言ふ。そしてていねいに別れの挨拶を述べた後、カチーンと踵を合せる敬禮をして去つて行つた。

その隆々として逞しい後姿は、なにかしら力強い、たのもしいものを感じさせた。「どうしても生きぬきたい」とは言ひながらも、イザとなれば、喜んで挺身敵中へ飛びこんで行く精神の强さを感じさせた。

こゝドイツには、快い南風の囁きはない。けれども、嚴しい北風の試練がある。苛烈な試練に耐へぬいたドイツ精神がある。

わづか三週間でバルカンを席卷し、英國兵を一人殘らず大陸から追ひ出すことができたのは、單にドイツ軍の兵器や裝備の優越に負ふばかりではない。その原動力は、實に、逞しいドイツ精神にあるのだ。

このことを、私は、今度のバルカン戰線從軍でハッキリと知つたのである。

これが、最大の收穫であつた。

我々日本人も、嚴しく鍛へられなければならぬ！　錬成されなければならぬ！

激しい寒風の中に脚をふんまへて立ちながら、私は、かう心の中に叫んだ。

（昭和一六、六、一）

南露戰跡視察記

一　進むドイツのウクライナ建設

キエフが陷落してまだ二週間餘りだといふのに、此處に着いてみると、もうウクライナの建設工作に必死になつてゐる獨軍當局の力强い意氣込みがひし〳〵と感ぜられる。キエフの街全體にはまだ生々しい戰塵が漂つてゐるが、戰場はもう數百粁先のモスクワ郊外まで進み、赤軍の崩壞が云々されてゐる程の情勢なので、この廢墟の中に立つても、戰爭そのものは、それ程現實に感ぜられない。それよりも、燒跡の中から新しい秩序の若芽を吹き出させようと努力してゐるドイツ民族の盛り上るやうな若い生命力が、グッと身近かに迫つて感ぜられるのである。予は約卅名の國際記者團一行と共に、二臺のバスに分乘し、ブルツェミスル（舊ポーランド）からソ聯國境に入り、激戰の跡を辿り乍ら、ベルリン出發四日目にキエフに辿りつくことが出來た。

プルツェミスルから戦車の大遭遇戦が行はれたダブノを通過、ジトミールを經て第一の目的地キエフへと道を取る。キエフに近づくにつれ戰場らしい空氣が次第に盛り上つて來る。急降下機に喰ひ下がられて、まるで玩具のやうに打ちひしがれた五十二噸の怪物戰車を始め、戰車、自動車、馬等の殘骸が激戰の有樣をその儘に表現してゐる。家財道具を手車に積んだ避難民の群は、平和に歸つたキエフへキエフへと蟻のやうに道路を埋めてゐる。かくて我々は幾重にも張り廻らされてゐる郊外の陣地線を越えキエフの街に入る。ソ聯獨特の破壞戰術の跡は、成程市中のあちこちに認められる。キエフの銀座通りレニン街などは半分近く壞されてゐるし、水源地、發電所などは片つ端から叩き潰されてゐる。街の中に約千個の地雷と、六百個の爆藥が仕掛けてあつたが、獨軍が急襲して入城したため爆破に到らず、被害は割合に尠く濟んだといふ。

全體として見ると破壞はたいしたことはない。ロシア獨得のドームを持つた美しい敎會、歷史的なオペラ劇場など、姿だけは昔ながらに聳え立ち、ロシア都市の母と名付けられたキエフは、千年の傳統の名殘りを未だ誇らし氣に止めてゐる。こゝでは兵隊、勤勞奉仕團、トット組織（道路建設班）などの後方組織隊がロシア捕虜等を動かし活潑に動き、破壞の跡もぐん〳〵取片付けられて、四日前からは主な建物には電氣もつくやうになり、ホテルも全部獨軍用ながら曲りなりに開業して居る。町の治安も順調に恢復して、ゲー・ペー・ウーの恐怖政治から開放された市民の顏にも喜色

が溢れ、獨軍の支配にはいつたのをむしろ喜んでゐるやうだ。軍票は一マルク、十ループルで圓滑に流通が始まり、占領後間もないに拘らず不思議な程の平靜さで日常生活が平常に回復してゐる。

一方ドイツの對ソ作戰の一番大きな目標となつてゐたウクライナの農業に對する工作は、此處を中心として行はれてゐるが、ドイツのやり方は、今迄のやうに共産主義による機械化大農主義を止め、土地に限りない愛着を持つてゐる農民の本能に順應して、土地、家畜、農具等の私有を認め、健全大農制に復歸させようとしてゐるのである。この方面の工作に當つてゐる權威者達は、この問題について我々に次のやうに言明したが、ウクライナ農業工作については、これ以上敢へて何物も附け加へる必要はないだらう。

「我々は原則として農民の土地、家畜、農具等の私有を認める、また共産主義が從來行つてゐた機械化大農制を廢止し、健全大農制を採る。」

從つてトラクターの使用を止め、農民には家畜の使用を奬勵し、牛馬の所有數、家族數等から割り出した耕作能力に應じて耕地を割當てる。そしてその收穫の三割は農民に與へ、殘餘は村の財産として差し出させる。若し農民がこの義務を完全に果した上、更にそれ以上の耕作餘力がある場合には、その耕地の收穫に對しては六割の私有を認める。また、ウクライナ内部の農業政策指導は、ドイツ側とウクライナ代表委員との協議で決定する。産物は、優に全歐洲を賄ひ得るといはれ、今

までは共產主義の誤れる政策によつてこの要求を滿すことが出來なかつたが、將來はドイツの指導下に新しい農業方式を採用し、歐洲新秩序建設の大事業に貢獻するだらう。(昭和一六、一〇、一八)

二　復興途上のオデッサ

オデッサ陷落後僅かに四日目予等の自動車が、波高き黑海岸のとある小高い丘の上に達した時、予は一瞬ハッと息を吞んで立ちつくした。オデッサだ！　その空高く無氣味な黑煙が濛々と立ち上つてゐる。戰爭の影なほ濃きオデッサ市街を遠望して、予の心は流石にときめいた。双眼鏡を眼にあてれば、オデッサ海岸の前面には急降下爆擊機のため無殘に破壞された赤軍輸送船が、敗殘の姿を橫たへてゐる。その向ふには、遠目にもそれと判る程破壞されたオデッサの黑焦げの街が燻つてゐる。恐らく貯油タンクが爆破されて燃えてゐるのであらう。

自動車は速力を早めて一路オデッサへと急ぐ。道端には木の香も生々しいルーマニア兵の墓標が立ち並び、その周圍に散亂する赤軍兵士の鐵兜、どす黑い腸を露出してひどい惡臭を發する軍馬の死骸等が、激しかつたオデッサ籠城戰の跡を物語つてゐる。

この悽慘な光景と著しい對照をなしてゐるものは、嬉々として我家への途を急ぐ歸還避難民のはればれしい顏である。しかし、彼等がその家の前に辿り着いた時、其處に彼等を待つてゐるものは

獨ソ戰 獨軍攻勢要圖



南ソ戰爭地域

一體何であらうか。それは住むに耐へないほどに破壞された廢家である。暗然として、今更の樣に戰爭の慘禍を想ふ。

市街の入口には土嚢を幾重にも積み重ねたバリケードが嚴重に張り繞らされ、無數の銃眼が薄氣味惡く覗いてゐる。

バリケードの前には、所謂「モロトフのカクテル」といふ大きな壺が、幾つも〳〵並べられてある。これは壺の中にガソリンを詰め、いざ白兵戰となつた時敵兵又は敵の戰車に投げつけてこれを燒いてしまふといふ、ノモンハンの故智に倣つた赤軍得意の新武器なのである。バリケードの他にも、民家の窓には全部土嚢が隙間なく積み重ねられ、完全な市街戰準備が整つてゐる。

赤軍が撤退の際堤防を決潰して洪水戰術に出たため、道路は水浸しとなり、予等の自動車も幾度か立往生をせざるを得なかつた。街の辻々には洩れなく堅固なバリケードが構築され、市街全體が一つの大きな要塞となつてゐる。民家のガラス窓は殆ど全部破損し、完全な家は先づ一軒も殘つてゐないと言つてよい。

殊に海岸埠頭方面の被害が甚だしく、燒け折れた鐵骨の群が骸骨の樣にニヨキ〳〵と突つ立つてゐる。

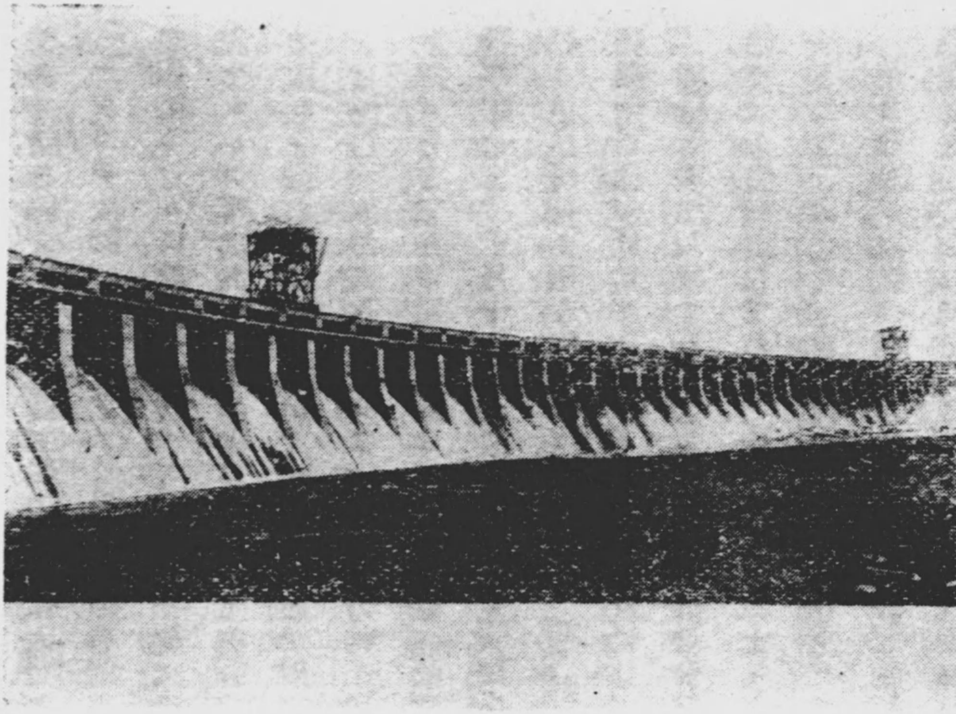
此處に居殘つて籠城戰を目の當り見物した市民や、包圍戰に參加したドイツ及びルーマニア軍將

校等の話を綜合すると、籠城戰の模樣は大體次の通りである。

オデッサ攻擊はアントネスコ羅首相の希望で、ルーマニア軍が主體となつて行ひ、八月初旬から包圍圈を徐々に壓縮して行つて、九月初旬にはオデッサを距る十キロの地點まで進出した。此處にルーマニア軍は九百二十の砲口を揃へて砲彈の雨を降らせた。同市防備の赤軍は南北及び西方の三方面を完全に包圍されたが、東方の海面が空いてゐたため食糧等を自由に搬入することが出來た。しかし、九月に入ると共に段々缺乏の兆が現れ、十月に入つてからは全く斷末魔の相貌を呈してきた。そこで赤軍司令部はオデッサ抛棄の決意を固め、セバストポリから五十餘隻の軍隊輸送船を呼び寄せて、十月十四、十五の兩日に亙り總退却を行つた。これを知つた獨羅空軍は、逃げる輸送船を追ひ爆彈の雨を降らせて、オデッサ沖で總計三萬二千噸を擊沈した。明けて十六日午後三時頃、獨羅兩軍は步武堂々とオデッサ入城を開始し、遂に完全に占領したのである。

獨羅兩軍は入城すると直ちに市街の治安警備に乘出し、殘つてゐる便衣隊の掃蕩に努めたので、治安は大體回復してゐる。時々便衣隊による暴行も行はれてゐるが、これとても市民を動搖させるやうなことはなく、市街は今や早くも復興の途に就いてゐる。

たゞ赤軍が撤退の際無數の地雷を敷設して行つたので、その除去工作は困難を極め、獨羅兩軍は懸命になつてこれに當つてゐる。オデッサには目下ルーマニア軍司令官によつて軍政が布かれてゐる



スターリンが決潰を命じたドニエープルのダム

るが、近くルーマニアの文官總督が乘り込んで民政を敷き、ブグ、ドニエープル兩河岸に出來たトランシストリア總督領（總督府は現在チラスポリにある）の首府になるといふことである。そして、オデッサ港自體は、自由港としてウクライナ地方物資集散の門戶となり、ウクライナ地方經濟開發、延いては歐洲新秩序建設のため重要な役割を演ずるものと期待されてゐる。（昭和一六、一〇、二〇）

三　信教自由に蘇るキエフ

キエフの市民生活は日一日と舊體に復しつつある。否、新しい生活を造り出しつゝある。新生活誕生の陣痛期を體驗しつゝある。ソ聯

第三の大都市として、人口八十萬を數へたキエフも、戰爭の爲め市民の約半分が逃げ去つた現在では、空屋同然の淋しさを感ぜずにはをられない。殊に獨軍占領直後に地雷爆破した爲めに突發した市中心部の大火災は、五萬の罹災者を出して、市の復興工作に重大な支障となつてゐた。しかし、獨軍當局の復興計畫と周到着實な治安工作とは、住民に安心と信頼の念を與へて、殘留市民の生活は漸次軌道に乘り、逃亡市民も、秋の夜の燈火を慕ふ蟲のやうに續々復歸してゐる狀態である。商店は全部閉鎖した儘で一軒も開いてゐないが、市當局がパンを公平に配給すると共に、簡易食堂も開店して榮養價に富んだ安價な食事を供給してゐるので、市民の日常生活もまづ〳〵たいした不自由無しに營まれるやうになつて來てゐる。シャク・バカヂー教授も予との會見に於いて、

「我々は獨軍當局とウクライナ人との協力によつて、必ず市民の生活を改善する事が出來るであらう。」

と言明した。自由に且つ大ぴらに教會を訪れて禮拜出來る樣になつた事は、特に市民を喜ばせてゐる。スターリン政廳の苛酷な宗教政策のために、二十數年間信仰の自由を奪はれてゐたウクライナ人が、再び信仰の故鄕に立ち歸り得た喜びと滿足は、言語に盡せないものがあるであらう。我々は丁度禮拜時に有名なアンドレアス教會を訪れたが、善男善女の群は會堂外にも溢れ、その顏は久し振りに味ふ宗教的陶醉のため興奮の色を示してゐた。口々にボルシェヴィキが逐はれて獨軍が入つ

て來たことに對する喜びを告げるのであつた。これだけでも市民の獨軍に對する感情が良くなつてゐることは確かで、この宗教政策は獨軍宣撫工作の一つとして充分注目さるべき價値があらう。

（昭和一六、一〇、二三）

四　ドイツの手に歸した大戰艦を觀る

キエフからウマンに入り、ウマンからブグ河に沿つて南下すること三百キロ、南部ウクライナの大平原を突走つて我々は待望のニコライエフに入つた。キエフ、ウマン間二百三十キロの道路は全く言語に絕する難行軍だつた。深い泥濘は自動車のタイヤを掴んで放さず、我々は下車して泥まみれになりながら車の後を押さなければならなかつた。漸く車が動き出したかと思ふと、十分もたゝぬうちに又もや泥濘の中で進退不可能となり、暗黑の中で車を前から曳き後から押し、支那の道路と全く同じやうな難行軍を續けたのである。

結局、このコースを突破するのには丸二日かゝり、一時間の平均進行速度は、僅か十二粁といふ有樣だつた。實際、獨軍の機械化部隊が、よくもこの道路を征服することが出來たと思ふ。この惡路と言ふ條件を考慮に入れる時、獨軍の進擊速度は、全く驚異的と言ふ外はない。こゝへ來る迄は、獨軍の東部戰線に於ける戰果に對し多少疑問を持つてゐた予も、豫想外に酷いこの惡路を見て、初

めて獨軍の今迄に勝ち得た戰果を充分に認識し得たのであつた。斯くして、更に三百粁の大平原を走破し、ブグ河の白く光る岸にニコライエフの煙突の高いのを眺めた時、予の胸は流石にときめいた。同港は一七八八年、ポチョムキン大公(グレゴリー・アレクサンドロヴィチ、一七三九—一七九一年)によつて開發されて後、南ウクライナの重要輸出港として發展し、最近では黑海岸第一の大造船所のある軍事的要衝として重要な都市になつた。又それだけでなく、戰時經濟的にも非常に重要な所になつた。

九月十六日、獨軍快速挺身部隊がニコライエフに突入して、建造中の三萬五千噸級主力艦以下八隻の艦艇が無傷のまゝ獨軍の手に陷ちた。これはドイツ側にとつてはこの上もない喜びであつた。殊に比較的海軍力が劣勢で大艦の少ないドイツ海軍にとつては、全く思ひまうけぬ獲物が引掛つたわけである。從つて獨軍にとつてはこのニコライエフで得た戰果こそ、他の如何なる大包圍殲滅戰の戰果をも遙かに凌駕するものであつたのだ。ニコライエフに到着した我々は、早速ドイツ海軍將校案內のもとに、約一時間にわたりブグ河畔のソボルナヤ造船所を見學した。造船所の門を潜つて先づ目に止るものは、長さ二百三十米、高さ三十五米に及ぶ三萬五千噸級主力艦の巨大な姿である。我々は自ら船臺に來つて隅々迄見たが、些かの損傷もなく、全く無傷の儘殘つてゐるのを確認し得た。建艦工事は旣に三分の一以上に進んで居り、現在も着々進められてゐる。この造船所には、以

前は二萬五千名の勞働者が働いてゐたが、獨軍占領前に大部分の者は逃亡してしまつた。しかし、それでも現在二千名以上のロシア人勞働者が從業して居り、復歸するものが日々增加してゐる狀態であるといはれる。我等は更に八千噸級巡洋艦一隻、大型潛水艦二隻を見たが、何れも三分の二以上は工事が進んでをり、損傷の痕も殆ど見當らない。尤も造船所內の附屬設備は赤軍の爲め破壞されてゐるものが多く、總體的に見れば半分以上は損傷を受けてゐると見なければなるまい。要するに、ウクライナ平原を走る獨軍快速部隊の進擊は、赤軍に物を破壞して逃げる餘裕を與へなかつたと見る外はなく、赤軍の常套手段たる地雷敷設を行ふ暇もなかつたらしい。造船所の視察を終へた我々は、ブグ河畔に延長一粁に近い軍港を見學、新にルーマニアの勢力圈に編入された對岸を遠望した。夕燒の空は血を流した樣に赤く、それを映したブグ河の流れも炎々として燃えてゐるかの樣だ。新秩序の焔が燃えさかつてゐる樣な感じである。（昭和一六、一〇、二四）

五　寶庫獨軍の手に歸す

約三週間に亙るウクライナ戰線從軍の結論を一言で云へば、ドイツの對ソ戰爭は想像以上に成功してゐるといふことである。尠くも、ウクライナに關する限りは殆ど完全に成功してゐる。豐饒な黑土が果しなく擴がるウクライナの大平原が、歐洲の穀倉といふ名に背かず無限の富を祕めて橫つて

ゐる。そのウクライナの寳庫が、殆ど傷つかずにそつくりそのまゝドイツの手中に入つたといふことは、何と言つてもドイツにとつて大きな成功であると云へよう。歐洲の穀倉といふ言葉が既に示してゐるやうに、ウクライナの最大の富は穀物であり、次に鐵、石炭及び重工業である。

緩かな起伏をなして北から南へ、東から西へ擴がつてゐる黑土の大平原を眺めた時、予は、この寳庫が將來歐洲新秩序のために果す役割を考へて、深い感慨に耽らずにはゐられなかつた。赤軍が焦土破壞戰術を用ひた跡は確かに窺へるけれども、それは全く失敗に終つてゐることは、實地に、ウクライナを總觀した予の印象である。成程、キエフ、ニコライエフ、オデッサ等の都市は相當の破壞を受けて焦土戰術の犧牲になつてゐるが、肝心の農村は殆んど戰火の跡をとどめずに生產力をそのまゝ殘してゐる。赤軍が退却の際農民を唆かして穀物を燒いて逃げたとの流說が傳へられてゐるが、予がウクライナ地方を南北に貫いて旅行し、具さに視察したところでは、それは十分の一程度も成功してゐないと確言できる。それもその筈、農民にとつては土地、穀物は血であり生命である。いくら赤軍司令部からの命令があつても、ゲー・ペー・ウーの恐喝があつても、大事な穀物を燒棄てることは農民にとつて忍びがたいことであつた。このやうに、ウクライナの寳庫がドイツの勢力圏に入つたことは、たとへ今年の用には立たなくとも、明年以後の歐洲食糧經濟にとつては重大な意義を持つものである。歐洲新秩序の鍵は食糧問題、即ち歐洲が果して食糧の自給自足をなし

得るかと云ふ問題だが、ウクライナ地方の歐洲新秩序參加が、この難問題に對して光明を投ずるものであることは疑問の餘地がなからう。

ウクライナ研究の權威某敎授がキエフで、「ウクライナは單にドイツのみならず、歐洲全體を養ふべき使命を持つてゐる」と力說した言葉こそ、正にウクライナの將來荷ふべき使命を端的に表現したものである。(昭和一六、一〇、二七)

附録

ナチス・ドイツ興隆主要日誌

ナチス・ドイツ興隆主要日誌

一九一八年（大正七年）十一月十一日　コンピエーニュの森にてドイツと聯合國との間に休戰條約調印せらる

一九一九年　六月二十八日　ヴェルサイユに於て媾和條約調印せらる

同　九月　ヒットラー國民社會主義獨逸勞働黨に第七人目黨員として入黨す

一九二〇年　二月二十四日　國民社會主義ドイツ勞働黨綱領發表せらる

一九三二年　七月三十一日　總選擧に於てナチス黨二百三十の議席を獲得す

一九三三年（昭和八年）一月三十日　ヒットラー、ドイツ國宰相に任ぜらる

同　十月十四日　ドイツ、國際聯盟を脫退す

一九三四年　八月二日　大統領ヒンデンブルク元帥薨去す・ヒットラー「民族の指導者、國家の宰相」となる

一九三五年　一月十三日　ザール炭田地方ドイツに歸屬す

同　三月十六日　徵兵令を施行す

同　六月十八日　英國と建艦協定をなし、一〇對三・五の比率を定む

同　十一月二十五日　日獨防共協定伯林に於て調印せらる

一九三六年　三月七日　ドイツ軍ライン地方に進駐す

一九三七年　七月十一日　獨墺協定成る

一九三八年　三月十一日　ヒットラー墺領リンツに

赴き獨墺合邦の第一聲を發した

一九三八年 三月十五日 ヒットラー、ヴィーンに進入す

同 九月九日 英國首相チェンバレン氏飛行機にてミュンヘンに赴き、ベルヒテスガーデンにヒットラー總統を訪問す

同 九月二十二日 チェンバレン氏ゴーテスベルクに再びヒットラー總統を訪問す

同 九月二十九日 ヒットラー總統、英首相チェンバレン氏、佛首相ダラディエ氏及び伊首相ムッソリーニ氏、ミュンヘン總統の家に會合しミュンヘン協定を作る

この協定により墺領ズデーテン地方ドイツに歸屬することとなる

一九三九年(昭和十四年) 一月三十日 ヒットラー總統、大ドイツ國會に於て施政方針を演說す

同 三月十五日 伯林に於てヒットラー總統及びフォン・リッベントロップ外相とハーハチェコ大統領、チュヴルコフスキー外相との間に保護協約成立す

一九三九年 五月二十二日 獨伊軍事同盟伯林に於て締結せらる

同 八月二十三日 モスカウに於て獨ソ不可侵條約調印さる

同 九月一日 ドイツ軍ポーランドに進擊を開始す

同 九月三日 英佛兩國對ポーランド援助條約に基き對獨宣戰を布告す

同 九月十七日 ソ聯軍ポーランドに進入す

同 九月二十二日 獨ソ兩國のポーランド分割協定成立す

同 十一月三十日 ソ芬戰爭勃發す

一九四〇年 三月十二日 フィンランド若干の領土を割讓しソ芬和平條約を締結す

同 四月九日 ドイツ軍デンマーク、ノルウェーに進入し、デンマークは即時降伏し、ノルウェーは對獨宣戰を布告す

同 五月十日 ドイツ軍蘭白兩國境に進擊し、ルクセンブルク、オランダを席卷す

一九四〇年　五月十一日　英國に於てチャーチル擧國一致内閣成立す

同　五月十七日　獨軍ベルギー首都ブラッセルに無血入城す

同　五月二十八日　ベルギー皇帝全軍に停戰命令を發して降伏す

同　六月十四日　獨軍パリーへ無血入城す

同　六月十八日　ヒットラー、ムッソリーニ兩巨頭ミュンヘンに會談し、佛國との休戰につき協議す

同　六月二十二日　コンピエーニュの森にて獨佛休戰協定調印さる

同　九月二十七日　日獨伊三國同盟條約ベルリンにて調印せらる

同　十一月二十日　ハンガリー、二十三日ルーマニア、二十四日スロヴァキア三國同盟に參加す

一九四一年　一月六日　獨ソ通商協定成立す

同　三月一日　ブルガリア三國同盟に參加す

一九四一年　六月二十二日　獨、伊、ルーマニア政府ソ聯へ宣戰を布告す

同　七月十二日　英ソ軍事同盟成立

同　七月十六日　スモレンスク及びキシネフ占領

同　九月二十日　キエフ占領

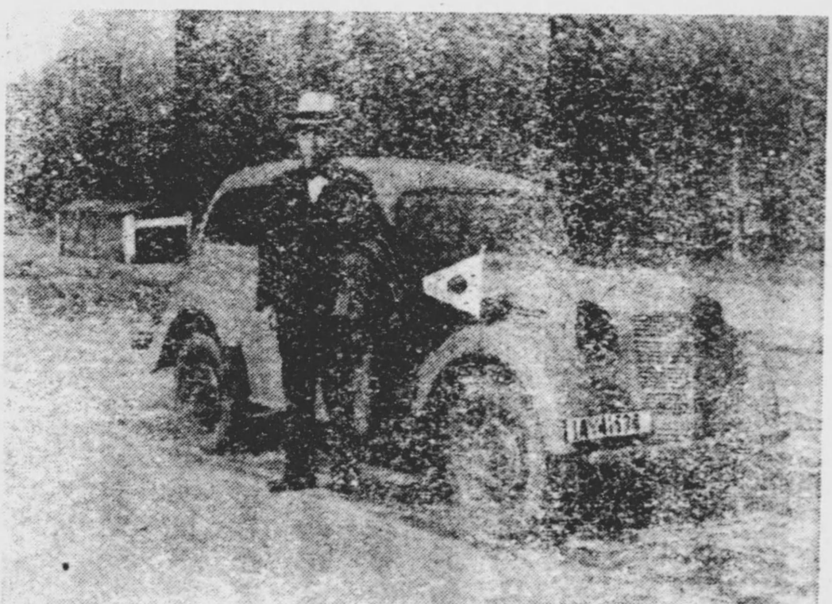
同　十月十六日　オデッサ陷落

同　十一月二十二日　ロストフ占領

同　十二月　寒氣の爲大規模軍事行動停止

跋

著者は昭和十二年春東大法學部を卒業して直ちに社團法人同盟通信社に入社し、翌十三年六月アレキサンダー・フォン・フンボルト財團の給費學生として伯林に赴くこととなつた。當時支那事變起つてより一年、我が軍は既に南京を攻略した後であつたので、著者は六月十四日東京を出發し、中支地方を視察して渡歐の途に上つた。七月三十日イタリアのナポーリ港に上陸、ローマを初めフィレンツェ、ヴェネチア等イタリア文化の代表都市を巡歴し、ブダペスト、ヴィーン、プラハ等を經てドイツ國首都ベルリンに旅裝を解いたのは八月二十五日のことであつ



著者

た。それより主としてベルリン大學に學びながら、同盟通信社伯林支局の仕事に携はつたのであつたが、一年の後には、全然支局員としての任務に專念することとなつた。

著者が歐洲大陸に足をかけたのはドイツのオーストリア併合既に終り、チェコ問題が漸く關係諸國の對立紛爭を激化し來つた時であつて、九月九日には大英帝國の首相チェンバレン氏が始めて飛行機に乘つてベルヒテスガーデンの山莊にヒットラー總統を訪問しなければならぬ事態となつた。昭和十四年三月に至り、チェコ國民は遂にドイツ國保護の下に置かるゝこととなり、これより歐洲の國際情勢は日に風雲の急を告げ、ダンチッヒ廻廊地方問題が導火線となつて遂に獨波戰爭を爆發せしめ、それが發展して、全歐洲を戰亂の渦中に投じ、更に波及して今日の世界戰爭とならしめるに至つた。著者がこの千載一遇の時に當り、動亂歐洲の外交中心とも稱すべきドイツ國首都に留まつて諸般の國際情勢を觀察、考究して通信報國の重要任務を果すことは、新聞記者として本懐とするところであらう。

著者はドイツにあること既に滿四年を踰えた。昨年九月本社より歸朝の命令を受けたのであつたが、我が國と英米との關係が險惡となるに伴ひ、歐亞交通路が障碍を受くるに至り、更に昨年十二月八日大東亞戰爭勃發と共に全く遮斷せられたので、依然ベルリンに留まつて今まで通り職域奉公をなすこととなつた。

而して著者が渡歐以來、多忙なる職務に當りながら、寸暇を偸み、時々の情勢とそれに對する所見とを綴り「改造」「中央公論」「雄辯」「世界知識」「新女苑」並に「帝大新聞」等に投稿したのが、既に十數篇に及んだ。今著者はこれ等の諸論文を纒めて一冊子となしたき希望を申送つて來たので、玆に諸雜誌社の諒解を得て本書の出版を企つるに至つた。固よりこれ等の諸論文が、當初より一定の計畫を立てゝ作られたものではなく、隨時の執筆であつて、その述ぶるところ必ずしも精粗一ならず、長短區々たるものがあり、隨つて述べて盡さゞるところ、論じて及ばない點もあるであらう。併し、それ等諸篇の間には、自ら歷史的發展の關係が存し、先後微妙なる聯絡のあることは勿論であつて、殊に盟邦ドイツの現狀を知るに益するところあるべく、隨つてまた彼我兩國民の相互理解を助くるものあるであらう。これ等の諸點は、偏に讀者の諒察を乞ふ次第である。

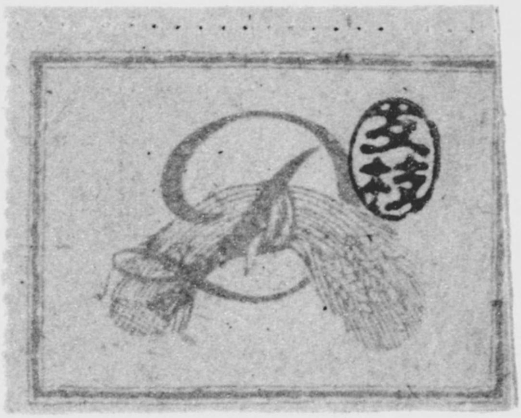
本書出版に際し、社團法人同盟通信社の先輩及び同僚各位が著者に與へられる不斷の高誼庇護に對し、更に著者が多年誘掖指導を蒙れる情報局次長奧村喜和男氏が特に序文を寄せられたる懇情に對し、衷心感謝の意を表すると共に、著者の處女出版を快諾せられた第一書房の厚意に對して深く謝意を表する次第である。

昭和十七年十一月三日　明治の佳節に

父　友枝高彥

戰ふ獨逸

出文協承認
ア340033號



昭和十八年一月十五日印刷
昭和十八年一月二十日第一刷發行（五千部）

（停）定價一圓八十錢

著作者　友枝（トモエダ）宗達（ムネサト）

刊行者　東京市麴町區三番町一　長谷川巳之吉

刊行所　東京市麴町區三番町一　第一書房
振替東京六四二二三
電話九段一四一五
三三四四

會員登錄番號
一一六五〇八

配給元　東京市神田區淡路町二丁目九番地　日本出版配給株式會社

印刷者　東京市京橋區銀座四丁目四（東京六〇）株式會社細川活版所

＊落丁・亂丁の際は直接本社にてお取替へ致します。

